

364
360



2

0038711-000

特220-101

恋愛と性欲

沢田順次郎・著

新興社

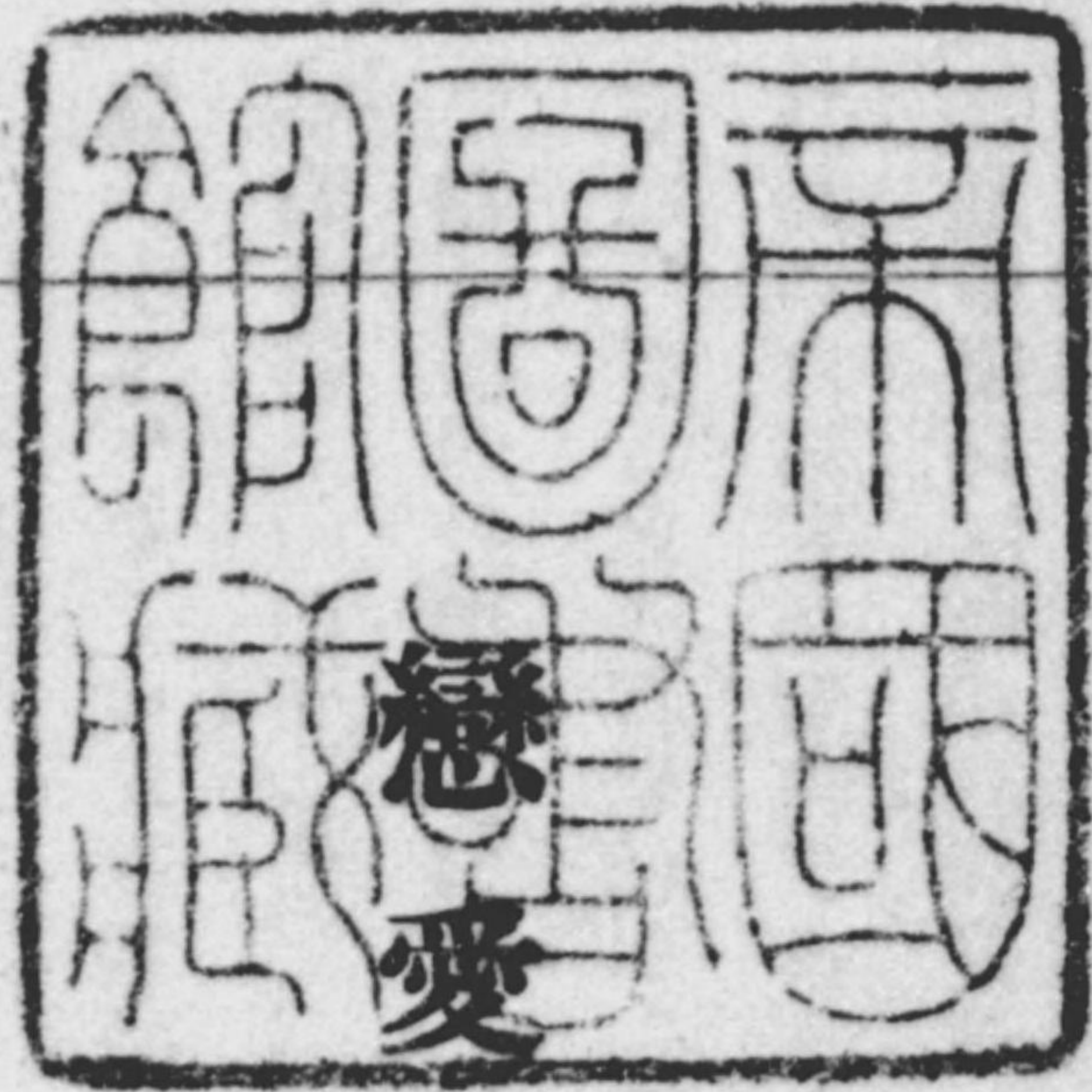
昭和10

AGG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

361

特 220
101



と
性
慾

澤田順次郎著



自序及び例言

此の書は、「性の研究叢書」第一巻として、性慾と性交及び其の節制法に就いて、新に試みた研究の發表である。これまで予の性慾に關して、著はした書は少なからずあるが、併し最も科學的に、さうして最も綜合的に、論述したものは無かつた。それで何時か此の性慾問題に就き、理想的の筆を下して見たいと、期待して居たけれども、時機を得ないので、遺憾に思つて居た。ところが、幸ひ正文社長袖山理夫氏は、予と同感の士で、さういふ著書を望んで居られたので、氏の助力の下に、此の綜合的性の研究叢書五十巻を、出版することになつたのは、予の欣喜に堪えざるところである。

斯様な譯で、性の研究叢書は新に生まれて來たのであるが、何にしる人生の根本問題、否な宇宙永劫の大問題たる、性慾の原理を研究するのであるからして、さうするには、勢ひ部分的解説法に基づいて、説述しなければ、其の目的を達することが、難

かしからうと思はれた故、本巻に於いて先づ第一に、性慾と性交との關係を選び、之れを徹頭徹尾學術上から瞰取して、其の内容を演繹したのである。それ故従來の書とは、越きを異にして居るが、併し、予が特に重きを置きたる性交と性慾との出發點や、性交の分析や性感の由來及び進化に關すること等に就いては、一つも他人の精髄を嘗めたことなき、全く新しき研究であるから、創作として發表するを憚らぬと信ずるのである。

さて性慾といへば、一も二もなく卑しきもの、特に性交なる文字は、猥褻にして甚だ恥づべきものとのみ思惟せる時代——予が初めて性交の語を用ひたとき、或る人が之れを春畫の説明なりと、罵倒したといふことを聞いて、其の無識に驚いたことがある如く、實際此れ等の語は、卑猥の代名詞と思ふ外に、何等の考慮もなかつたのである。さういふ人々は、性慾と人生と、如何なる關係を有するか、延いては其が社會に如何なる影響を及ぼすか等に就いても、毛頭知るところなく、たゞ／＼恥づ、羞むもの

として、秘密にして來たのであるが、其の秘密時代——は、疾くに過ぎ去つて、今日には性慾を一科の學術として扱ひ、又、世界の大問題として、社會の各方面より、討究するやうになつたので、愈々眞摯に性慾を研究して、其の根本の眞理を、明かにする必要が迫つて來た秋に臨み、本書の發行は、決して無意味なものでなからうと思ふ。

何事にも、眞面目なる研究は貴くある。予が四十年此のかた没頭し來たれる性の研究は、漸く萌芽して、これから枝葉を伸ばし、花を開くに至るであらうと、之れを樂しみに予は、畢生の力を竭くして、本叢書の大成を期して居る次第である。

尙、本書は、性慾の出發點なる性交に就き、主に此の方面の問題を開拓して、性交反應の影響、過房の害、之れに關聯しては自瀆の害、等を叙説して、不正なる性行爲の、恐るべき結果を來たす觀念を、深刻に與へて、性教育の必要に到着せんとするのである。斯くして學術的研究の傍ら、青年男女の性慾を、最も健全に、最も穩當に導びいて、動もすれば不衛生に流れ、時弊に陥らんとする人々を救ひて、其の危害を未

然に防止せんとするのである。

此の意味に於いて、本書が幸ひに世の父母、兄弟、醫師、及び學校當事者諸氏の顧るところとなりて、其の参考となるを得ば、予の光榮とするところである。

終はりに本書の末尾に添へたる附録は、近時醫界の一問題として、世を騒がしたる若返り法の要旨を、述べたるものであつて、極めて簡單ではあるが、併しスタイナーハ氏の、謂はゆる若返り法の如何なるものなるかを知るには足ると思ふ。嚴密に言へば若返り法は、内分泌とホルモンとの關係から起こつたもので、之れを詳細に述べんとすれば、優に數百頁を要するに依り、之れに關する事實は、別に性慾と生命との關係として、後卷に出す意である。

澤田順次郎謹識

目次

緒論 一

本論 一六

第一章 青春時代と性愛 一六

第一節 春育時代の特徴 一六

第二節 生殖と生活 二〇

第三節 性慾と道徳 二四

第四節 春育時代の危機及び其の研究法 二七

第五節 春育時代に於ける一般の注意 三三

第二章 發情期と年齢及び其の時代に於ける男女の部類 四一

第一節 少年と少女……………四六

第二節 處女……………四八

第三節 貞童……………五四

第三章 身體性・心性及び其の發育現象……………五五

第一節 發育現象の總説……………五五

第二節 發情期と環境との關係……………五九

第三節 内分泌腺の異常に歸因すと早熟と卓越……………六一

第四節 晩發と停止及び白痴……………六七

第五節 甲狀腺及び胸腺の障害より來たる發育不良……………六八

第四章 發情期に於ける男女の性的特徴及び其の變化……………七三

第一節 男女の性的特徴とホルモン……………七三

第二節 發情期に於ける男女の身體的變化……………八二

第三節 發情期に於ける男女の精神的變化……………八二

第四節 感情の激變……………八五

第五節 空想と虛榮……………九〇

第三章 發情期と疾病……………九五

第一節 發情期に起こり易き疾病……………九五

第二節 神經衰弱とヒステリー……………一〇〇

第三節 發情期に多く發見せらるゝ性病……………一二三

第六章 ホルモンと性的特徴……………一二三

第一節 スペルミンとオーフオリン……………一二三

第二節 ホルモンの男女に對する二つの反作用……………一二六

第三節 第二性的特徴の發育と制止……………一二二

第一項 乳房及び骨盤……………一二三

第二項 脂肪と筋肉 一三五

第三項 皮膚の體毛鬚髯及び頭髮 一三六

第四項 音聲及び身長 一三九

第五項 人工にて男女を變換する實驗 一四〇

第七章 青春時代に於ける性の煩悶 一四〇

第一節 性的煩悶の原因及び其の種類 一四四

第二節 頑固なる慢性淋 一四五

例 文學士 O.N.三十三歳 一四六

第三節 誤れる結婚より來たれる悲劇 一四九

例 あき子(假りの名)二十一歳 一五〇

第八章 性愛の意義要素及び近親に對する戀愛の不成立 一五〇

第一節 性愛の意義 一五〇

第二節 性愛の要素 一五二

第三節 近親に對して性愛の成立せざる原因 一六七

第九章 性愛に對する強烈なる刺戟及び性愛と言語 一七〇

この關係 一七〇

第一節 性愛刺戟としての裝飾及び化粧 一七四

第二節 プラトニック・ラヴ 一七七

第一例 三十六歳の婦人 一八六

第二例 三十九歳の婦人 一八七

第三例 四十歳の男子 一八九

第三節 性愛と言語との關係 一八九

結論

..... 一九〇

附 録

接吻と抱擁……………一九七

第一節 接吻の種類及び其の意義……………一九九

第二節 接吻の起因及び性慾との關係……………二〇〇

第三節 洋の東西に行はれたる、接吻の習俗的觀念……………二〇〇

青春時代 戀愛と性慾

【附】接吻と抱擁

澤田順次郎著

緒 論

多くの書籍、雜誌及び言論等の上に於いて、予のこれまで發表し、又、之れに關して、實際に干與つて來たところの性の問題は、主として性の教育、衛生、道徳、犯罪文學、藝術、結婚、賣淫、其の他社會的男女の關係等であつて、可成り廣く、多方面に涉つて居るが、便宜上之れを類別して見ると、大體二つと爲すことが出来る。即ち

一、性慾と

二、性愛と

ち、前者は普通にセックス Sex とし、後者はラヴ Love 又は獨逸語のリーベ Liebe に相當するところのものである。

性慾のことは、本書の第一卷、「男女性慾及び性交の研究」に述べた通りで、性感や、性交等に關することは、略ぼ其の要を竭くしてあるが、併し僅に性慾の一部を耕した許りで、未だ拓開せざる性の荒野は、茫々として、吾人の眼前に横はつて居る。それは性慾の起源や、衝動や、淘汰や、性の決定や、心理や、遺傳や、其の他外界との關係等の如きであつて、それから追々と、筆を進むる心算である。

性愛は、固より性の一部分にして、それと密接の關係を有つて居るものである。それ故茲に、性愛の研究を提出した理であるが、併し性慾にしる、性愛にしる、其の發動には、一定の時期があつて、其の時期に到らなければ、發動することはない。其の時期といふのは、即ち青春時代であつて、老年に到れば自ら衰へて、殆んど消滅し

幼年には未だ發動せずして、僅に萌芽を蓄へて居るに過ぎぬ。

斯様に性慾と性愛とは、密接に相關して、其の激洩と働くところの舞臺は、青春時代である。此の青春時代に於いて、男も女も、物のあはれを知り初め、情を解するに至るのであるが、妙齡は男女の性慾及び性愛を、發動する時期にして、人生の新舞臺といふことを得るのである。併しながら性慾と性愛との出發點に就いては、異論があつて、大體甲乙の二派に分かれて居る。

先づ甲説に依れば、性愛は性慾の基礎にして、愛は萬物を化育する原動力である。特に道徳と、知識とを具有せる人類に於いては、愛に依つて人情を温め、其の温情に依つて、快樂を遂ぐることを得る。此の快樂といふのは、肉體の享樂ばかりでなく、精神の慰安、及び一家の平和に關する幸福をも包括して、其の範圍は甚だ廣くある。併し其の起點は、夫婦の和合にありて、夫婦の愛が、快樂の泉となるのである。繰り返して之れを言へば、家庭の圓滿は、夫婦間に於ける愛の結合に依つて、得らるゝか

らである。故に性愛は、性慾の前に生じ、それからして、性慾が発生したものとすれば、性愛は性の主流にして、性慾は其の支流でなくてはならぬ。

思ういふのが、甲説の本旨とするところで、之れを性愛先發説とて、名づけたらよからうと思ふ。然るに乙説は之れに反して、性慾は、性愛の前提であると論じ、性慾こそ、人生を支配する根本の基礎であると、唱道して居る。之れを前の性愛先發説に對して、性慾先發説といふが適當である。

此の性慾先發説に據れば、夫婦の和合して、圓滿なる家庭を成し得るのは、愛の結合に依ること勿論であるが、併し單に愛情ばかりで、さやうに固く、夫婦の結合し得らるゝものとは思はれぬ。尤も稀れには、精神的愛なるものがあつて、性慾以外、純眞の愛に生くる者もあるけれども、それは極めて少数で、一般は性慾の上に、立脚した愛に外ならぬ。之れを解かり易く言へば、夫婦となるのも、一家を經營するのも、もとは性慾に依つて、人生の享樂を味はんと欲する爲めであつて、子孫の蕃殖と、一

家の幸福とは、みな性慾に基礎を發するのである。故に夫婦の結合は、性慾より發源せる愛情の果にして、其の愛情は、性慾の前に、先發したものでないことを知らなくてはならぬ。それで若しも、夫婦の間から、性慾を除き去ると假定したならば、恐らくは夫婦の愛も、情も消滅して、家庭の破壊を來たすであらう。これは多くの事實に徴して、疑ひなきところである。

右は、性慾先發説の要旨であつて、前説と根柢を異にして居るが、果して孰れが是なるか、將そ非なるかは今、遽かに斷言することは出来ぬ。併し廣く性の上より、觀察を下して、生物界に於ける、性の現象を考ふるときは、乙説は事實に近く、性の根本は、愛よりも情に始まつて、性慾がすべての愛、特に性愛及び精神の、原動力であるかの如く思はるのである。

是れに由つて之れを觀れば、夫婦の和合といふものは、畢竟するところ性慾より生ずるものにして、性慾は一家の和風ともなれば、幸福ともなる。愛は結婚に依つて、

固まるといへる語は金言にして、性愛の性慾より出發したことは、理の當然である。然るに歐米に行はる、結婚は、愛を主として、結婚前に男女の諒解、即ち愛の結合がなければ、それは不幸なる結婚として、若き男女は、結婚前に交際を始むる風が、一般に行はれて居る。併しこれとても、性慾あつての愛である。如何に相思相愛の仲であつても性慾がなければ、愛の結ばるゝ理のないことは、前に言つた如くである。彼の不具なる性器に煩悶して、其の不幸を啣つ者を見よ。彼れ等は、性慾の享樂を味ふことを得ぬと同時に、愛の温情に、浴することもない。何となれば性器の不具者には、性慾の享樂がないからである。

斯かる種の者は、性交不能を運命と諦めて、快樂を他の方面に求むる外に、途がない。それは衣食住に對する快樂であつて、特に食慾が、唯一の慰樂である。世の獨身者に、不具不能より餘儀なくされたもの、甚だ多くあるのは、同情に堪えざるところである。

次ぎに動物界を看よ。種類にも依るが、彼れ等には性慾のみあつても、性愛は未だ發生して居らぬ。尤も或る少數の動物、例へば鳥類——鴛鴦、鶴の類——及び哺乳類——狸々の類——には、雌雄の交情、或ひは親子間の親密にして、其の狀の人に類似せるものもあるけれども、これは性愛の萌芽に過ぎぬ。一般に於いては、純然たる性慾のみにして、性愛は認められて居らぬ。

更に進んで、人に於いてすら、南洋諸島、濠洲、亞弗利加黑人、及び亞米利加印甸等の種族には、性慾のみあつて、性愛の無い者が少なくない。此れ等の事實に徴するも、性愛は性慾の、一步進んだものにして、一家を成し、社會を組織して、共同生活を營むやうになつた者でなければ、見ることを得ざる——發達せざる——ものと考ふるも、誤りがなからうと思う。されば性愛は、恰も美の神と愛の神——ヴェヌス及びダイアナ——とを、一つに合せたる如く、優美崇麗にして、精神界に於ける、最高の極致に達したものと謂ふべく、而かも道徳と知識と相俟つて、光輝を放つものと謂ふも

決して誣言でない。

新様に性愛は、性慾より出發して、高くなつたものであるが、其の性慾を誘成して光輝ある性愛となさしめたものは、知識と道徳とである。之れを性慾の理想化と名づけて、肉體より精神界に入つたものが、即ち性愛である。斯くの如く性愛は、性慾を出發點として、之れと離れざる關係があるので、性愛を研究するには、或る點までは性慾に遡つて、其の根源を突き止めなくてはならぬ。此の比較研究は、甚だ有益なるのみならず、興味深くして、性の研究家に缺くべからざる必要あることを、予は特に告知せんと欲するのである。

さて性愛は、從來の言葉で言ひ現はせば、戀といふところのものであつて、性愛又は戀愛は、近頃の新語である。孰れも普通に知られて居るが、併し此の性愛は性慾と怎ういふやうに異なるものであるか、性愛の性慾から出發したことは、前に一言した如くであるけれども、よく考へて見ると性愛と性慾との間には、密接なる關係がある

と同時に、亦、大なる差異もあつて、之れを明白に判別することは、稍々困難である。

先づ兩者の、輪廓から言つて見ると、性慾は生物学、生理学、及び醫學等の、形態方面に屬して、其の表現が動もすれば、露骨に流るゝ傾きのあるに反し、性愛は哲學、文學、及び歴史等の色彩を帯びて、美しく飾られたる點に於いて、兩者の間に、類似と差異との溝渠が、高く築かれてある。

併し、怎う言つた許りでは、理解し難きに依り、更に之れを説き直すと、次ぎの如くである。

性慾は異性に對する性的感情の發露にして、其の根源は生殖腺——男性の睪丸、女性の卵巢——にあること、既定の事實であるに依り、性慾を研究するには、第一に生殖腺を根據として、内分泌作用即ちホルモンと、性的感情との關係を明かにしなくてはならぬ。次ぎは生殖腺と關聯したる性交器——普通に謂ふところの生殖器にして、

性慾を遂げ、之れを満足する器官——の構造及び作用であつて、之れを審かにするには、性的感情の昂奮する理由を、究知しなくてはならぬ。爾かするには、性慾を挑發する原因として、異性の優美或ひは妖艶なる姿、即ち俗に謂はゆる色香より來たる昂奮——挑發又は補助作用——を必要とする。語を換へて之れを言へば、異性の美貌及び其の艶麗なる姿は、性慾を唆りて、性感をより深く大ならしむる力——偉力又は魅力とでも言つてよからう——があるので、性慾を満足に遂行するには、此れ等の補助作用が、甚だ必要であるといふことになる。

之れに就いて、讀者に質問することがある。賣色婦が常に盛裝を凝らして、客に接するのは、何の爲めであるか。又、婚禮の際、新夫婦が一世一代と着飾りて、式に出づるのは何の故であらうか。或る學者は、女の裾模様は、性慾を挑發する爲めに、出來たものであると言つて居るが、それは外的挑發であつて、內的には緋縮緬といふやうなものがある。或る人の句に

見ても見ぬ振りする緋縮緬かな
見ぬやうにしてもちらつく緋縮緬
緋縮緬虎の皮より恐ろしい

といふのがある。又、支那人の希くは輕羅となりて、君が細腰に纏はんといふのも、同じ意味で、裝飾化粧の、色慾を唆るゝるは、甚だ大である。

斯様に色香なるものは、性慾を助けて、快感を大ならしむるに、缺くべからざるものであるが、此の色香を單に、女色と解してはならぬ。普通に色香と言へば、みな女の色香のやうに思つて居るが、必ずしもそれに限つた譯でなく、男から言へばこそ、女は男を墮落に導びく惡魔であるが、女から見れば、男は、女を蕩かす惡魔である。前者賣色婦などの類であつて、之れに接しなければ、墮落をすることはないけれども、後者は一般の男で、女は少しも油断はならぬ。

斯様に異性の容貌、及び其の裝飾が、誘引器官として、性慾に大なる補助を與ふるに依り、性慾を研究するには、性交器を中心として、容貌及び裝飾等に關する、性的

現象は勿論、肉體美——裸體美——にまで進みて、其の表現と性慾との關係を、講じなくてはならぬ。

然るに性愛を高唱する者には、生殖腺や、性器の如き形態學、及び生理學に超越して、單に異性の美容と、其の精神とに憧憬するものもある。それ故に性愛には、相對的にして、必ず好愛するところの、異性があつて、それが性愛の標目となるのである。随つて、性慾には、色香が性感の刺戟となる如く、性愛には、人情の優し味が、戀の補助となることを、忘れてはならぬ。こゝが性愛の、性慾と異なる第一義にして、性愛の醇化せるものは、精神的愛即ちプラトニック・ラヴである。

更に他の言葉をもつて、之れを言ひ換へれば、性慾はフィジカルにして、堅實なる性の上に、主脚して居る點から言ふと、謂はゆる硬派に屬するものである。さすれば性愛は、メタフィジカルにして、其の内容の美しく、詩化せられたるところ、正しく軟派のものであると謂ふべきである。

併しながら科學上、及び心理學上より言へば、性慾も性愛も、根本の大元は一にして、同じ源泉より、湧出したる流波に外ならぬ。前に性慾を刺戟するものは、色香であつて、性愛を補助するものは、人情の優し味であると言つたが、性愛も色香に依つて、其の情の昂めらるゝ場合が多くある。故に人生の上に、性慾と性愛と、別々にある理のものでないことが、明白である。尙、觀察の仕やうに依つては、性慾は性愛より出て、性愛は亦、性慾を基礎として、發展したるものとも、言ひ得ること、既に本書の、冒頭に言ひ置いた如くで、孰れの點より見ても、性慾と性愛とは、共に相關して、一歸不二のものであることは、澤庵和尚の

雨後雪や米と隔つれど

落つれば同じ谷川の水

といへる名歌と同じである。

斯くの如く性慾と、性愛との本は、一つの泉であるが、其の末が流れて、人生の上

に、種々の波瀾曲折を生ずるに至つたのである。それで谷川の水なる、性慾の本源といふものは、そも如何なるものであるかといふに、これは生物界に於ける雄雄の起源其の發達、淘汰、及び人類に於ける男女の關係等、すべて性的現象を表するもので、オリジナル・セックス——又單にセックス——とでも名づけたら宜からうと思ふ。此のオリジナル・セックスから分かれたものは、即ち肉體性と、精神性とで、便宜のため之れを表解すれば、次ぎの如くなる。

原始性 Original Sex
 肉體性 Physical Sex 又單に體性
 精神性 Metaphysical Sex 又單に心性

右に示したる性の分解表は、予の考案になれるものであるが、其の肉體性と、精神性とも、亦、各々區別がある。其の主なるものは、セキジュアル・インターコース及びセキジュアル・センスにして、予は之れを性念又は性思と名づくる。普通に謂ふところの性慾は、これに當つて居るから、予は此の性念なる語をもつて、性慾に換

へんとするのであるけれども、性慾なる語は、從來費用し來たれるものであつて、今急に變更するときは、不便を醸す恐れがあるので、暫らく習慣に従ふことにした。

次ぎは精神性の、セキジュアル・ラヴにして、普通に謂ふところの性愛、又は戀愛といふものこれである。而して此の肉體性と、精神性とを、概括したものが、即ち廣義のセックスであつて、之れを研究する性學 Sexology —— Sexual Philosophy に、性科學 Sexual Science と、性文學 Sexual Literature との二種ある。前者は即ち肉體性に屬するものにして、後者は精神性に屬する戀愛である。

斯くの如く性慾と性愛とは、本源同一のもので、科學としては、極めて正しき命名であるが、從來の習慣として、性慾といへば學術的なるもの、性愛といへばローマンチックなるもの、如くに、思考せられた因襲があるので、之れを調和して、性慾と性愛とを、一つの型に嵌めて論ずることは、頗る困難である。其の故如何となれば、性慾も性愛も、根本は同一であつても、流波の色彩は異なつて、各自特色があるからで

ある。

之れを事實の上に徴するに、多くの例がある。彼の一目の戀といへるもの、又は情死の如きは、其の類にして、此れ等は普通の性慾とは、異なつて居る。一目の戀とは文字の通り、一目見た許りで、直ぐに戀するといふことで、之れを俗語に言ひ直すと一目で惚れるといふことである。昔の小説や傳説などに、恚ふいふ話が多くある。例へば深窓のお姫さまが、花見などで狼籍に出逢つた際、身の危急を救ふて呉れた。若き武士を見染めて、病の床に臥すといふやうな類で、これには自分の危きところを救はれた恩義も混じて、其の恩人を慕ふのだとも言へるが、決してたい恩義ばかりでなく、其の慕ふ心の中には、若武士に對する、いとし可愛いといふ情が、お姫さまの心の中に潜んで、それが若武士に對して働くのである。

恚ういふ例は、昔の本に多くあるが、一目の戀なるものは、決して恩義に關したものでなく、單に一目見た許りで生ずる戀情である。それ故一目の戀の中には、別に恩義も何もなく、たゞ一目垣間見たのみにして、戀に陥つた、例も少なからずある。併し此の一目の戀なるものは、精神分析學の方から、説明の出来るもので、詳しいことは、後卷に譲るとしやう。

それから情死も、性慾と關係はして居るけれども、其の行爲は性愛の極致にして、戀に破れたる男女の、共に墜ちて行く徑路である。相思の仲なる若き男女が、種々の事情に妨げられて、添へ遂げ得ざるを悲しみ、現世を厭ふ果ては、あの世の一蓮托生を樂しみに、淺ましき死を遂ぐるのである。これは迷信のやうであり、愚なやうでもあるが、併しながら愛の極美は、そこに置つて、詩に歌に謳はれて居る。戀の究局も茲にあつて、情死は決して、迷信の果てばかりでない。

之れを性慾の方から言ふと、如何なる男も女も、世に多くある。若しも甲にして、不可なるときは乙、乙にして宜しからざるときは、丙といふやうに、選擇は恣である。それをたゞ一人の爲めに、共に相死するとは、度量の程小さく、笑ふに堪えたり

と。言ふことは道理のやうで、社會の上から見ても、情死は決して賞すべきものでない。又、道徳上から言つても、情死は罪惡にして、許すべきものでない。けれども利害の爲めに、合つたり離れたりする戀ならば、それは眞の戀でなく、愛でもない。要するところは、性慾の濫用であつて、情死より以上、社會の風俗を紊し、道徳を破壊することが、明々白々である。

今、喩へを引いて、之れを説明すれば、恰も花柳界の賣色婦が、客に接して、媚びを呈するに異ならぬ。彼れ等は百千の人々に、枕席を脩めて、其の細き腕を横たえ、朱唇を與へて、さも會心の快を竭くしたるかの如く、客を歡待するけれども、それはみな偽りの待遇である。彼れ等の其の身を、客の自由に任するのは、其の身の玉代に對する、報酬であつて、眞の戀、又は愛から生じたのではない。語を換へて之れを言へば、賣色婦の情は、枯れ果て、血も無く涙も無くなつて居る。其の肉體は温かいけれども、其の心は冷たくなつて居る。愚かなる客は、其の肉體に依つて、快を食ら

んとするけれども、それは愛妻に對する如く、決して美なるものではない。何となれば温情の褪めたる彼れ等は、恰も飢へたる牛羊の如く、豊なる牧草——金錢——の外に、望むところはなからである。

更に之れを繰り返して言へば、賣色婦の客に對する歡待は、單に閨中の秘事にあつて、精神的ではない。それ故賣色婦には、戀といふものも、愛といふものも無く、隨つて彼れ等の、其の肉體上に受くる快感といふものも、殆んど無いと言はれて居る。併しながら賣色婦であつても、客の篤實にして、温厚なる者に對しては、憎からず思ふ情の生じて、謂はゆる勤め氣離れて、之れを優待するやうにもなる。それが兩者を結合する媒劑であつて、相思相愛の仲となり、夫婦約束となり、起證誓紙となつて末を樂みにして居るが、其の目的の達し得られざるときは、茲に相約して、情死するに至ることもある。此の場合には、性慾より性愛に移りたるものと謂ふことを得る。他にも情に迫つて、共に死せる若き男女が多くある。故に情死は、可憐なるものにし

て、何れの人たるを問はず、其の情は抑すべきものである。或る人の、情死を弔へる句に、

情死はほめてやるのが手向けなり

とあるのは、真に情死者に對する、唯一の手向けであらう。

さても一自の戀といひ、失戀の情死といひ、其の他何事にも、戀愛の極みより成れる現象は、決して放縱なる性慾の荒みではなくして、崇高なる靈の、さへやきから来て居る。例へば或る人を思ひ詰めて、戀ひ焦るゝ者の如き之れである、さういふ我が子や、朋友などを諭慰する親や、友人の言葉に、あの女——男——ばかり女——男でない。世間は廣い、あれに優つた女——男——は幾らもあると。けれども煩悶者はその女——男——を、思ひ切ることには出來ぬ。随つて他の女——男——に、其の情を轉ずることをせぬ。否、これはせぬにあらざして、不可能なのである。何となれば戀の煩悶者は、恰も強迫觀念に罹かつた患者の如く、意中の人が、其の胸から離れない

からである。

これが眞の戀愛である。若しも戀愛が、性慾の如く、單に容貌の美麗に依つて、一般的なるもの——誰てもよいといふこと——ならば、唯だ一人に戀することはない理である。若し或る一人と戀仲となり、而して又他の一人、若しくは數人とも、同様に戀仲となることがあるならば、それは漁色であつて、決して純なる愛でも、戀でもない。之れを文藝上、或ひは歴史上から言ふと、男にあつては、西鶴の一代男にある世之介——本論第三章第三節——平清盛、高師直、關白秀次、元の燕帖木兒——第一卷(二四九頁)——等、女では百犬傳の舟蟲、吉田御殿の千姫、姐巳のお百、高橋お傳等で、彼れ等の胸中に、まことの温き愛を、看出すことが困難である。

予は本書第一卷第六章の、性交反應の條下に於いて(二二三頁)、女子が異性と交はること、多ければ多い程、異種の防禦素を重ねる結果、淫慾が盛んになると言つたが、男子にも、此の傾向があつて、異性に接することの多い者は、多淫になるやう

である。それ故、夫婦の愛情を密にして、家庭の圓滿を計るには、固く一夫一婦の制を守つて、他の異性に接しないやうに、慎しまなくてはならぬ。

是れに由つて之れを觀れば、夫婦の愛情は結婚に依つて、初めて成立し、且つ厚くなるものなることが、了解せらるゝてあらう。併しながら結婚前にも、戀又は愛の真情は、男女の胸に深く包まれて、何人かを思慕して居るものがある。これが即ち、青春時代に描かるゝ理想の妻、又は夫であつて、其の理想が、事なく——障礙なく——實現せらるゝところで、初めて其の戀が、遂げらるゝ理である。語を換へて之れを言へば、結婚前に抱懷せる理想の戀愛は、茲に至つて實現されたのである。西洋に行はるゝ結婚は、これであつて、其の結果は甚だ可いといふことである。

併し日本の如く、結婚前に無かつたところの愛が、結婚に依つて、現はれて來るものもある。前に結婚に依つて、成立したといつた愛は、此れである。孰れにしても、愛には變はりがないけれども、愛は、固く結合するほど、効力がある。これ愛は、

人類を團結せしむる、基礎的要素なるからである。之れを國家の上から言つて見ても判明するが、國家といふものは、個人の團結で出來て居るもので、其の團結のものは、性愛である。それ故國家から、假りに性愛を、除き去るとしたならば、國家は果たして何うなるであらうか。言ふまでもなく、國家は忽ち土崩瓦解して、獸畜の世界となるにあらざれば、利慾と性慾と、一點張りの世界となるであらう。之れを小にして言へば、家庭の破壊であつて、夫婦の間に愛が無く、或ひはあつても、甚だ微弱である等の場合は、夫婦の反目不和は、絶ゆることなく、秋風は吹き荒みて、破鏡の悲しみは纏がては社會の悲劇となり、斯くして國家は、破滅するに至るであらう。

それから予輩の、甚だ憂ふるところのものは、家庭に最も忌むべき離婚である。離婚の原因には、種々あつて一様でないけれども、歸するところは、夫婦間に於ける、愛の缺乏、或ひは破壊である。近時の問題となれる、白蓮事件の如きは、最も明白に之れを暴露したもので、たゞに家庭を破壊した許りでなく、社會を破壊して居る。何と

なれば白蓮は、愛なき結婚に依つて——此の愛なき結婚は、生家の爲めであると言はれて居る。さすれば家の犠牲になつたのであつて、其の罪は生家にもある——大それた姦通罪を犯したからである。而かも市井の婦女の取るべき以上の、辛辣なる行爲に依つて、其の夫を侮蔑し、延いては其の身の上流にありて、社會に波及する影響の、甚大なるを顧みず、遂に社會全體に對して、惡のタイプを示した點は、恕すべからざるところである。

但し白蓮をして、其の憎むべき姦通罪を、犯すに至らしめた徑路には、其の夫なる人の罪もあるけれども、要するに愛のなかつた結婚が、最大なる缺點であつて、そこに家庭の悲惨なる不幸と、罪惡とが醸されたのである。予は繰り返して言はん、愛のなき結婚は、不幸の基である。縦令ひ性慾は、完全に遂げられ、思うまゝに行はるとしても、愛なきときは、末を完ふすることが困難である。夫婦は、決してたゞ、性慾から許り、解決されるものでない。

以上の説述にて、性愛の如何なるものなるかの一斑は、讀者の了知し得たるところと信ずる。併しこれは緒論に過ぎぬ。以下筆路を改めて、青春時代に於ける性愛の源泉地を尋ね、更に性愛と性慾との關係に進み移りて、性愛の人生に缺くべからざる理由を、究めんと欲するのである。

本論

第一章 青春時代と性愛

第一節 青春時代の特徴

人生は、逆旅の如しとかや。實に人の一生は、重荷を負ふて、遠き途を旅行するが如しと、或る人の言へるが如く、其の途上には山あり、丘あり、坂あり、川ありて行路を妨げらるゝことが多い。人間蹉跎多し、是れ行路難とは、當さに此のことで、其の中にも特に、險峻行難の途は、青春といふ時代である。

予は昔、中學校の一年に通ふ頃、國語の先生が、人生行路難といふことを、諄々として説明せられたことを、今に記憶して居るが、其の中で恚ういふことを話された。「人間の一生涯の中で、最も重要であり、且つ最も興味に富める時期はといつたなら

ば、諸子は何と答へるか」と、質問を發した。級中は聞として答ふる者はなかつたが其の時Iといふ一人の少年が起立して、「先生それは青年時代であると思ひます。何故といふに、青年老ひ易く、學成り難しといふ詩の通り、青年時代は、人の學ぶべき重要時代であります。古人は勉強しても、學成り難しと歎じて居ります。それ位ですから、吾々の如きは、懸命になつて學ばねばなりません」と、今から思へば小兒らしい答へをしたが、先生はよく言つた、と大變に之れを賞めたのを、聞いた他の生徒は、後でIは偉いと敬服した。此の少年は、級中一番の早熟で、性に關することなども、臆面なく質問して、先生を困らすことがあつた。

其の後予は、事情があつて學校を退いたので、Iとは、二年ばかりで別かれたが、五六年後同じ級の一友人に逢つた時に、四方山の話から、談は偶々Iに及ぶと、成績は好かつたが、才氣横發といふ早熟が災ひをなして、學生時代から遊蕩を覺え、つひに放校に處せられたといふことを聞いて、意外の思ひをした。

これは餘事であるが、國語の先生の出した質問は、今日から見ても、必要なる問題で、之れに對して予は、第一には妙齡期を差し、第二には壯齡期を擧げねばならぬ。それは何ういふ理であるか、此の妙齡期と、壯齡期との二期は、人生の發足點であるといひ、又活動期であつて、人生から此の時期を除いて了へば、他の時期は、殆んど無意味なるものとなるからである。言葉を換へて之れを言へば、人の一生は長いけれども、妙齡期以前の幼年期と、壯齡期以後の老年期とが過半を占めて、活動期は甚だ短いからである。併し亦、そこに意義ある生活が遂げらるゝので、其の短い時代が貴く重んぜらるゝのである。

これが謂はゆる青春時代である。即ち妙齡期から入つて、新に開展せんとする壯齡時代であつて、妙齡期は其の境界である。

此の意義深き青春時代を、植物に喩へて言へば、恰も花を咲き、實を結んで、種子を生ずるまでの間で、花の頃になれば、風流人が觀賞の的となり、實を結べば食用

に供せられて、謂はゆる有要植物とせらるゝ如く、人も妙齡になれば、自然の大法則として、何人も自ら其の容貌が革まり、其の風姿が變つて來て、男は威嚴ある風采を揚げ、女は優しき姿を添へて、美しくなる。此の妙齡期は、恰も蕾から咲き出す花の時代に等しくして、此の時に至れば、男にも女にも、幼少の際には見ることの無かつた、新らしき特徴が現はれて、次第に明瞭になつて來るが、其の特徴が明かになればなるほど、男女の體格が著しく異つて來て、男と女とは、懸け隔つたものとなる。

それは何ういふ隔たりの差異であるかといふに、たゞ容貌や風姿のみではなく、根本的に異なる生殖腺から、誘發せられたところの第二の性的特徴がそれである。生殖腺とは男の睪丸、女の卵巢のことであつて、それに附帶せる器官が、生殖腺を圍んで一つの性器を構成して居るが、それも幼少時には、よく發育して居らぬ。然るに妙齡になつて、性器が發達すると、それに連れて、第二の性的特徴が發育して、目に立つて來る。即ち男の鬍髯、女の乳房等の如きであつて、其の外音聲、皮膚、骨盤等の上

にも、種々の特徴が現はれて来て、それが壯年まで續くのである。故に青春時代は、性的特徴の最も著明なる時代と、謂ふことを得る。

斯様に青春時代は、性的特徴の顯著な時であるが、併し其の性的特徴の中にて、容貌の最も美しい時代はと言へば、妙齡期に限られて居ることを、肯定せねばならぬ。これは俗に、鬼も十八、薊の花も一盛りといふ諺で、説明が十分であると思ふ。男女の間に、互に相思ひ、相慕ふ情の萌して來るのも、妙齡期で、此の時には、性慾上の危険が伴ふのである。孔子の謂はゆる、若き時血氣未だ定まらず、之れを戒しむる色にありといふのも、此の時であつて、男女共に、警戒を要しなくてはならぬ。

第二節 生殖と生活

それから男女が結婚して、家庭を造れば、そこに亦、自然の理法があらはれて、夫婦の間に子が生まれ、子は又子、孫を生むといふやうになつて、人數は漸々に殖え

一家は榮え行くのである。即ち親子、兄弟、姉妹、孫、玄孫等であつて、始めの夫婦から、多くの子孫が生ずるのである。併しながら舊きものと、新らしきものとは、交代的に代謝して、永久に同一でないのは、生物界の通則であつて、人も新陳代謝は免れぬ。即ち生と死とであつて、死とは肉體の壞滅することを謂ふのである。但し死の原因には、種々あるけれども、何れの原因にしろ、死は同一であつて、肉體を組成する細胞は、消滅するのである。壽命といふのは、此の細胞の消滅する時まで、即ち新らしく生まれ出た個體が、生活をつゞくる間で、其の壽命には、みな限局がある。

是れに由つて之れを観れば、人間の壽命には、限りあつて、其の肉體は死亡に依つて全く、消えて了うのである。隨つて其の壽命といふものも、昔から人生五十年といはれて居るほど、短くある。然るに一方から言へば、肉體は死するけれども、生前に其の肉體より生じたところの、生殖細胞なるものが、他の異種の生殖細胞と結合して、新らしい個體を遺すので、舊個體は死亡しても、其の生命は新個體に傳はつて、生命

といふものは、永久に保たるといふことになる。言葉を換へて、解かり易く之れを言へば、老ひたる者は、衰へて死ぬけれども、其の新苗種即ち子孫は、更に親の形態を享け、其の性質を傳へて、子孫は永へに絶えることはないのである。

斯くの如く子孫の連続として、繼續するのは、生殖細胞の存するためで、生殖細胞の連續を名づけて、血統と謂ふのである。又、遺傳も、生殖細胞の中に含まれたる微妙なる力の作用に依るものであつて、生殖細胞を究むるときは、遺傳の明瞭となるは勿論、性慾の原因や、男女の性的關係や、あらゆる性的現象は、みな生殖細胞を基礎として起こり、それから八方に展開して、種々の複雑な問題を、醸すに至つたことが、了解せらる。

尙、便宜上、右の事實を概括して言へば、人は自己生存と、種の保存との、二つの使命を完うするために、此の世に生まれて来たことは、他の生物と異りはないのである。即ち自己を生存せしむるために、營養を取り、種を保存せしむるために、戀愛關

係を生ずるのである。それ故食物や、衣服や、住居等に関する問題も起れば、結婚問題も起つて、配偶者を選択するやら、新家庭を造るやら、其の間に種々の事件が伴つて來るのである。

斯くの如く人生は、複雑であつて、其の生活史を叙述すれば、生後の哺育に始まり營養を攝取して、成長すること、結婚すること、分娩すること、老衰すること、及び死亡することの五階級となるが、しかしそれは主觀的の見方であつて、之れを客觀的に考察するときは、人は生存と生殖との外、社會と大なる關係があつて、自己共同生存の義務を負ふと共に、其の責任を竭くさなくてはならぬことを、覺知しなくてはならぬ。

之れを平たく言へば、生活の希望と目的とが、諸多の經濟的事業を生じて、相互の共同生活を深からしむるに依り、之れが經營、及び保護の必要上、社會の制度が成り立つたのである。これは生活上より來たれる、社會關係であるが、生殖に於いて

は、夫婦親子の愛と共に、祖先を尊崇する情と、子孫を思ふ、情とを生じ、それが擴がつて、國家を愛する情となり、更に現生活に對する感情と一致して、茲に道德觀念を生ずるに至つたのである。故に道德を科學上より究追すれば、其の根源は生殖にあつて、畢竟するところ、種族保存の天則より發したるものなることは、蔽ふべからざるところである。

第三節 性慾と道德

此の問題は、極めて重大にして、其の根柢を究むる必要があるに依り、今、一度之れを説述しやうと思ふ。抑々生殖が、道德を生み出したといふことは、適當に種を保存するには、人間の共同生活を、完全に行ふにあるからである。即ち人間相互の共同生活に對して、有害なる行爲、及び調和せざる事項を、避くると同時に、社會の利益となり、其の幸福と安全とを、將來する行爲を尙めなくてはならぬ。これ即ち、人間

の社會に對する義務にして、道德の本源である。是れに由つて之れを見ても、道德の生殖に基礎を發することは、照々として明かである。

斯くの如く道德の基礎は、種の保存にあつて、生殖に胚胎せざる道德は、完全なものでない。然るに生殖と性慾とは、離るべからざる關係を有するに依り、種族保存の目的をもつて、優良なる子孫を擧ぐるには、性慾を善意に解して、之れを健全に導びかなくてはならぬ。性慾は、決して淫卑なるものでも、恥づべきものでもない。それを、猥褻なるもの、如くに思惟する者は、非常な誤謬である。何となれば若しも性慾を卑猥なるものとすれば、其の行爲は勿論、不潔なものであらねばならぬ。然るときは其の不潔なる行爲に依つて、生るゝ子は、みな不潔なる理である。恚う言へば、結婚からして既に猥褻なものである。夫婦親子といふものもみな不潔の集まりである。併し世豈に、結婚を卑猥とし、妊娠や分娩を、不淨不潔とする者あらんやだ。彼の不倫不義といふやうな、敗德行爲に依つて、妊娠したる者や、或ひは婢妾など

に、産ませたる私生児の如きは別として、苟も正理正道をふみて、設けたる子は、神聖にして、毫も批難すべき點のないことは言ふまでもない。元來子なるものは、すべて親の生殖細胞に依つて、生まるるものなることは、前に述べたる如くであつて見れば、假りに性行爲を取すべきものとしても、其の子供まで恥づべきものとは、何人も思惟せざるところであらう。子供はみな、自然の理法に従つて、生まれたる清淨無垢なものである。生殖細胞は、性器といふ局部に生じ、而かもそれが性行爲の結果、受胎して生ずるものなりとはいへ、子供の身には、一點の汚れはない。

斯様に子供の身を、正しきものとするならば、何故に獨り生殖細胞や、之れに繋がる性器や、性行爲のみを、卑猥とするか。これ不合理も甚だしと謂ふべきである。予は、性行爲を公にすべしと言ふものでは、決してないけれども、之れを卑しきものと信ずるものでないことは、茲に斷言するを憚らぬ。

右は、生殖と道徳との關係を、説く爲めに、性慾及び性行爲を善意に解釋したのであるが、之れを詳論すれば、數百頁に涉るとも、竭きぬと思ふ。依つて之れは別卷に譲り、茲では再び、青春時代に立ち戻つて、其の危機の如何なるものなるかを説述しやうと思ふ。

第四節 青春時代の危機及び其の研究法

さて廣く、人生の上から直觀を下せば、生物界と異なりなき人間の一生は、限りなき趣味に富みて、之れを展開すれば、さながら色彩もつて、飾られたる、繪卷の如くなるのであるが、其の中にも特に青春時代の人は、潑刺にして活氣に富み、性慾も旺盛にして、戀愛に憧憬る、時代であるから、戀愛問題が多く起り、随つて性の悩みも、絶ゆることはない。又、一事一業に成功して、有爲の人物となるのも、青春時代にあるが、之れに反して其の身を誤り、淪落して世に擯斥せらるゝに至るのも、亦、此の時代である。予は前に、妙齡期を危険にして、警戒すべき時代と言つた如く

眞に青春時代ほど、多事多端にして、危険の多大なる時代はない。

如何なる理由にて、青春時代は危険であるか、之れに關する詳説は後章に譲りて、茲には概略に止めんと思ふが、要するに青春時代は、修養時代にして、此の時代には、未だ精神が確定して居らぬと共に、環境から誘惑せられ、其の感化に依つて、惡變することが多いからである。故に青春時代に於ける男女の身體、心理、性慾、煩悶及び危機等を論じて、其の危害を未然に防ぐことを講ずるのは、本書の目的で、性愛の研究上、至大の關係ありと謂ふべきである。

古の事實に基づき、青春時代の研究法を一言すれば、先づ發情期を起點として、其の前後に於ける身體及び精神上の變化を、解剖學、生理學及び心理學の諸方面より討究して、性慾と内分泌——ホルモン——との關係に及ぼし、又それと關聯して起る男子の聲變り、鬚髯の發生、女子にあつては月經の開始する理由等を探り、これより青春時代に於ける性の悩み、及び其の解除法を述べ、更に結婚問題に移りて、配偶者

の意義、要素、發生及び發達を究め、次ぎにプラトニック・ラブを論じて、性愛と性慾との關係を、明かにしたのである。

以上は、大體に於ける叙述の順序で、之れを前巻の「男女性慾及び性交の新研究」に比すれば、其の關するところの範圍は、稍狹くして、一局部に偏する觀がある。これ青春時代に於ける男女を主として、専ら其の危機を論じ、之れを警戒するが目的なるからである。言葉を換へて之れを言へば、男女共に貞操を守り、品行を正しうして、結婚前は純潔の誇りを、保たなくてはならぬといふことである。

それ故此の時代において、特に固く戒しむべきことは、反自然的性行爲、即ち自瀆と、汚れたる淫行即ち花柳界の遊びにして、此の禁戒を守らざるときは、前者に於いては神經衰弱、ヒステリー、或ひは性交不能等の如き、性器の發育不全を來たし、後者に在つては花柳病、即ち近時の新語なる性病に罹かつて、體質を惡變し、徵毒にあつては、病毒を子孫に傳へて、遺傳徵毒となることが多くある。次ぎに麻疾の方は

遺傳しないけれども、病毒は久しく潜伏して、數年若しくは十數年後に至つても、異性の新らしき粘膜に觸るゝときは、病菌がそこに移植して、俄然傳染することがある。統計に依れば、花柳病に犯さるゝ者は、多くは結婚前の青年であつて、結婚後に襲はるゝことは少ない。これ不節操の遊びを爲すものは、未婚の青年に多いからである。それ故結婚後、新婦の身に起る悲劇の多數は、結婚前に於ける夫の淫蕩的享樂の犠牲であつて、其の罪は勿論夫にある。花柳病専門の醫師を叩けば、恚ういふ悲惨な例は、甚だ多く、中には小説の材料となりさうな、ローマンチックなものもある。併しそれ等はすべて、後章に譲つて、茲には擧げぬが、恐るべきは花柳病である。

併し花柳病は、曾だに花柳界許りてなく、素人からも、來ることが多くある。勿論花柳病の根源地即ち其の巢窟と看做さるゝところは、花柳界にして、賣淫を業とする者は、すべて有毒者であるに依り、一たび花柳界に遊んだものは、其の病毒に感染して、之れを家庭に移植するに至るべきは、病理上免れざるところである。これ花柳

病は、社會の各階級に廣く傳播せられて居る譯である。それ故賣淫婦でなくとも、病毒の保帶者なるときは、未婚者からも傳染すること、毫も賣淫婦と異なるところはなし。

併し素人と賣淫婦とは、其の生活を異にして居るので、病毒は同じであつても、其の傳染徑路には、少し異なるところがある。それは何ういふ點かと言へば、即ち花柳界と家庭との區別であつて、素人から來る病毒の根源地は、家庭である。言葉を換へて之れを言へば、不正なる性的行爲——野合又は私婚と稱するもの——であつて、賣淫には經濟的條件が含まるゝけれども、野合は戀愛に憧憬れたる青春の男女が、享樂の理想を實現せるものである。それ故未婚者の、不正なる性的交際は、極めて危険にして道徳上より言ふも、人格を傷つけて、生涯拭ふべからざる汚點を止むるものと、謂ふべきである。而して野合は、青春時代に於ける、特種の一現象とも謂ふべきものにして、結婚前の男女の、甚だ陥り易き危道であるので、特に注意を拂ひ、又親權者、保護者等にあつても、大に警戒しなくてはならぬ。

尙、青春時代に於ける危機は、他の誘惑と悪化とである。即ち善良なる者を邪道に引き入れて、之れを悪化せんとするのである。此の誘惑を試みる者に、異性と同性とあるが、前者は男子の場合には女子にして、女子の場合には、男子が誘惑者となること、人の知る如くである。これは普通に行はるゝ誘惑であるが、時としては男女共謀して、悪辣なる手段を廻らすものもある。例へば最初誘惑に懸かりて、墮落したる女子が其の情夫と共謀して、他の女子を誘惑するが如きこれである。此の場合には、愛に慣れ易き友情として、容易に其の手に乗せらるゝといふことである。

第五節 青春時代に於ける一般の注意

- これに依り、青春時代に戒しむべき交友として、處女の注意すべき箇條を擧ぐれば
- 一、妙齡の女子を、監督者なしに外出せしむること。
- 二、青年男女の打ち混せる加留多會、音樂會等に、獨り出席せしむること。

三、幾日の漫歩きは勿論、活動寫眞、演劇、寄席等に、監督者なしに出し遣ること。

等にして、恚ういふことから、間違ひの起つた例が少くない。其の主なるもの梗概を記すれば、次ぎの如くである。

- 一、某女學校の才媛と謳はれたる少女が、某大學生と、ふとしたことから知己となつたのが始まりで、彼の女は何時しか墮落し、流轉して、つひに賣淫婦の群に投ずるに至つた。
 - 二、某家の新婦、年は二十一の花盛り、正月の加留多遊びに、友の細君に誘はれ、其の家にて、親戚といふ男と組みになつたのが縁となり、其の後密に感通するに至つた。本夫は之れを感知して、一夜兩人の密會せるところを認め、取り押へて公けにせんと教團いたのを、仲裁する人があつて、漸く元の鞘に収まつたが、若干もなく女は、再び情夫と密會せるところを発見せられ、遂に離婚せられた。
 - 三、十九歳の少年、自演に耽溺せる結果、性器の發育を害し、それに連れて神經衰弱を來たし、煙囪の末端觀して、自殺せんと徘徊中を、救世軍の士官に救はれて、其の家に送り届けられた。
- 此の外、失戀の結果精神に異常を來たせる者、虚榮に流れて罪惡を犯せる者、同性愛に溺れて情死せる者等甚だ多くある。尙、此れ等は、後文に詳述しやうと思ふ。

是れに由つて之れを考ふれば、青春時代の危機の、愈々大にして、決して等閑に附すべからざることが、判明つて来る。

現代の言葉で謂ふところの不良少年、又は不良少女なるものは、主に此の時代に於ける男女の、不良に陥つたものを、さしていふのであるが、教育者の中には、此の不良なる語を、不穩當として、他の術語に改むべきことを唱ふるものがある。併し何れの術語を採用するとも、正しき行狀にあるべき少年少女が、父母の訓誨にも、師の教へにも従はずして、放逸に流れ、遊惰を事として、骨肉にも朋友にも、見離さるゝ身とならば、事實に於ける不良にして、悪人又は犯罪者の苗種と謂ふべきである。併し不良なる少年少女、即ち彼れ等の其の心の歪んで、不良に陥るには、多くの原因や、動機がなくてはならぬ。中には先天に不良性を帯びて居る者もあるけれども、大多數は環境の悪影響から来るものであつて、それから感化せらるゝのである。而かも其の感化は、幼年時代から始まり、それが青春時代に至つて固定するのである。

故に不良の原因及び其の動機を知るには、幼年時代に遡つて、家庭上の關係や、教育及び交友の如何等を探り、特に重大なる關係を有するは、發情期、及び其の前後であるに依り、明かに其の時代に於ける身體的、並びに其の精神的變化を究めなくてはならぬ。

予が發動期時代に於ける少年少女に於いて、先づ其の生理、心理及び病理の論述を始めた目的は、茲にある。有名なるスタンリー・ホール氏は、其の傑著「青春時代」といふ書に於いて、若しも此の時代の少女が、主として肉的感情に囚はるゝならば、墮落して身を誤るに至るであらう。けれども若しも高尚なる精神的感情に支配せらるゝならば、天女となつて、萬人の尊敬するところとなるであらう。と言つたのは、予が前に、善くなるのも、悪くなるのも、此の時代であると述べたのと、符合して居る。青春時代の意義は、前文所論の事實に依つて、讀者の理解せられたるところと思ふ。又其の時代の危機に富みて、一步足を履み外すときは、奈落の底に陥つて、浮ぶ瀬な

身となるに至ることも、同様了知せられたであらう。但し其の説明は簡にして、概要に過ぎざるが故に、詳細は後章に於いて、逐一説述しやうと思ふ。

第二章

發情期と年齢及び其の時代に

於ける男女の部類

第一節 少年と少女

少年と少女、これ未來の國民にして、普通に之れを小國民といつて居るが、茲に謂ふところの少年少女は、未婚の男女にして、一般に發情期以前の兒童を差して謂ふのである。其の年齢は、十歳より十四五歳に至るものであつて、男女兩性の間に、固有の特徴を現はすのは、此の時期からである。即ち男兒にあつては、運動が激しくなり筋肉は發達して、力量は強くなるけれども、女兒は之れに反し、運動は不活潑にして

力量乏しく筋肉は薄弱である。併し其の代はりに、脂肪が増して、皮膚に一種の美を添ふやうになる。而して此の變化は、男女共に年の行くに従ひ著しくなつて、遂に發情期に入るのである。

發情期は、人の初めて春機の萌發、又は開發する時期にして、破瓜期とも名づくることは、本書第一卷「男女性慾及び性交の新研究」(六〇頁及び六八頁)に述べたる如くである。而して此の時期の主なる特徴は、男子にあつては聲が變はり、女子にあつては月華が開通するに依り、男子には聲變期、女子には天癸期、其の他種々の名稱があるけれども、其の意義は同一にして、無邪氣であつた男女兒が、性に目醒めて、初めて異性を、相思慕するやうになる時期を謂ふのである。

斯様に少年少女が發達して、發情期に入るときは、其の身體及び精神に、特異の變化を來たして、最早、小兒でなくなる。これが俗に謂ふ童男、童女であつて、又、生息、生娘ともいつて居る。即ち妙齡になつて、未だ異性に接したくない男女とい

ふことにして又、生息には貞童、生娘には處女なる名稱がある。是れに依り如何なるものを貞童といひ、如何なるものを處女と稱するか。之れを説明するには、先づ處女から始むるが便利である。

第二節 處女

處女とは妙齡となつて、結婚には適するけれども、未だ獨身で居る女子を差して謂ふのであるが、併したゞこれだけでは、處女の意義が竭くされぬ。何となれば處女には、法律上定めたる年齢があつて、此の年齢の範圍内に居らねばならないからである。それは結婚年齢の十五歳と、結婚に父母の同意を得る年齢、即ち二十四歳までの間で、此の年限内に結婚しないのは、すべて處女であるのである。

そこで處女の定義を設くるには、前記の年齢と、生殖機能の開始せること、及び純潔なることの三資格を、具備することが必要にして、一つにても其の資格を缺くとき

は、處女と謂ふことが出来ぬ。例へば生殖機能の開始と、純潔との二資格があつても年齢を経過せるもの、即ち二十五歳以上なるときは、處女とすることを得ざるが如きこれである。又、年齢は二十五歳以下であつても、純潔でなかつた場合には、これ又處女と語ふことを得ない。此れ等は謂はゆる似て非なる處女であつて、さういふ種類の者は世間に甚だ多くある。結婚の際に、間違ひを生ずることのあるのは是れである。之れに關する説明は、後文に譲り、處女の資格の第一なる發情期に就いて、再言すれば、月華の開通をもつて、主なる特徴とすること、前に一言せる如くであるが、是れが亦、生殖機能の開始を意味するのである。故に女子は發情期に達して、生殖機能を營むやうになれば、結婚するに差し支へなき身となるのであるが、併し結婚は、家庭的又は社會的問題が主で、生理上の問題の之れに與らぬ場合が多いので、縦しや其の生殖機能が開始したにしろ女は一家の都合上、或ひは社會的關係等の爲めに、容易く結婚するといふ譯に、行かないことが甚だ多くある。

古昔ならば女は十五六歳にもなれば、大抵結婚して、花嫁となつたものであるが、今日は生活上の關係からして、二十歳になつても、又は二十五歳になつても、結婚することが出来ないで、獨身で居る者が少なくない。それ故發情期に達して、生殖機能を開始しても、貞潔無垢で居る場合には、之れを處女として、他の既婚婦若しくは非處女と、區別するのである。

予は前に、處女の年齢を、十五歳より二十四歳までと定めたのは、日本の民法に從つたのである。民法にて定めたる女子の結婚年齢は、滿十五歳以上で、其の結婚に父母の同意を要する年齢は、滿二十四歳までである。其の後は、父母の同意を得なくとも、自由に結婚することを得るが、此の十五歳から二十四歳に至る十年間は、父母又は親權者の監督を受けなくてはならぬ。従つて此の年間にある未婚の女子は、處女として取り扱はるゝことを得るのである。

如上の事實に基づいて、茲に處女の解釋を與ふれば、滿十五歳以上二十四歳までの

女子にして、配偶者を有せず。又未だ嘗つて、結婚したことの無い者と謂ふこととなる。之れに就いて注意すべきことがある。それは結婚のことであつて、正式の結婚は、勿論、私婚及び野合等も含んで居るので、一度でも異性に觸れたことのある女子は、若くとも處女と謂はれぬことは、前に言つた如くである。

これが即ち、處女の定義であつて、處女といふことの中には、初めてといふ事と、新らしきといふ意味を含んで、嘗つて試みたことのないものでなければならぬ。尙、今一つ處女に必要なものは、處女性である。處女性とは優美にして淑かなること、即ち初々しく、嬌羞を含めることの謂ひであつて、そこに處女の趣きがある。元來處女なる語は、詩的にして、此の初々しき嬌態は、處女の特有なる羞恥心から、彩られた特徴である。處女には、此の處女性が必要で、必らず之れを保たねばならぬ。

然るに右の處女性、即ち嬌羞的色彩は、結婚後次第に淡くなり行きて、遂には消失するものなることを知らなくてはならぬ。尙又、結婚は爲さなくとも、年を取り、又

は浮世の風波に揉まるゝに於いても、羞恥心は、鈍麻するものである。俗に之れを、世故に慣れるといふが、斯様に浮世の風に當たると、羞恥心は消えて行く。特に老年になつて、頭に霜を戴くやうになれば、殆んど羞恥心は消失して、跡方もなくなる者が多い。

之れに就いて好例がある。それは俗に謂はゆる萬年娘と、賣春婦とで、彼れ等には處女性を看出すことは出来ぬ。萬年娘とは、年を取つても、何時も若い女で、獨身で居るから處女の如く見ゆるけれども、多くの異性に接して、處女にあらざることとは、言ふまでもない。賣春婦も萬年娘に類似したものであるけれども、其の心が一層猛烈に放恣となり、淫蕩に流れて、全く處女性を失つて居る。斯様に彼れ等は、性慾に荒みて無羞恥となれるだけ、意志が強くと、大膽になつて、昔の初々しき趣きや、嬌羞的色彩が見えなくなつて了うのである。

上來述べたる如く、身の純潔でない者は勿論、處女性を有せざる者は、縦しや年が若くとも、或ひは美人であるとしても、決して處女といふことは出来ぬ。今、便利のために、此れ等の似非處女を包括して、列挙すると、(一)未婚婦にして、嘗つて異性に接したることある者、(二)俗に謂はゆる萬年娘なる者、(三)賣淫を業とする者即ち藝妓の類、(四)老嬢即ちオールド・メイド、(五)昔の奥御殿に奉仕せる老女、(六)修道院或ひは寺院の老尼等にして、(一)より(三)までは、純潔にあらざる點に於いて、(四)より(六)までは、年齢の上にて、何れも處女たるを得ないのである。

何故に處女は、斯くの如く純潔を尙ふかといふに、すべての女子は、異性に接するときは、一回にても其の體質に變化を來たして、ワルドスタイン及びエーケレル兩氏の謂はゆる性交反應を起こして、其の體中に、異性の精子に對する反抗素、即ち防禦酵素なるものを、生ずるからである。それ故處女であるか、非らざるかの區別は、縦令ひ外部に於いては困難であつても、血清診斷に於いては容易であつて、明かに鑑定し得るのである。この事實は、前卷男女性慾及び性交の新研究(一一六頁—一二八頁)

に於いて、詳細に論述してあるから、重ねては言はぬが、處女の誇りとするところのものは、其の純潔にあることを忘れてはならぬ。

第三節 貞童

以上は、處女に就いて、其の意義を説述したものである。之れに依つて讀者は處女の如何なるものなるかを、諒解せられしこと、思考するが、之れに次いで述べなくてはならぬものは、貞童である。貞童とは、未婚の男子にして處女と同じく、純潔なるものを差して謂ふのである。即ち年齢、體質及び性質の三點に於いて、處女と一對の資格を具へねばならぬ。

先づ年齢から言へば、普通に發情期に達せるものにして、我が國の民法に規定せる結婚年齢即ち満十七歳より、二十歳までを、普通に與へて居るけれども、女子と同じく結婚するに就いて、父母又は親權者の同意を得なければならぬ年齢、即ち、二十九

歳までは、引き延ばして、貞童の中に入ることを得るのである。三十になつて、貞童といふのも可笑いけれども、女子も二十四歳までは、處女の資格を有するから、男子も二十九歳までは、貞童の資格があるのである。

それから純潔であるが、正式の結婚はしなくとも、私婚又は野合、若しくは賣淫といふやうに、他の異性に接したものは、貞童の資格を失ふこと勿論である。又、其の性質に於いて、處女に處女性が必要である如く、貞童も貞童性を有せねばならぬ。即ち温順にして、廉恥心に富み、社會に出て活動することはよいけれども、浮浪者或ひは不良少年となつてはならぬ。此れ等は女の貞童と同様、貞童の資格を有しないのである。

斯様に貞童にも、一定の資格があるけれども、男子は發動的にして、女子の如く受動的でない爲めに、女子に現はるゝが如き性交反應は、未だ實驗されてない。それ故男子は、他の異性に接しても、それをもつて破貞を證明することは出来ぬ。又、女子

の破貞は血清診断に依つて、鑑識することを得るけれども、男子には是れがないので男子の貞童といふことは、當てにならぬ。そこで男子の果たして貞童なりや否やは、徳義上の問題に屬し、法醫學にて、未だ之れを鑑定するところまで行かないのは、甚だ遺憾である。

第三章 身體性と心性及び其の發育現象

第一節 發育現象の總説

青年時代の研究に於いて、興味ある問題は種々あるが、其の中特に必要にして、何人も注意せざるべからざるものは、早熟、卓越、晩發、停止、遲鈍及び白痴等である。此れ等の部類に屬する階級は、すべてみな發育の狀態に依つて、與へられたものにして、其の中に體性と、心性との區別あるが、體性と心性とは、概ね、一致して、或る程度

までは、其の步調を等しくするのである。併し環境、疾病其の他の原因に依つて、發育を異にするときは、身心の間に懸隔を生じて、一致しないこともある。

一體發情期は、一般に思春期と名づけられて、性的生活に入るの道程とせられ、随つて活動の始めにして、生涯中最も重要な時期であることは、前に述べた如くである。ところで、發情期と年齢との間には、一定の關係があつて、身體の發育は、年齢に依つて進行するものであるけれども、多くの場合に於いて、人體は必ずしも、年齢に支配されることなしに、成熟することもあれば、又は晩發性に發達し、或ひは全く停止することもある。

之れを生理上より言へば、人體の發育は、人種、氣候及び生活狀態等に依つて一様でないのみならず、體質及び稟性に依つても、異なることもあるが、其の體質及び稟性なるものには、病的即ち或る特殊の疾病より、來るものがある。例へば内分泌腺の異常なる發達、或ひは障害の如きであつて、さういふ場合には、發情期に達しない

前に著しく發達して、大人の如き状態を呈するものである。或ひは之れに反して、年齢が行つても、發育が遅々として、何時までも、小兒の如くなるものもある。斯様に年齢が幼くとも、早く發情期に達して、成人の如くなるものは、之れを早熟或ひは卓越と名づけ、さういふ性質を有する者を、早熟性の人といふのである。然るに發育の遅く、遅々として進まない者は、晩發、停止、或ひは遲鈍と名づけ、さういふ性質のものは、晩發性の人といひ、尙、遲鈍の進みて甚だしくなれるものは、之れを白痴と名づくる。右の如き遲鈍及び白痴は、全然疾病の然らしむるところであるが、早熟或ひは卓越にも生理的なるもの、外に、病的なるものの、存することを知らなくてはならぬ。前者は環境の影響より來たるもので、後者は内分泌腺の特異なる發達と、其の障礙とより發するものである。

第二節 發情期と環境との關係

發情期と環境との關係 即ち周圍の境遇より來たる影響を言へば、文化の程度、氣候、職業及び生活狀態等にして、發情期を早むるものは、繁盛なる都會、淫靡なる土地、暖國及び卑狹なる職業、例へば花柳界、酒場、料理店及び旅館等に從事するもの又は之れに類似せるものにして、其の期を後らすものは、村落、寥寞なる土地、寒國及び嚴格なる家庭等である。

右の如く職業の、發情期に及ぼす影響は、甚だ大にして、花柳界の子女の如きは、實際驚くべき程、早く此の期に達し居ることは、人の知る如くで、斯かる種類の者は歐洲、北米合衆國、印度、支那、シンガポール、ハワイ其の他の地方に流行せる、少女賣淫婦の例に依つて、證明することが出来る。尤も印度、及び南洋等の如き熱帶地方の土人は、先天に早熟であるから、論外として歐米、支那等の如く、早熟にあらざる、國民にあつても、其の部類の賣淫婦は、十二三歳から十六七歳の間で活動し、普通ならば、未だ發情期にも達しない時期であるが、彼れ等は文明の暗黒面に咲く花と

なつて、笑ひを敷じ、媚びを呈して、飢へたる男子の獸慾に供せらるゝこと、普通の賣淫婦と變りはないといふことである。我が國に於ける花柳界にも、之れと同様なる賣淫婦のあることは、人の知るところであらう。

斯くの如く幼稚にして、早くも性的生活を營むに適するのは、自然にあらずして、全くは彼れ等社會の常習なる、賣淫生活より導びかれたものであつて、決して一般の例とすることは出来ぬ。何となれば生理上彼れ等は、未だ發情期にも、達して居ないけれども、強制して無理に、醜業に服せしめられたからである。

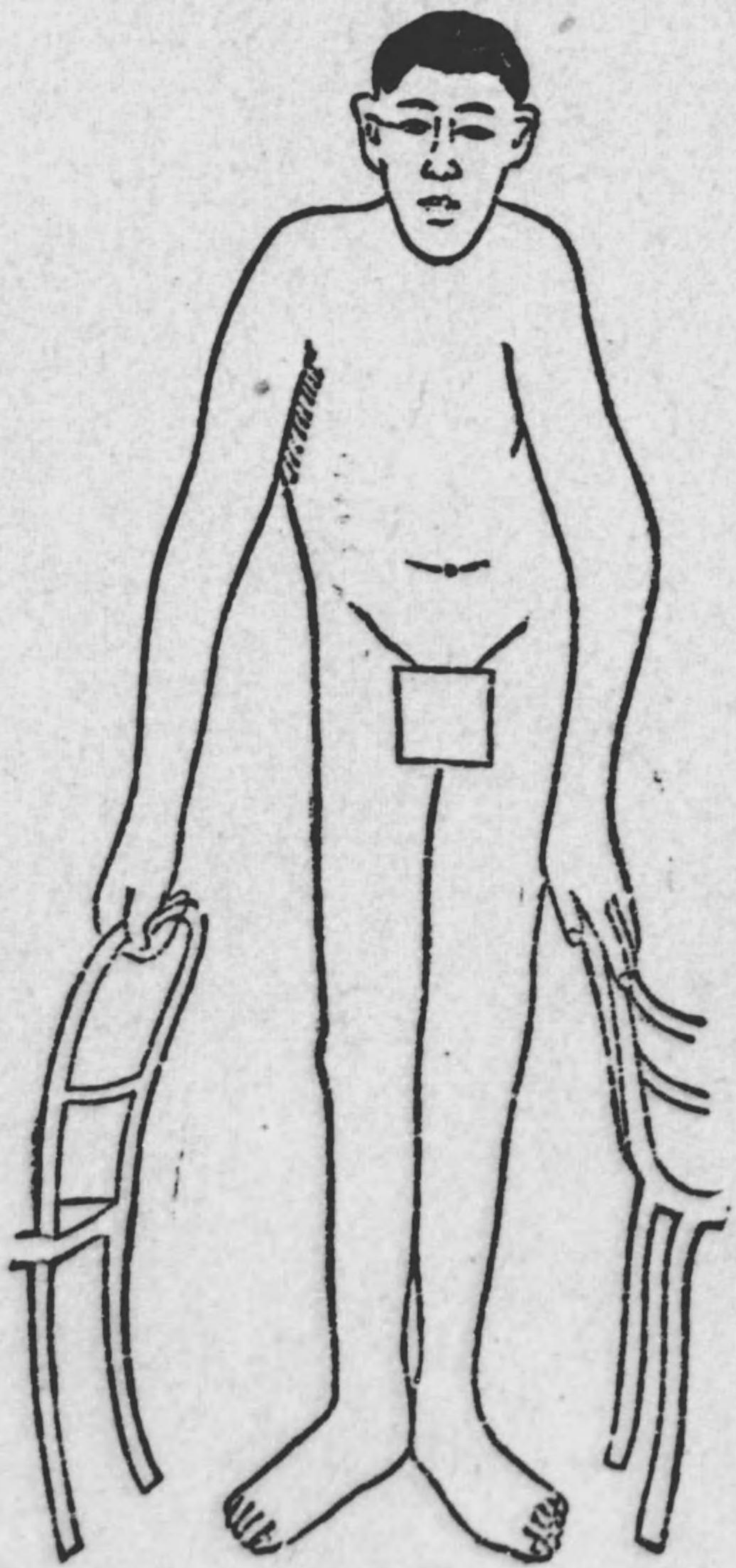
性交と性慾との關係、即ち其の出發點に於いて孰れが先發を爲すかの事實は、前卷第三章第三節(六一頁—六二頁)に述べたる如くで、小兒の口には、性交より開始せられたものが多くある。其の例として挙げたる幸ちやんの如きは適切にして、幸ちやんが娼妓と馴染みを重ぬるやうになつたのは、其の十三歳の時、一青年に勧められ、登樓して、始めて娼妓に接したからである。其の前は別に早熟の様子もなく、無邪氣で

あつたのが、性的生活に入つてから、急に大人びて來たのは、全く環境より來たれる生理的變化と謂ふべきである。但し其の時期に於いて、精子と射精とがあつたか何うかは明瞭でないけれども、性交の可能であつたことは疑ひなくある。

第三節 内分泌腺の異常に歸因する早熟と卓越

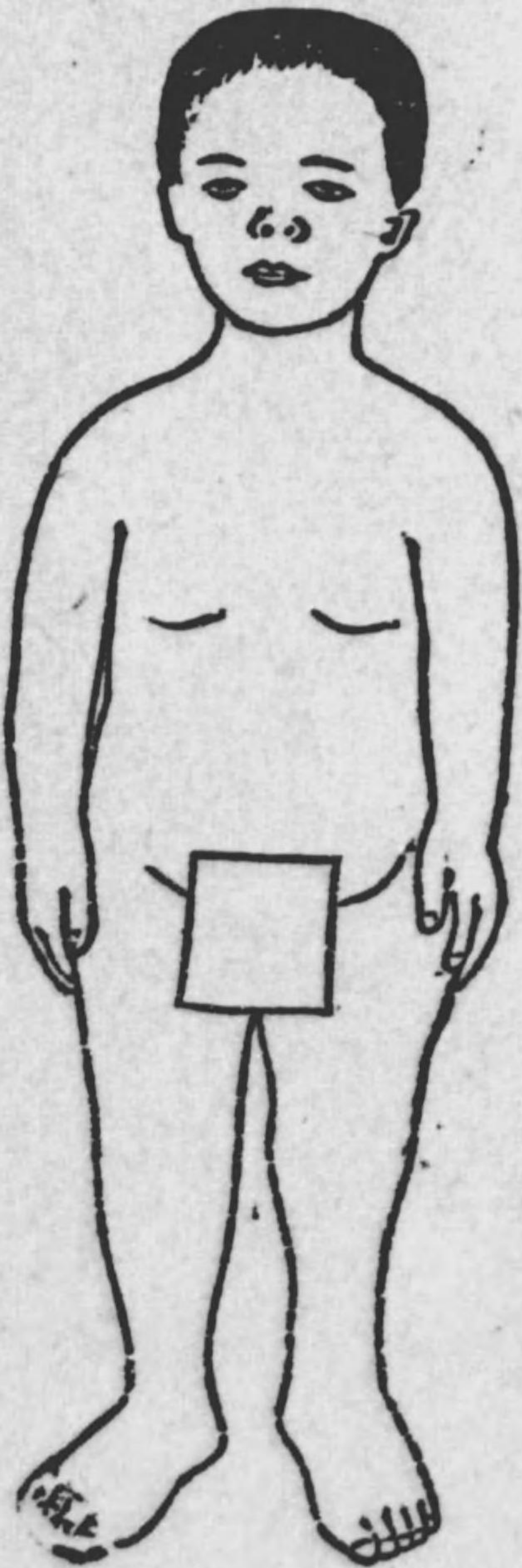
内分泌腺の異常とは、病的に發達せるものと、疾病のために障害せられたるものとを謂ひてあつて、此の場合には、身體は著しく發達し、精神も早熟して、智力の如きは大人の如く卓越することがある。恚ういふ作用を爲す内分泌腺は、腦下垂體と松果腺との二種で、前者は異常なる發達を爲した時に、後者は疾病のために、障害せられたときに生ずるのである。併し腦下垂體の場合には、身體のみ巨大に達し、精神や性器の發達は、停止するが故に、痴呆狀を呈するといふやうに、病的なることが一見して判明する。(第一回参照)

第一圖



六二
腦下垂體の病的に肥大せる三十二歳の男子(大澤謙二博士に據る)其の巨大と衛榮狀とに注意せよ。

第二圖



松葉腺の障害せられたる小兒(大澤謙二博士に據る)其の發育の良好にして伶俐さうな狀貌に注意せよ。

然るに松葉腺は、腦下垂體と反對の作用を營みて、身心の發育を制止するものなるに依り、幼時に於いて、松葉腺が疾病の爲めに障害せらるゝときは、早熟して體は大となり、随つて精神も、性器もよく發達して、大人の如くなること、前に述べたる如である。(第二圖参照)

尙、松葉腺の障害より來たる早熟の例は、辨保三郎博士の著書に五例ほど出て居る。其の中アイスカナズイ氏の示したものは、九歳の男兒で、松葉腺畸型腫のために五歳の時から、既に成年の外貌を呈し、身長は一四三センチメートル(邦尺四尺七寸二分)體重は四四キログラム(邦量十一貫七百三十三匁)といふ體格に達し、随つて筋肉強く、精神も早熟にして、思考力は青年の如くであつた。其の他陰莖、鬚、腋毛及び陰毛等のよく發達せること、驚く許りであつたといふことである。

今一つは、ホツホワルド氏の擧げたものにして、四年六ヶ月の小兒である。此の小兒は、既に此の年齢に於いて、著しく性器の發育を遂げ、勃起力を有し、音聲は變調

して濁り、髪髯へ生じて、其の状恰も二十歳前後の、青年に匹敵する位の發達を爲した。のち猩紅熱に罹かつて、死亡したが、剖検の結果、松葉腺に畸形腫のあつたのを確めた。尙、此の小兒の早熟に就いて、驚くべきことは、其の精神能力の卓越したることであつて、極めて伶俐であつた。彼れは道徳上のこと、及び哲學上のこと、例へば死後の生活など、いへる問題に就いて、談論することを好んだ。ホツホワルド氏の説に依れば、彼れが漸く五歳の年を迎へた時は、精神能力に於いて、既に丁年期のそれと等しく、宇宙觀の解決に就いて、懊惱したといふことである。

女子に就いても、松葉腺の障害から、内分泌の旺盛を來たして、六歳或ひは八歳の時に、既に妙齡の處女の如き状態を呈したものの例がある。即ち性器の發達して、性交の可能となりしこと、月華の開通せること等にして、ワイダイエル、カールス、リエデオイス諸氏は、此れ種の少女を研究して、妊娠することも得べしと言つた。次ぎは文藝に現はれたる早熟の例にしてこれには、西鶴の一代男を代表せる世之介

がある。彼れは果して、實在の人であつたならば、何う考へても病的としか思はれぬ勿論周囲の影響もあつたに違ひないが、其の主原因は、腦の異常即ち松葉腺の障害から、身心に早熟を來たして、あのやうに多情多淫となつたであらう。此の世之介なるものは、七歳にして早くも色情を解し、而して同じ年頃の幼女を誘ひ出しては、女夫遊びにかこつけて、情を通ずるを手始めに、多くの女に關係し、又、同性を愛して、浮名を流したこと數知れぬ。其の六十歳にして、世を去るまでに、斯くして關係した女は、三千七百四十二人、男の數は七百二十五人であつたといふ。之れをもつて見ると、世之介が性慾に生活した年數、五十七年の間に、四千四百六十七人といふ、莫大な男女に接した譯である。

終はりに、早熟と天才との關係に就いても、多くの實例がある。特に天才と性慾或ひは戀愛とは、密接の關係があつて、ツルダネフ氏の説に依れば、非凡の天才は、早期に發するものであつて、従つて、性慾にも、早期に目醒むるものである。即ち五六

歳にして、已に戀を知るものであつて、而かも天才に富んで居る。例へば英國の詩人バイロン、伊太利の志士ダンテ、彫刻の大家カナヴァ等の如きで、バイロンの初戀は八歳の時に始まり、ダンテのビヤトリチエに、懸想したのは、九歳の時であつたといふことである。他にも思ふいふ例は多く、謂はゆる偉人にして、極めて早期に色情を悟る者が、文藝上に傳へられて居る。

併し醫學上より、嚴密に論ずるときは、斯くの如く、早期に發育を遂ぐるものは、全く例外にして、病的でなければ、精神上の畸形と看做さなくてはならぬ。何となれば生理學上より見るも、心理學上より考ふるも、腦の發育には、殆んど一定の秩序があつて、大體は身體の發育と相伴ふものなるからである。然るに早熟者、例へば彼の神童と稱するもの、如く、年齢に伴はざる能力を有する者は、疾病のために、特に腦力のみ特異に、發達したとしなければ、説明が出来ない。現に神童なるものには、成長後に至つて却つて平凡になるものもある如くて、其の疾病は、恐らくは松葉腺の、幼

時に於ける障害に歸するものであらう。

第四節 晚發と停止及び白痴

前述の早熟及び卓越に反して、茲に又、發育の極めて、遅く之れに従つて種々の現象を呈するものがある。即ち晚發、停止及び白痴の四種である。

晚發とは、發育の遅くして、發情期後或ひは丁年後に至つて、漸く發育を始むるものを謂ひ、停止とは發情期に達し、或ひは之れを経過したる後に於いても、其の身體及び精神に、何等の變化なく、依然として小兒の如くなるもの、謂ひである。之れを了解し易く言へば、晚發はおく出にして、病的といふ程ではないけれども、醫學上から言へば、矢張或る病的障害のために、發育の妨げられて居るものである。停止は之れと異なり、壯年に至つても、毫も發達することなく、多くは矮小なる侏儒、即ち俗に一寸法師と稱するもの之れである。次ぎに白痴は、精神能力の障害せられたものであ

つて、多くは停止と相伴ふけれども、時としては身體は普通にして、精神のみ低格なる者もある。

斯様に、晩發と停止とは異なるけれども、其の差異は程度の問題であつて、兩者共に其の病源に従ひ、適當の療法を施すときは、治癒し得ること、必ずしも困難でない何となれば此れ等の不具白痴の原因は、前に述べたる如く、内分泌腺の異常或ひは障害に因るのであるから、それ等の腺より、製出したるエキスを注射するときは、其の缺乏したる腺の内分泌を盛んにして、普通の状態に恢復することを得るからである。晩發、停止及び白痴等の、原因を爲す内分泌腺に、數種ある。其の中の主なるものを挙げれば、甲状腺と胸腺とである。左に筆路を改めて之れを述ぶるであらう。

第五節 甲状腺及び胸腺の障害より來たる發育不良

順序に、甲状腺から説きやう。甲状腺は喉頭の下方、氣管の兩側に存在する、楕圓

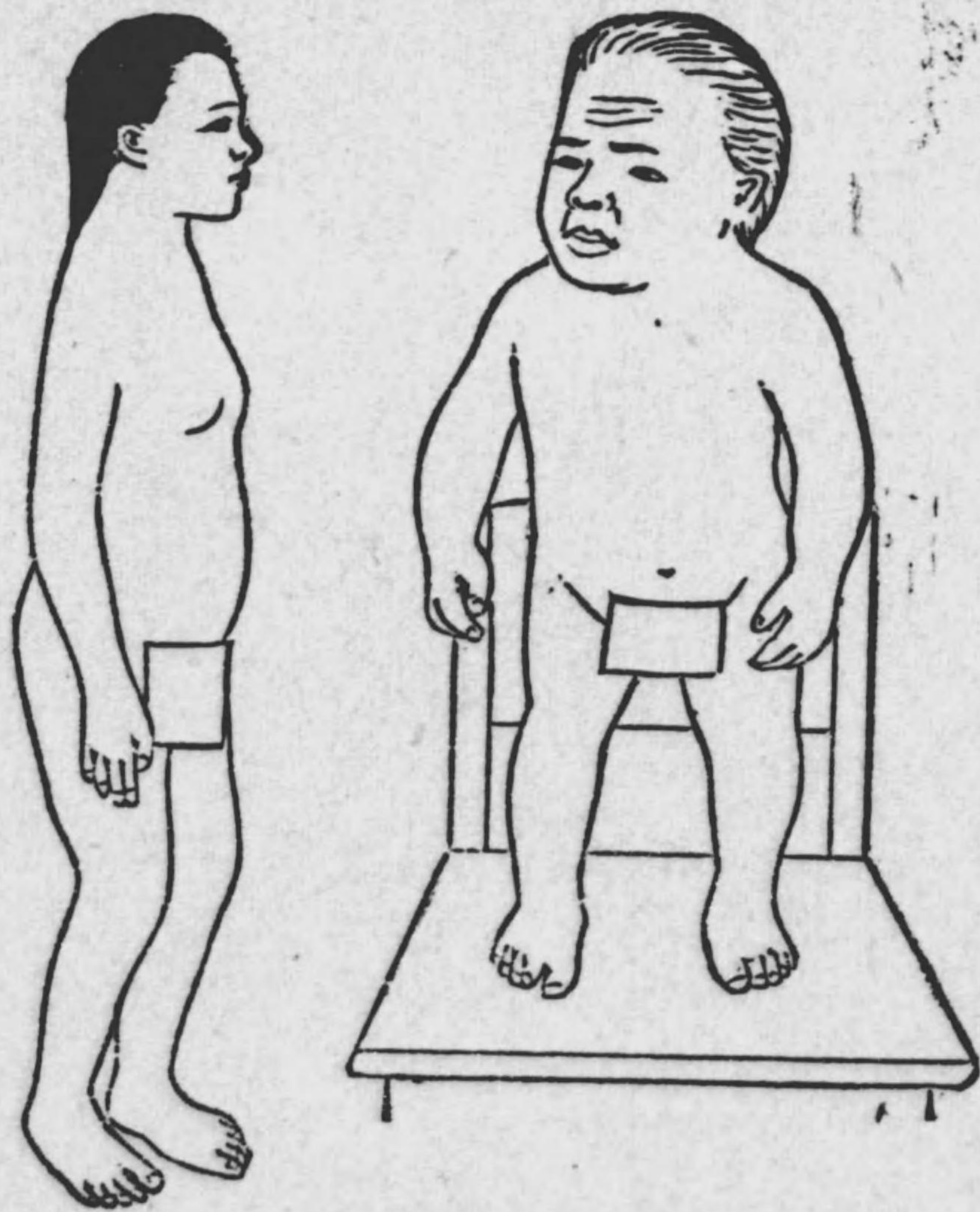
大の腺であつて身體及び精神の發育を司るものである。即ち身長を伸ばし、骨の發育及び皮膚の營養を佳良くし、腦を健全にして、精神の働きを敏活にすること等は、みな甲状腺の作用で、性器の發育も、甲状腺の支配を受くるものである。

それで甲状腺の、發育が悪いときは、骨特に管狀骨(管狀を爲せる長き骨)の發育が害せらるゝ結果、身體が伸びないで、幼少時の状態に止まること、第三圖に示せる如くである。侏儒即ち一寸法師といふのは是れで、身の長け三尺位のものが多い、甚だしいのになると、二尺に満たないものもある。(侏儒には、佝僂病から脊椎の彎曲して成れる者もある。)

次に皮膚の營養が害せらるゝために、全身の皮膚は光澤を失ひ、毛髪は赤く、或ひは白く變じて脱落し、性器は男女共に矮小にして、小兒の如く、精神は低能にして痴呆に陥るのである。

恚ういふ症状の、甲状腺發育不全から起るところを見ると、甲状腺の内分泌が何

第三圖 右側の女性に甲状腺エキスを注射して成長したものを示す (二十歳の)



甲状腺の發育をせざる少女 (六十歳)

ういふ作用を營むもので、身體及び智力の發育と、如何なる關係を有するものであるかが、理解せらるゝであらう。それで甲状腺の罹り易き腫瘍、即ち甲状腺腫を治療するために、甲状腺を剔出する時にも、前と同様なる。而かもそれより一層著しき症

狀が起こつて来る。これには數多の面白い實驗もあるが茲では略す。

然るに甲状腺の發育不全、又は、甲状腺の剔出より來たれる身體及び、精神の發育不全に對して、之れを完全に治療する方法が、近來發明せられた。それは甲状腺エキスの注射であつて、甲状腺を他の場所に移植しても、同一の効がある。此の療法に使用せらるゝ甲状腺は、他の同種屬の動物から採つた、新らしいものであればよい。然るときは骨の發育が良くなつて、身長が伸び、皮膚は光澤を現はし、脱落した毛髪は生へ、精神も發育して、人並みの能力となる。第四圖は十六歳の女性に、甲状腺エキスの注射に依つて、發育したものの例である。

以上は、甲状腺の身體及び精神の發育に及ぼす影響を、叙述したものであるが、胸腺も之れに類似して、身體及び精神の發育と大なる關係がある。

胸腺の位地は、胸骨の上部の後方であつて、初生児の時から存在し、それが漸々發達して十歳から十五歳頃になれば、最も大きく、それ以後は發育を停止して漸次縮小

し、遂には全く消滅するに至るものであるが、時としては胸腺が普通より大にして、成人後も消滅せずに、存在することもある。然るときは、胸腺淋巴性體質と謂へる病弱の身となつて、種々の危害を醸すこと、近時の研究に依つて知られた。

胸腺の内分泌は、動物試験の結果、次ぎの作用を司ることが知られて居る。即ち幼動物の胸腺を剔出するときは骨の發育が害せられ、特に化骨力を失つて、軟骨のままとなる。化骨力とは、骨が石灰質を吸収して堅く緊張することの謂ひであるが、胸腺を除くときは、其の作用が無くなつて、骨が柔軟となる。俗に骨なしといふのはこれ、鳥にあつては殻の固まらない卵を産む。斯様に骨の發育が害せらるゝ結果、身體の發育も著しく妨げられて、成長しないやうになる。しかのみならず神経系の障害も甚だしくして、運動及び智力共に微弱となる。

人に於いても、幼少の際に胸腺の發育が悪いときは、動物試験と同様の現象を、呈することが知られた。即ち成長が停止して侏儒となり、骨が柔軟にして、屈曲し易く

運動は調和を失して、歩行困難となり、精神は遲鈍となり、性器の發育も止まつて、發情期の徴候の無くなること等は、甲状腺を剔出した現象と同一である。

第四章 發情期に於ける男女の性的特徴及び其の變化

第一節 男女の性的特徴とホルモン

發情期の特徴は、前既に説述せる如くであるが、便宜上之れを繰り返せば、内分泌腺より生ずるホルモンの作用に依つて起るるところの、身體及び精神の發育といふことになる。故に此の時期に達すれば、男女共に新陳代謝の機能が旺盛になつて、身體上及び精神上に、種々の變化が起こつて來る。此の變化はみな、ホルモンの作用に依るものであつて、男は男、女は女と、別々に促されたものである。之れを要するに

少年少女の児童期から、青春期に進み入る階段にして、其の主なる特徴は、身體の發育して性器の成熟を來たすにある。

尙又、内分泌腺が、初めて其の機能を開始するときには、これまで微小であつたところの、種々の器官が發育し、或ひは未だ無かつた器官の所に發生して來るものも多くある。例へば男子にあつては、喉頭の發育を來たして、音聲を變じ、又は鬚を生ずる等の類で、女子にては月經を開始し、乳腺の發育を促すが如き、みなホルモンの作用である。

斯くの如く發情期に入つて、身體に大なる變化を生ずるところを見ると、此の期に至つて、急に發育したやうに思はるゝが、其の實は然らずして、前々から準備せられてあつたところのゲームが、此の期に至つて、發育したのである。恰も春に咲く花が、前年から準備せられてあつた如くて、人體の器官も、男子ならば男子となるべく、女子ならば女子となるべき芽が、發情期に至り、ホルモンの刺激に依つて、初めて、

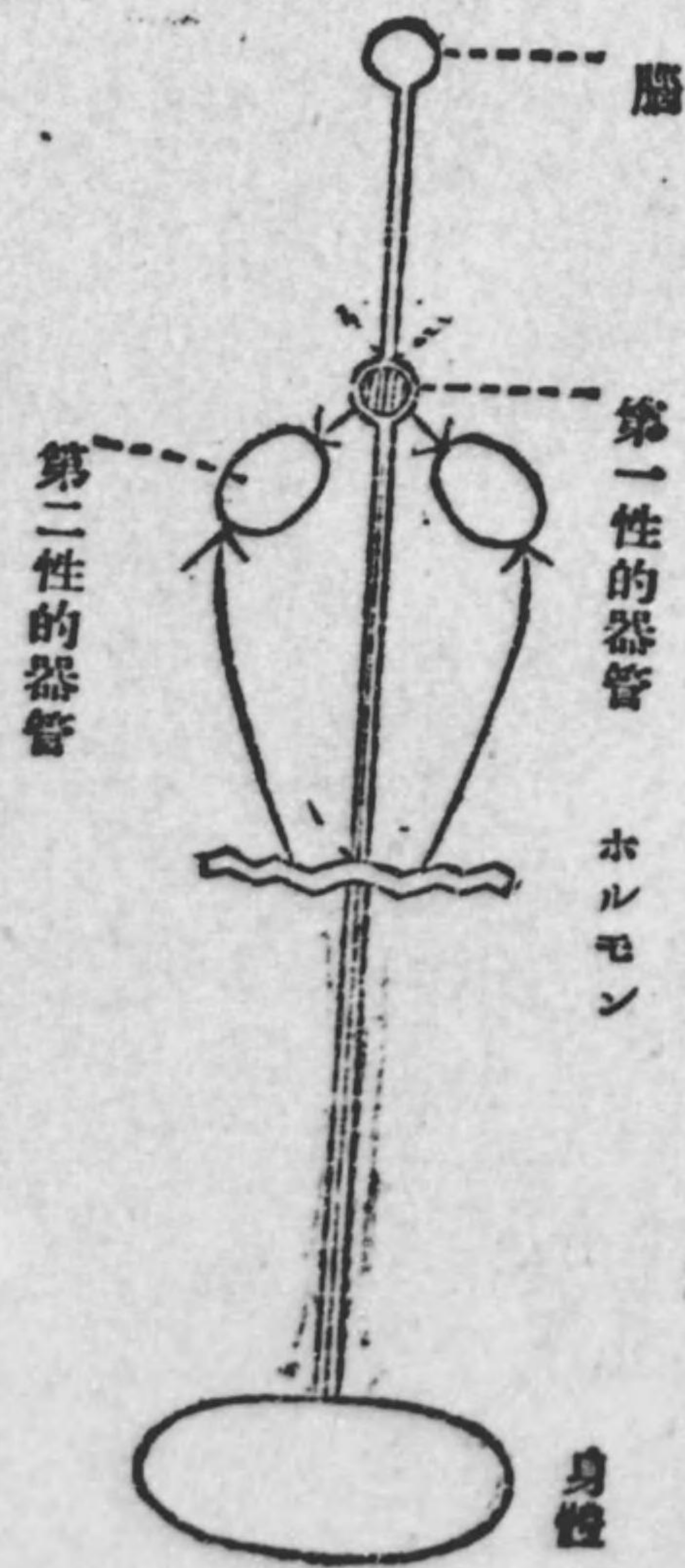
發育し、或ひは新に發生したのである。

注意すべきことは、此れ等の器官が、他の生活的器官と異なつて、性と密接なる關係を有することである。斯くの如き器官を總稱して、性的器官と名づくるが、此の性的器官に二種の區別がある。即ち第一性的器官と、第二性的器官とこれである。前者は男子の陰莖、睪丸及び攝護腺等、女子にあつては陰唇、膺、子宮、卵巢及び喇叭管等の如き性器であつて、後者は男子の鬚、女子の頭髮等の如き、裝飾器官となるもの、謂ひである。

それから第一性的器官には、又原發性器官の名があるし、之れに對して第二性的器官には、後發性器官の名がある。これ第一性的器官を基礎として、最初に生じ、第二性的器官は、後に至つて發生するからである。此の第一性的器官は、胚胎の際、胚種腺の進化に依つて、生じたるものであるけれども、第二性的器官は、生殖腺——胚種腺の分化して、睪丸（男性）又は卵巢（女性）となりたるものにして、胚種腺とは異なる。

る——の内分泌に依つて生じたる、ホルモンの刺激に依つて、發育又は發生したものである。故にホルモンの性的器官に及ぼす影響は、主に第二性的器官にして、鬚髯、陰毛及び乳腺等の如きものは、之れに依つて新に發生するけれども、生殖腺を除く

第五節
ホルモンと性的器官との關係



たる他の第一性的器官に對しては、單に其の發育を促すに、過ぎざること、第五圖に示せる如くである。

右の事實に依つて、ホルモンは性的器官の發生及び發育を司どること明白であるがホルモンは、如何にして此れ等の器官を、發生發育するかといふことは、未だ生理學的にも、化學的にも知ることが出来ない。併し發情期に際して、内分泌腺が其の機能を開始するに至れば、ホルモンの刺激に依り、其の部の細胞が分裂して、増殖するものなることは明らかである。尙、細胞の分裂は、核の作用と原形質の力とに依るものにして、生理的に自ら分裂するけれども、ホルモンの刺激がなければ、發育しないで原狀に止まることも、明らかである。これは生殖腺を除いて、内分泌の止まつた場合には、性的器官に障害を來たして、發育せざる事實に徴して、證明することを得る。是れに由つて之れを考ふれば、性的器官を組成する要素は、胚胎の初めより、既に存在して、細胞中に潜伏し居るが、それが發情期に至れば、ホルモンの刺激に依つて

男性は男性、女性は女性と、各々特異の形質を現はして、發育するものなることが知らるゝ。更に進んで、胚胎の源に遡れば、其の要素は、父母の生殖細胞に歸して、結局は系統發生的即ちフイロゼニカルに、祖先より遺傳し來たれるものなることが知られ、而してそれが全く疑ひなくある。

男女の性的特徴と、ホルモンの關係は、概要上述の如くであるが、之れを纏めて一言に約すれば、最初、父母の生殖細胞中に含まれたる、遺傳質に依つて、先づ第一に生殖腺を生じ、次いで外部生殖器の形成を完了したるのち、發情期に至り、更に第二性的器官を發育して、男子は男子らしく、女子は女子らしく仕上げらるゝのである。右の説明にて、性的特徴とホルモンの關係が、理解せられたならば、これより進んで、發情期に於ける男女の、身體的及び精神的變化に就き、論述しなくてはならぬ。それは次節に従ふ如くである。

第二節 發情期に於ける男女の身體的變化

發情期に於ける變化の第一は、身體に屬するものであつて、此の變化に解剖的、生理的との二様ある。これは男女共に等しくあるが、其の状態には男女異なるところがある。それ故兩者を比較して、之れを観察することは、興味多くして、青春時代の研究に資するところ多くあるに依り、以下順序に之れを説述しやうと思ふ。

それで此の變化を、先づ男子の方から記し始むると、其の解剖的變化として、主なるものは(一)身長の伸びること、(二)體量の増加して重くなること、(三)喉頭が大となつて、音聲を變化すること、(四)骨格及び筋肉の、著しく發育すること、(五)腦量の大となること、(六)皮膚の粗剛となること、(七)脂腺の發育して、面部に多く面皰を生ずること、(八)鬚髯を生じ始むること、(九)陰毛及び腋毛等を生じ始むること、(十)生殖器の成熟すること、(十一)精液中に精子を認むること等にして、みな代謝

機能の旺盛となれる結果、發育したのである。

併し代謝機能の旺盛となるのは、初め内分泌腺即ち甲状腺、胸腺、腦下垂體及び松葉腺等の作用に促されたためであつて、骨の堅硬となり、身長伸びるが如きは胸腺や甲状腺の力である。又、性器の如きも、畢竟するところは、此れ等の内分泌腺に依つて、發育したのが、發情期に至り更に睪丸の、内分泌によつて、上記の諸變化を生じたるものと、考ふべきである。故に發情期に於ける變化は、獨り睪丸の内分泌ばかりでなく、他の内分泌腺も、與つて力あることを知らなくてはならぬ。此の事實は、前章に述べたる内分泌腺の、動物試験に徴するも明かで、性慾と密接なる關係を有することは勿論である。

それから生理的變化に於いても、右と同じく旺盛なる代謝機能から、促されて起るのであるが、其の前に内分泌腺が作用して居るのである。其の變化の主なるものを舉ぐれば、(一)消化、吸収及び排泄諸作用の盛んになること、(二)呼吸作用の強くな

つて、炭酸瓦斯の排出量が増すこと、(三)血管が大となり、循環の良くなること、(四)尿量の多くなること、(五)體質の烈しくなること等にして、遺傳素質を有する者は、此の頃から現はれて、遺傳病となることが多い。例へば結核、腺病、近視眼、腋臭及び精神病等の如きこれである。

次に、女子の發情期に於ける變化を観るに、或る點に於いては、全く男子と同一であるが、或る點に於いては異なつて居る。其の解剖的變化に於いて、男子と異なるものを擧ぐると、(一)皮下に脂肪が増加して肥えること、(二)皮膚の艶麗となること、(三)頭髮の長くなること、(四)音聲の清く高くなること、(五)臀部の肥大すること、及び(六)乳房の豊かに隆起すること等にして、生理的變化には女子に固有する月經の開始を除く外は、すべて男子と變はりはない。

斯くの如く、發情期に於いて現はるゝ身體上の變化は、男女に依つて異なるのであるが、これは生殖腺より内生するホルモンが、男性なると、女性なるとに依つて、

其の作用を異にするからである、言葉を換へて之れを言へば、睪丸より内生するホルモンは、スベルミンと名づくるもので、獨り男性の特徴を發育するに止まり、卵巣より内生するホルモンはオーフォリンと稱して、獨り女性にのみ作用するといふことになる。これは甚だ興味あることで、詳細は次ぎの第五章に述べやうと思ふ。

第三節 發情期に於ける男女の精神的變化

發情期に於ける變化の第二は、精神界に屬するものにして、身體上に現はるゝ變化の如くに、目視することは出来ないけれども、併しながら精神界に起る種々の動搖は吾人の動作及び行爲となつて現はれて來るので、よく之れを觀察するときは、それに依つて心界に於ける變化の、如何なるものなるかを推察するに難くない。

そこで此の時期に於ける、心的變化の主なるものを類別して見ると、(一)羞恥心の發生して、不安を感ずるやうになる。これは性慾の萌芽にして、戀愛と結びつくこと、

(二)斯くして戀情を發して、異性を思慕すること、(三)同情及び友愛心の厚くなること(四)感情の變じ易くなること、(五)虛榮心の増長すること、等であるが、神経系統の障害から、精神に異常を來たすことも此の時期に多くある。

發情期が、一生の中で、最も危険であると、前に言つたのは、上述の如く身體及び精神上に、變革があるためである。今までは無邪氣であつた青少年少女が、物心の附き初むると共に、種々のことを覺え來て、周圍から感化され易くなる結果、不良に陥ることが多い。併し此の時代は、心智の啓發する時期であるから、導びきやうに依つては善良に向つて、有爲の人となるので、教育上最も注意しなくてはならぬ。

斯様な譯であるから、發情期に於ける精神は、何ういふやうに變化するか、其の狀態を考察することが必要である。試みに今、此の狀態を具體的に現はすと、男女共に舉止動作のすべてが、靜肅となつて、外見を飾るやうになる。此の外見を飾る心は、即ち虛榮心であつて、女子は、男子よりも強くある。次ぎに羞恥心のこと、前に一

言せる如く、性的色彩を含んで、異性に對するときに、著しく發するのである。人に負けないといふ心、即ち競争心や、功名心も強くなるし、男子にあつては冒險心が萌して来る。又、親、兄弟、姉妹等に對する愛情や、友人に對する愛情も發生するが、一方には猜忌、嫉妬の心が高まつて、人と争ひ、紛擾を醸すことが多い。犯罪學者の説に依れば少年少女の犯罪の中で竊盜、放火及び詐欺等の如き犯罪は、此の時期に多いといふやうな有様であるから、父母や、保護者や、教師等は、彼れ等に對して、其の曲つた心や、悪い癖は、十分矯正しなくてはならぬ。さうするには、良い習慣を與へて、第二の天性を造ることを、心掛けなくてはならぬ。

尙、教育上親子の關係に就いて、言ひたいことは多くあるけれども、問題外であるからこれは、別卷に譲ることにした。それから今一つ、發情期に於ける心的變化に關し、其の最も著しきもの、即ち感情の激變すること、空想の多きこと、及び虛榮心の強くなることの三問題は、節を改めて述ぶることにする。

第四節 感情の激變

感情の激變とは、精神の亢奮して、感情の變はり易く、而かも其の變化の急激なることを謂ふ。例へば笑つて居る下から怒り、喜びから直ぐ悲しみに移るといふやうに機嫌の變はり易い、俗に謂ふお天氣といふのである。此の變化の劇甚にして、常識に外れる者は病的で、警戒しなければならぬものがある。

斯くの如く發情期に、感情の激變するのは、如何なる理由かといふに、これは精神が動搖して、不安に襲はれ、落ち着きがない結果である。之れを發生心理學の方から言へば、今までは殆んど、休眠状態にあつた神経系が、初めての内分泌に眠りを醒され急に亢奮して、多少過敏となつた爲めに、外界の事物がすべて、新らしく反映して、刺戟するのである。それ故元氣もよくなつて、何でも試して見やうといふ心も起る。年少氣鋭といふのは是れで、此の時代の少年は、はやり氣に走る傾きがある。

それで極めて些細なること、常ならば何のこともないものでも、感情性となつて居る少年少女に於いては、無意味に之れを看過することは出来ないから、飽くまでも追究して、之れを明瞭にしやうといふ心から、衝突の動機となつて、喧嘩、口論を爲すことが多い。此の變化は、男と女と同様であるが、取りわけ女子は、本來感情に富んで居るので、女子の方は一層著しくある。

さて發情期に於いて、感情の激變を來たす場合は、極めて廣くして一々枚舉に違ないが、普通に多いものの第一は、朋友に對するものであつて、學校などでよく起る。次ぎは兄弟或ひは姉妹に對するもので、利害の衝突からは、骨肉の間でも爭論が起る。尙、父母或ひは教師に對しても、感情を悪くすることが往々ある。又、小僧や子守などでは、主人に叱られたのを含んで、主家に仇をするといふ者もある。其の仇には種々あるが、普通に多いものは放火で、これは弱者が、強い者に對して、報ずる唯一の手段である。放火犯を捕へて見ると、さういふ種類の者が多く、其の罪は大き

いけれども、動機は些細にして、取るに足らないのである。又、子守が主人に叱られると、其の怨みを子に酬ひて、之れを虐待する者もある。

右の事實に依り、感情激變の動機を類別すると、最も多いのは叱責で、次ぎは嘲笑、侮辱、それから説諭、忠告等となる。何人にも侮蔑せられ、或ひは嘲笑せらるゝときは、感情を害すること當然である。けれども發情期にありては、自己の失策に對して、長上より叱責せらるゝことも、不満不平に思つて、之れを怨み、甚だしきは好意的に注意せられたることまでも、不快に感じ、又は之れを誤解、或ひは、曲解して、感情を激することもあるは、前に一言せる如くである。

之れに關して面白い例がある。これは予の少年時代にあつたことで、今おぼろげに記憶して居る。

或る中學校の一年生に、假りの名山本といふ十三歳の少年があつた。學業は優れ、操行も良いのであるが、内氣の方で、悪く言へば卑屈であつた。其の學友に、戸川といふ同齡の少年があつたが、これも其の性質は山

本に似て、温順であつた。

それで二人の氣心は、すっかり投合して極めて親しかつたが、何うした理か、ふとしたことから、二人は急に反目して、今までの親友は、仇敵の知くなつて、互に諷刺、罵り、果てはつかみ合ひを、仕舞れまじき有様であつた。因つて常に温順であつた二人の性質は、此の時から急に變化して活潑になつたので、全級の生徒は何れも之れを不思議に思つて居たが、其の後二人は、仲直りをして、舊交を温めるやうになつてから、二人共に再びもとの温順なる性質に復した。

女生徒に就いても、之れに類似した例がある。これは或る人から聞いた話であるが、参考の價値があるから、茲に引用しやうと思ふ。

鈴子と妙子(共に假の名)となる二人の娘、十五歳と十四歳とで、某高等女學校の二年生であつたが、日常親しく交はり、校内にては勿論、退校の際にも、二人は必ず袖を連ねて、歸るといふやうに、極めて親密の間であつたが、何うしたことが、二人は少しいことから衝突して、急に仲が悪くなつてから、學校で顔を合はせても歸りに一緒になつても、一言を交はずで全く路傍の他人同様になつた。斯くの如く二人の少女は今までの親交を打ち破つて、態度の一變したのは、兩人とも偏執になつた爲めである。それで互に他の友人を

求めて、新に之れと交際を始めたが、兎角面白くないと見えて、兩女は申し合せた如くに、其の友人を棄て、再び元の摺りを戻したので、他の友達から排斥せられた。

斯様なる例は、女學校の二三年から、三年頃までの間に、幾ダースも發見すること出来る。之れを要するに、少女の心情は、秋の天の如くで、今日は晴れたと思つてる中に、曇つて來るといふやうに、定まりのないことは、恰も屋上の隨風鷗の如くである。此の變化は、環境より來たる誘因もあらうけれども、其の主なる原因は、發情期に於ける、精神的變化の然らしむるところである。

尙某小學校の教員の話に、女生徒は、表面には笑顔を裝ふて、友達の間は至つて親しげに見えるけれども、内心には感情の衝突が激しくして、甲さんが如斯言つたの、乙さんが如彼言つたのと、常に人の風評ばかりして居る。さうして悪く言はれた者は之れを含んで、復讐を企て、機會があれば、衆人萬座の中で、恥辱を與へるやうなことをして、それを氣の毒とも思はず、却つて其の苦しむさまを見て、喜んで居る。恚

ういふことは、男生よりも女生の方が、遙かに陰險で、執念深くあると。
 一般に女子の感情に富んで、少しのことにも亢奮し易いことは、前に言つた如くで
 此の心性は、中年になつても、老年になつても變はることはない。併し流石に自身を
 思ひ、又、周囲が考へらるゝから、無關心とはしないけれども、發情期時代では、
 前後の思慮なく、唯、一時の感情に制せられて、亂暴なことをするのである。
 性慾の心理を研究して、精神分析學を創定した、埃國の有名なドクトル・フロイド
 氏の説に依れば、感情を分析すると、其の底には性慾が潜んで居つて、種々に感情を
 繰るのである。それで感情の變化するのは、性慾の支配を受けて、喜怒哀樂の情を發
 するのであると。恐るべき嫉妬、憎惡、怨恨其の他の感情も、みな性慾を中心として
 發するのである。

第五節 空想と虚榮

空想とは、想像の一步進みたるもの、即ち全く實際と懸け離れて、實現せられざる
 ことを、想像することの謂ひである。例へば器械なしに空中を飛翔し、海底を潜行し
 或ひは一足飛びに數千里の先きに、達するといふやうなことを、思考する類である。
 又、貧困なる者が、千萬圓の大長者になつたならば、如斯しやう、如彼しやうと考へ
 るのも、此の一種で、取り留めのないことを想像するのが、即ち空想である。
 空想は何人にもあるけれども、中年以後の人は、餘り馬鹿氣たことや、大袈裟な考
 へは持たぬ。同じことを空想するにしても、理性に富んだ人は、道理に近いことを考
 へてそれを實現させるやうに、進んで行くけれども、發情期時代の少年少女は、そん
 な筋道の立つた考へはせず、たゞ何事も一足飛びに、出来ることを夢想して、獨り
 喜んで居る。

併し此の空想は、男女に依つて異なり、男生徒には、よく自分は、未來は總理大臣
 になつて、此の日本の政治を、掌中に握るとか、或ひは大ナポレオンの如き偉人にな

つて世界を一統して見せるとか、非常に大きな目的を立てる者が多い。或ひは又、自分には巨萬の富を造つて、友達を驚かしてやらうといふやうな、大きな考へをする者もある。而して、其の大臣大將とか、財産家とか、或ひは大學者といふやうに、目的の異なるのは、多く其の人の生活状態に關するのであるが、要するに、虚榮心から來たものにして、これが病的になると、誇大妄想となるのである。

又、女學生などには、日本一の女丈夫となつて、多くの婦人に、畏敬せられて、見たいとか、非常な財産家の夫人になつて、榮耀榮華に暮らしたいとか、或ひは交際界の女王となつて、華やかな暮らしをして見たいといふやうな、空想を夢みる者が多くある。女學校で時々試みるさうであるが、女生の將來の目的を、筆答させるのに依ると、上級生の答へは、一般に穩健にして、實際に近くあるが、二三年級の恰好發情期に際して居る頃の、女生徒の答へには、却つて大なることを望む者が多く、半ばは空想的のものであるといふことを、予は或る教育家から聞いたことがある。中學生などに

も恣ういふ傾向があつて、二三年生時代は、空想に満たされて居る。

注意すべきことは、空想と虚榮心との關係で、空想には虚榮と結び附いて發するものが多い。此の虚榮も、發情期に盛んである。虚榮とは外見を飾ること、即ち俗に謂ふ見えを張ることである。これは多く人の目に着き、よく人の心に止まつて、他人よりも一層よく、人に認識せられんと欲する情で、畢竟するところ、性慾の影響である。

虚榮心は、男子にも女子にもあるが、本來は女子の方が著しくある。而かも女子の虚榮は、物質的で、實價以上に、自己を重く見られんと欲するのであるが、男子の虚榮は、之れと異なり、多くは精神的に屬して居る。それ故男子は貧乏して居ても、心の裡では自己の技術や、能力を誇り、或ひは位地門閥などを鼻に懸けて、威張りたがる者もあるが、女子は知識や、學問で誇る資格はないから、身に着ける衣服や、裝飾品のやうなものでもつて、競争する傾きを有して居る。男子の粗末な服装をして、

平然と濟まして居る者の中には、心に錦を着たつもりで、居るものもあらうし、或ひは、未來の大臣大將を、夢想して居る者もあらう。斯かる種の者は、粗服を却つて一種の誇りとして居るのである。

併しながら世の中はすべて、物質的に流れて、精神の衰へて、行く今日の世にあつては、服装が社會の中心となつて、人格といふものは、服装に従屬するやうになつた。それ故服装が悪ければ、如何なる人も軽く見られ、服装が立派であると、猫も杓子も紳士と見られ、令夫人、又は令嬢とあがめられる有様だから、男も女も、競ふて身なりを飾ることに、苦心するのは、無理もないことであるが、併し予輩の如き舊式の目から見ると、何うしても沐猴にして冠するものと思はれぬ。千里眼ではないが、彼れ等の腹の中の空虚で、頭腦に蓄へのないことが、透いて見える。

往昔の學生は、蠻から頼もしがつたが、今日の學生は、顔に白粉を塗らない許りに、墮落して、女に好かれやうとして居る。頭からコスメチックを浴びて、いやに濟

まして居る其の柔弱さ加減は、眞に嘔吐を催すばかりである。これは現下に於ける、一般の風潮であるが、これがそもく、發情期時代から始まるのであるから、父母たるこのは、十分に注意しなくてはならぬ。

第五章 發情期と疾病

第一節 發情期に起こり易き疾病

人は疾病の器といふ如く、疾病に冒され易いものであるが、疾病には又、年齢に依つて、特に其の時に發生するものがある。即ち好んで幼年に發するもの、發情期に生ずるもの、多く壯年時代に發するもの、及び老年になつてから來るもの等で、之れを其の時代に從つて命名すると、幼年病、破瓜病、青春病、及び老年病となるが、今、茲に述べやうとするものは、破瓜病即ち發情期に起こり易い疾病である。

さて發情期と疾病との關係に於いて、其の最も著しいものは、何かと尋ねれば、遺傳病である。遺傳病とは、血族を追ふて傳ふるところの疾病にして、種類多くあるが、父母、祖父母、或ひは曾祖父母等に、若しも遺傳性の疾病があると、それが其の子、或ひは孫に遺傳して、發生するのである。

遺傳病の發現する状態に、大體三種の區別がある。即ち直接遺傳、間接遺傳、及び間歇遺傳であつて、其の發生する時期は、發情期に多い。けれども時としては、壯年或ひは初老の頃に至つて生ずるものもある。併しそれとても、發情期に萌發を始めたものであつて、一般に遺傳病は、發情期に現出し易いものである。

直接遺傳病とは父母又は祖先の疾病を、それと同一の疾病にて、遺傳するものを謂ひ、間接遺傳とは、主に其の素質のみを、遺傳するものを謂ふのである。次ぎに間歇遺傳とは、代を隔て、遺傳するものにして、これも多くある。例へば父の疾病が、其の子には遺傳しないで、孫に至つて遺傳するが如きこれである。

如上三種の遺傳に就いて、如何なる疾病がそれに屬するかといふに、諸種の眼疾(近視眼、遠視眼、色盲、夜盲、白内障等)、血友病、梅毒及び腋臭等の如きは、父母より直接に遺傳するものにして、結核、腺病、酒毒及び精神病等は、間接遺傳病に屬するものである。併し同一の疾病にても、體質に依つて變形し、或ひは素質のみを遺傳することもあつて、必ずしも一定して居らぬ。此の種ものは精神病に多くある。近時の研究に依れば、神經衰弱及びヒステリーも、遺傳するものにして、氣質なども、遺傳性の者は、發情期より濃厚となつて現出するものである。

それから直接遺傳は、父母の疾病を、其の儘遺傳するので、明瞭であるが、間接遺傳にあつては、多くは薄弱なる體質を享けて、生まるゝものであるから、抵抗力が弱くして父母の罹かりたる疾患に、冒され易くある。又、遺傳には、特に男性に發するものと、女性に來たるものとの區別がある。例へば色盲、夜盲及び血友病等は、殆んど男性にのみ遺傳し、萎黄病及びヒステリー等は、多く女性に遺傳するが如き。是れ

である。

尙、微毒に就いて一言することがある。微毒の傳染といふのは、其の實胎内傳染であつて、他の遺傳病とは、其の趣きを異にするけれども微毒の病原なるスピロヘータバルリダは、精子を介して、其の子に傳はり行くので、之れを遺傳の中に入れるのである。それ故遺傳微毒は、生後間もなく現はれ、或ひは發病しつゝ生まるゝのもある。これが即ち早發性遺傳微毒で、六七歳の頃までに現はれ、其の時期を過ぐれば、發情期に來ること多く、極めて晚發性のものには、二十歳以後に發することもある。斯様に、遺傳病又は遺傳素質の、發情期に發現するのは、如何なる理由かといふにこれは發情期には、身體に大なる變革を生じて、體質が變じて來る結果、體中に潜伏してあつた遺傳質が、發現に好機會を與へられた爲めである。肺結核及び癩病は傳染病ではあるけれども、遺傳素質を胎すものなるに依り、其の素質のあるものは、病毒に感染し易くある。それ故肺結核や、癩病の素質があつて、

之れに罹かるとすれば、多くは發情期から萌芽するのであるが、此れ等の疾病は何れも進行の遅いものであるから、症候の現はるゝまでには、數年を経過し、稀れには十數年を経過することもある。それ故誰にも之れが肺結核、又は癩病と判然知らるゝやうになるには、發情期後餘程あとである。

次ぎに發情期に多く生ずる疾病は、男子に於いては神經衰弱、女子にあつては萎黃病である。前者は次節に譲り、茲では後者を述べやうと思ふ。

萎黃病は、日本人には少ないから、注意されてないが、西洋では處女の固有病とまで言はれて居る。其の起こる時期は、大抵十四五歳であつて、二十四五歳に發することもある。其の原因は、月經の初潮に際して、多量の赤血球を失ふこと、コルセットを用ひて、血液の循環を妨ぐることに、及び發情期に於ける營養不良等であつて、赤血球の不足が、主なる原因である。

此の原因から見ると、日本の少女にも、萎黃病は多くなくてはならぬ理であるが、

其の然らざるは、コルセットを用ひないのと、も一つは、人種的關係も加はつて、稀なのであらう。それで上流社會の令嬢などで、常に西洋服を着馴れて居る者や、運動が少なく、且つ厚い帯で、胸部を緊縛する者などには、此の萎黄病に冒さるゝことがある。

第二節 神経衰弱とヒステリー

神経衰弱及びヒステリーも、發情期及び青春時代に、最も多く發生する疾患で、世に之れを、文明病と謂つて居る。といふのは、此の疾病は、文明の進むに従つて、増加する傾向があるからである。随つて文明の因子たる學生は、多く之れに襲はるゝから、學生病又は青春病とも、名附けられてある。

斯様に神経衰弱及びヒステリーは、青春時代に多く、且つ其の症候も、頗る類似せる疾病で、素人は勿論、醫師にさへ往々誤診せらるゝことがある。それでリヒテル氏

の如きは、此の疾患を同一のものとして、たゞ神経衰弱は男性に來たり、ヒステリーは女性を犯すものとして、區別した程であるけれども、神経衰弱と、ヒステリーとは、全く別個の病で、其の間に明劃なる區別がある。其の差異は、後に述ぶるとしやう。

先づ神経衰弱から言ふと、其の名の如く、神経の衰弱したものであるが、神経は腦及び脊髄を中樞として、一つの系統をなし、而して其の末梢は全身の各器官に終はつて居るので、中樞が衰弱するか、或ひは障害を來たすかすると其の影響が全系統に波及して、末梢器に異常を呈するのである。神経衰弱の症候は、即ちそれにあつて、其の現はるゝ異常は臓器に依つて一樣でないけれども、之れを要するに、身體的動作(營養及び運動)に痲痺の症狀を起こし、随つて精神上にも、同様の痲痺症狀を呈するのである。精神の衰耗して、思考、判断及び記憶等の悪くなるのは、精神が障害せらるゝ爲めである。時としては神経の過敏になつて、少しのことにも亢奮し、詰らないこと

を氣にして、懊惱煩悶するものも、みな神経衰弱の然らしむるところである。
 神経衰弱の症候たる痲痺と、過敏とは、生理上相反するものであつて、大變に相違して居るけれども、神経が衰弱すると、其の機能が弱はる結果として、過敏となり、それが重くなると、痲痺に陥るのである。故に過敏は、痲痺の先鋒とも謂ふべきもので、過敏の後には、痲痺が来る。元來神経機能には、刺激に感應する力と、一方には之れを制止する力とあつて、外界の刺激を、悉く感受するものでない。無論、重大なる刺激は、一々感應するけれども、些細なる刺激は制止して、成るべく神経を、餘計に働かせないやうにするのが、健全なる神経系の状態である。然るに神経系が衰弱すると、其の制止力が疲勞困憊して少しの刺激も、強く感ずるので、風にも雨にも驚くやうになるのである。

それで神経過敏の中は、まだ軽い方であるが、早晚、痲痺に襲はるゝ前提として、よく注意せねばならぬ。之れを例すれば、性器機能障害の中にて、甚だ多くあると

ころの早漏は、射精機能の障害 即ち過敏になつて、未だ佳境に入らざる前に、射精するものであるが、それが重くなると、陰萎となるが如きは是れである。

これから神経衰弱の原因と、其の發情期に多き理由とに就いて、述べやうと思ふ。原因は甚だ多くして、一様でないが、之れを大別するときは、先天性と後天性との二種に、包括することを得る。先天性は遺傳關係を有するもので、チーヘン氏は二百六十七例中、二百八例即ち百分の七八までは、遺傳性のものであることを確めた。此の中に父より遺傳せるものと、母より來たれるものと、又は両親より遺傳せるもの等の別あるが、母より來たれるものは最も多く、父よりのものは、之れに次ぎ、両親より遺傳せるものは、最も少数であつた。

後天性の神経衰弱は、生後に發生するものであつて、精神過勞や、諸種の疾病や、中毒や、反自然的なる性行爲、及び房事過度其の他であつて、發情期時代には、自瀆より來たるものが、最多數を占めて居る。ヘッスリン氏の調査に據れば、神経衰弱患

者九百六十三人の中、其の原因は次ぎの如くである。

原因	患者数	百分比
精神過勞に因るもの	一四四	一四、九
心痛及び憤怒に因るもの	一三〇	一三、五
自瀆妄行に因るもの	六〇	六、二
性器病に因るもの	四〇	四、二
急性病に因るもの	三九	四、〇
外傷(打撲、火傷等)に因るもの	三八	三、九
酒の濫用に因るもの	三〇	三、一
顔々の分岐に因るもの	三〇	三、一
胃腸の疾患に因るもの	二六	二、七
流行性感冒に因るもの	二四	二、五
荒淫過房に因るもの	二二	二、四

一〇四

身體の衰弱及び貧血に因るもの	一六	一、七
一般の慢性病に因るもの	一五	一、六
肥肝病の治療に因るもの	一〇	一、〇
失意若しくは無職業に因るもの	一〇	一、〇
身體の過勞に因るもの	九	九
驚愕憂愁悲哀等に因るもの	八	八
房事禁斷に因るもの	八	八
早期の月經閉止に因るもの	七	七
不適當なる教育(學科の過重、嚴格なる試験等)に因るもの	六	六
婚約に因るもの	四	六

右の統計は、男女を合併したもので、自瀆、若しくは過房より來たれるものは、割合に少ないけれども、チーヘン氏の説に據れば、二百六十七例中、男子の四十五例即ち百分の一六、九は、自瀆から來たり、女子も、同じやうに多いといふことである。

神經衰弱の發情期に多い原因は、これにて推知することを得ると思ふ。何となれば發情期には、男女共に自瀆を行ふ者極めて多いからである。諸家の統計を綜合して見るに、少年に於ける百分の九十九、女子に於ける九十七は、之れに耽けり、其の中の五分の一（百人中二十人）、乃至五分の二（百人中四十人）は、性器を害して、男子にあつては發育不全、早漏、陰萎、遺精等を招ぎ、女子に於いては不感症、膾瘻等々を發して、共に神經衰弱となるのである。

某病院の調査に據れば、神經衰弱患者中、其の九十人は性器機能障害で、予の許に質問し來たる神經衰弱患者は、百人中八十までは自瀆妄行である。神經衰弱を學生病又は青春病といふのも、決して無理はない。

更に、此の事實を證明するものは、神經衰弱と年齢との關係である。チーヘン氏の統計に據れば、一歳より八十歳までの中で、最も多く神經衰弱に罹かる者は、男子では十六歳乃至三十歳、女子では二十一歳乃至二十五歳で、其の内譯は次ぎの如くてあ

る。

年齢	男子	女子
一歳乃至一〇歳	二	一
一一歳乃至一五歳	一	一
一六歳乃至二〇歳	五	二
二一歳乃至二五歳	三〇	一八
二六歳乃至三〇歳	三〇	一六
三一歳乃至三五歳	二四	一六
三六歳乃至四〇歳	二六	一六
四一歳乃至四五歳	九	一一
四六歳乃至五〇歳	一四	一一
五一歳乃至五五歳	八	七
五六歳乃至六〇歳	三	二
一〇七		

此の表は、醫學博士前田珍男子氏の論文から、引用したもので、此れ等の患者は、醫師に罹かつた時の年齢であるから、其の以前に、胚胎してあつたことは疑ひがない。チーヘン氏は、右の内三十七例の患者は、十五歳以前に始まつたことを、確めたといふ。これに由つて見ても、神經衰弱は、發情期或ひは、其の以前に、發生を始め、それが青春時代に至つて、現出することが、昭々として明かである。

それから今一つ、神經衰弱に就いて、注意すべきことは、結婚との關係、即ち此の病氣は、既婚者に多いか、或ひは未婚者に多いか、といふことである。これも前田博士の論文に依れば男子では既婚者よりも、未婚者に多く、女子にあつては、未婚者よりも、既婚者の方に罹病する者が多くある。これは如何なる理由かといふに、性に對する男子の煩悶は、未婚時代に多く、女子は之れに反するからである。既婚といつても、若い中であつて、新婚の夢が醒める頃から、放縱な男であると、そろ／＼妻を冷

遇し始め、女で嫉妬心に富めるものであると、夫を疑ひ始めて、家庭に面白からぬ風波が、絶え間なくなる。或ひは又、新婚時代に享樂を食つた結果として、性器を害したのや、それやこれやで、女は娘時代よりも、妻となつてからの方が、神經衰弱に襲はるゝことが多い。次ぎに述ぶるヒステリーなども、女は未婚時代よりも結婚後に、之れに罹かることが多くある。

ヒステリーの原因にも、先天性と後天性とある。先天性即ち遺傳性を有するものをヒステリー性又はヒステリー性格の者と名づけて、身體及び氣質の上に、異常のあることが知られて居る。此の異常は、既に少兒の時代から現はるゝものであつて、さういふ小兒は、發育が遅くれ、或ひは時々痙攣を起こし、或ひは頭痛、眩暈があつたり、或ひは喜怒哀楽なく、我が儘であるといふやうな、状態を呈するのである。それが發情期の頃に至ると、症状が著しくなり、随つて今まで、氣の附かなかつた者まで、此の時代に多くなつて來るのである。

次に、後天性のヒステリーは、種々の原因から起るもので、これには性器病や、自瀆や、荒淫又は性慾禁断の如き性的關係、又は精神の過勞及び感動の如きもの、特に女子にあつては、月經、妊娠及び産褥等の如きものが、其の原因中に算へらるゝが或る學者は、此れ等の原因を、ヒステリーの誘因として、單に其の發病を、促すに過ぎないとしてある。是れに由つて之れを觀れば、ヒステリーはすべて、遺傳するものゝ如く思はるゝか、必らずしも然らずで、生來的にヒステリー性を有せざるもの、疾病や環境の如何に依つて、特發することもある。

●前に神經衰弱とヒステリーとは、類似せる疾患であることを言つたが、其の異なるところは、腦の病的に、變じた點にあつて、ヒステリーは純然たる精神病に屬するものである。次に男女の區別に於いては、女子に多く、男子との比例は、學者に依つて一様でなく、クレベリン氏は、女子の七に對し、男子は三なりといひ、チームゼン氏は、女の十七に對し、男は一の割合なりと謂つて居る。孰れにしてもヒステリーは

女子に多いけれども、男子にも往々發生する疾患なることを、記憶せねばならぬ。

それから必要なものは、ヒステリーと年齢との關係にして、青春時代の研究に、見落すべからざる問題である。ヒステリーは小兒にも發する疾病であることは、前に一言せる如くであるが、其の最も多く發生する時期は、發情期の前後である。言葉を換へて之れを言へば、身心の發育狀態が、急變する時代で、ランドチー氏に依れば、十六歳から二十五歳の間に發病するものは、最も多く、其の數は百分の三〇である。其の他諸家の統計も、之れと大同小異で、クレベリン氏も、十五歳乃至二十五歳が、最も多數であるといつて居る。

斯様にヒステリーが、青春時代にかけて多いのは、發情期の影響と見て差し支へなく、遺傳性のもものを除いては、性器の機能障害より來たる煩悶や、結婚問題や、或ひは孤獨の寂寥、悲哀、家庭の紛擾等、精神を過勞することが、甚だ多くある爲めである。それ故、妙齡の子女を有する父母は勿論のこと、學校當事者に於いても、之れに

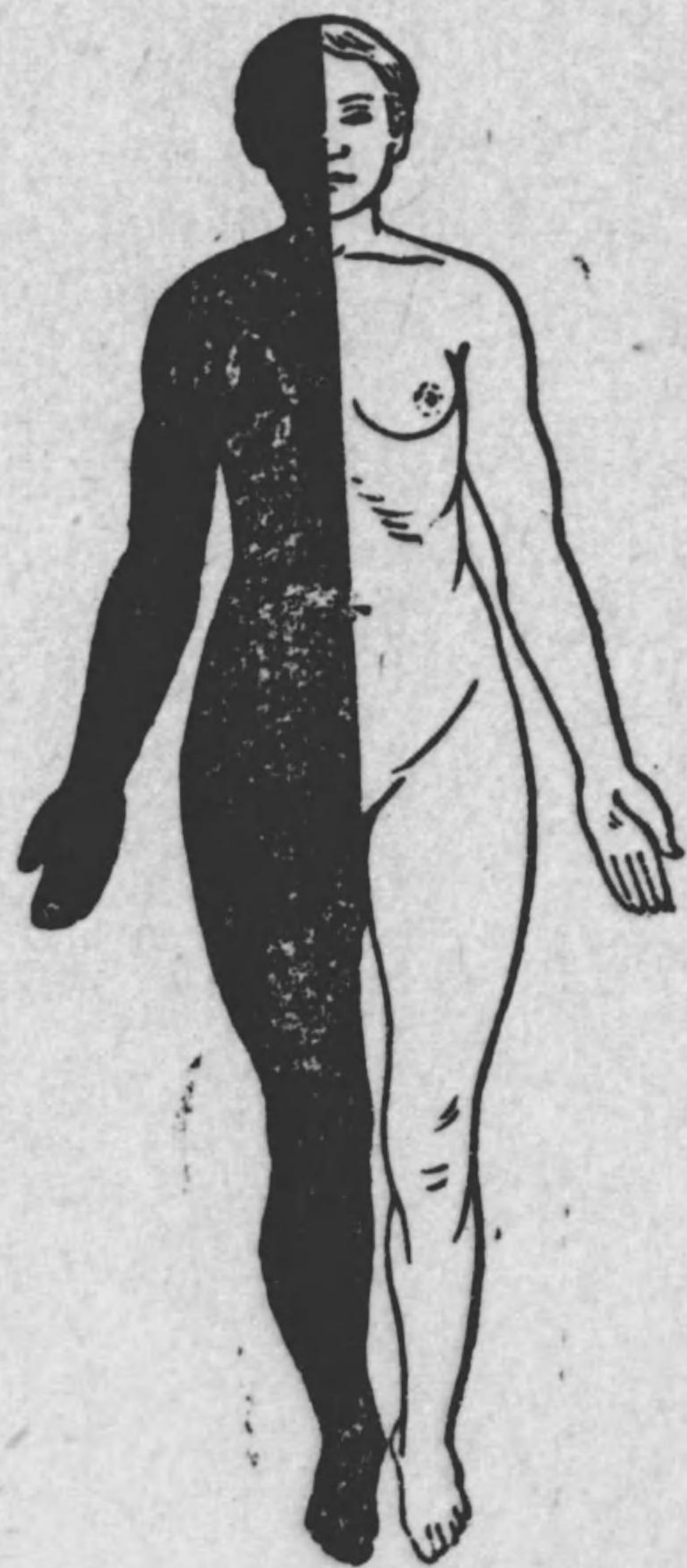
注意して、彼れ等の身に、愆ちなきやう監督しなくてはならぬ。



（るよに士學醫江杉）弓性 | リテスヒ

終りに、ヒステリーの症候中、其の主なるものに就いて、一二を述べやうと思ふ。ヒステリーの症候の中には、精神の上に現はるゝものと、身體の上に發するものとの二種あつて、兩者は、又各々種々の症候に分かたるゝが、激烈なるものになると、突然大痙攣を起こして、發作することがある。之れを全身痙攣と名づけて、恰も體操でもする時の如くに手足を伸縮し、或ひは全身を弓の如くに反らして、頭と足とで體を支へること、第六圖、の如くなるものがある。これはヒステリー性

第七圖



側反性—リテスヒ (氏江杉) 型模の失服覺感

弓といふが、又、皮膚の知覺に異常を來たして、半身の感覺を失ふこともある。

第七圖は、其模型を示したもので、之れをヒステリー性半側感覺脱失と名づくる

が、時としては其の反對に、皮膚の知覺が非常に過敏になつて、少し觸つても劇痛を訴ふる者もある。

第三節 發情期に多く發見せらるゝ性器病

神経衰弱及びヒステリーに次いで、發情期時代の男女に、多く發見せらるゝもの

性病で、之れを少年性器病と、少女性器病とに分けて、述ぶるであらう。
 少年性器病の主なるものは、陰基の發育不全——矮小——、諸種の畸形——包莖
 變位等——早漏、陰萎、遺精及び夢精等にして、此れ等の疾患は、壯齡になりても、
 同様に存するけれども、其の異常又は疾病に心着くのは、發情期時代で、予の許へ、
 訴へて来る性的煩悶者の大多數は、殆んどこれである。斯様な疾患であるから、予は
 之れを少年性器病と特稱したのである。

此れ等の性病には、先天性と後天性とあつて、發育不全及び包莖には、先天性に
 屬するもの多く、其の他は後天性にして、自瀆が其の主原因である。故に少年時代に
 於ける自瀆を禁ずるときは、獨り性病の豫防となる許りでなく、性病から影響し
 て起こるところの、神經衰弱及びヒステリーの、豫防ともなること、前に言つた如く
 である。

次に少女性器病には、月經性精神病と少女性婦人病との二種あつて、前者は月

經より來たり、後者は主に、性器の異常、或ひは其の疾患より來るのである。月經と
 精神病との關係は、別卷に譲り、茲には、少女性婦人病の主なるものに就いて述ぶる
 であらう。

少女の婦人病には、其の原因たる月經時に於ける不攝養、戀愛に對する背理的行爲
 等より來たるもの、外に、先天性に、或ひは特異の體質より、自發するものも尠なく
 ない。之れを類別すれば、子宮の轉位、發育不全、不感症、腔或ひは腔口の先天性異
 常、及び月經異常等にして、一般に虛弱なるものは、子宮轉位に罹り易くある。

これ虛弱なるときは、子宮の安定装置が、完全でないからである。子宮の完全装置
 とは、子宮を保持するに要する諸靱帶の謂ひにして、それが健全に發育して居らざる
 ときは、子宮は其の位置を保つことが、出來ないで、種々に變ずるのである。

注意すべきことは、此れ等の婦人病患者の、未婚である場合である。從來の思考に
 ては、婦人病といふものは、多くは結婚後に發生するものであつて、未婚の少女、又

は操行の正しい者等にあつては、罹病することは無いものと、信じられてあつたが、之れは大なる誤謬にして、實際は發情期の少女にして、婦人病に犯さるゝものが稀れでない。

それから前に一言せる、子宮轉位とは、病的に子宮の位置を變じたものであつて、

之れに前傾（第八圖）、前屈、及び後屈（第九圖）等、種々あるが、處女に現はるゝものは、大抵發育の障害に基因するもので、随つて月經に異常を來たすものである。

子宮の輕位に次ぐものは、子宮の發育不完にして、此の種の子宮は、先天に後屈して居る。其の發症は多

第八圖



子宮前傾
子宮の前方に傾いたもの

く發情期の頃で、上流社會の處女に多くあるが、其の子宮は腔の割合に甚だ小さく、

第九圖



子宮後屈
子宮の前方に傾いたもの

小兒時代の狀態に止まつてゐる。斯くの如き子宮を、小兒性子宮と稱へて居るが、症狀としては一般に發情期の遅くる、事と、月經の障害せらるること等で、結婚しても妊娠することなく、營養も不良となることが多い。第十圖は小兒性子宮を示

したのである。

第十圖



小兒性子宮

多いことは事實である。此れ等不感症に對する療法は、本叢書第一卷第五章第七節（〇八頁）にある。それから腔、及び腔口にも異常が多く、此れ等も、處女時代に多くあるけれども、其の發見せらるゝのは、結婚後である。何となれば女子は、受動的にして、其の異常が外部に現はれて、大なる障害を、與へない限りは、それと心着かずに経過することが多いからである。其中腔瘻撃と、腔口の異常とは、處女にも比較的認識せられ易くして、煩悶の原因となることが多くあるから、茲に之れを説述しなくてはならぬ。

不感症も多くある疾患であるが、その發見せらるゝのは、結婚後であつて、未婚婦には知られず、過ぐる事があるけれども、發情期の前後に、自瀆を妄行したものに

腔瘻撃は、其の名の如く、腔の瘻撃する疾患にして、原因は主として自瀆にある。即ち劇烈なる刺激の爲めに、局部に炎症を來たし、其の結果神経の過敏を來たしたものである。又、器質的構造としては、處女膜の肥厚、及び腔の狹隘等から、來ることもあるけれども、腔口の知覺過敏が元である。或ひは又、結婚するまでは、何事も無かつたが、性交の恐怖、困難等のために、誘發することもある。

本症の軽い者は、辛うじて性交を行ふことを得るけれども、重症なる者は、不能であるのみならず、少し觸つた許りで激痛を訴へ、懊惱の結果、ヒステリーとなる者もある。

次ぎに、腔口異常の主なるものは、處女膜の異常である。處女膜は腔口の前面に位置する、肉質の膜にして、幼稚の際は、之れにて腔口を閉ぢ、僅に其の中央に存する小孔にて、外界と通ずるのみである。然るに成長の後には、結婚にて破裂し、或ひは未婚にても、月經に對する手當を誤つて、紙片などにて腔口を栓塞することなどより、處

女膜を破ることも多くある。斯くして處女膜の破裂せる後は、處女膜痕と稱する痕跡を残して、膜は消滅するけれども、時としては異常の爲めに、其の破裂すべき時に、破裂しないものもある。

此の處女膜異常は、先天性にして、之れに其の膜が厚く、且つ堅くして破れざるものと、膜の柔軟にして、破れ難きものとある。又、膜が血管に富んで、出血し易きもの、或ひは膜に篩の如き細孔を、數多有するもの、或ひは全く無孔にして、腔口を閉鎖せるものなどもある。何れも性交を困難ならしむるのみならず、最後のものゝ如きは、經通を妨げて、代償性月經を來たすことがある。發情期にかゝり易き、女子のヒステリーには、恚うした異常や、性交不能、或ひは不感症等に、原因することの多きことは、既に述べたるところに依つて知らるゝであらう。臭れくも注意すべきは、發情期に於ける少女である。

右につき某婦人科醫の説に依れば、未婚の少女には、意外に婦人病が多くあるけれ

ども、それを家族が心附かずに居る。これは父母の不注意と、謂はねばならぬが、併しそれよりも妙齡になつて、少しのことも恥かしがる少女が、之れを秘密にして、父母にも、打ち明けずに居る爲めのものゝ方が、更に多い。それで父母は、其の娘に、未だ月華の通じないことも語らず、或ひは月經時に、疼痛のあることも知らず、或は白帯下のあることも心附かずして、他に婚嫁せしむることが珍らしくない。本來月經異常其のものは、既に婦人病であつて、輕視すべからざるものであるのに、娘から告白がないからと安心して、其の儘に婚嫁せしむるのは、誤れるの大なるものである。何となれば此れ等の月經異常から、他に波及して、取り返し附かぬ重症の婦人病となることが、決して少なくないからである。

斯かる悲惨事を思ふて、可愛い娘の將來を案ずるならば、嫁入り前に、一度婦人病専門醫を訪ふて娘の診断を依頼するがよい。尤も處女はすべてみなさうしなくてはならぬと、言ふのではないが、何人も身に病氣のある者は、顔色が悪く、肉は削げ、元氣

なく、食慾振はず、物事に懶く、疲れ易いといふやうな、症候を呈するので、誰にでも諒知することが出来る。特に尿意頻りに催し、尿後痛みを訴へ、下腹又は薦骨部が痛み、或ひは膨脹する氣味があつて、常に懊惱に閉ざれて居る者であると、それは必ず性器に、異常のある症候であるから、寸時も打ら棄て、置くことは出来ぬ。さういふ者は、縦令へ本人が、診断を拒んでも、父母たる者は、決して其の儘にして置いてはならぬ。妙齡の娘には、羞恥の爲め、婦人科醫にかゝることを、此の上なき恥辱として、診察を肯せざるものが多くあつて、それが亦、婦人の優美なところであるけれども、疾病の爲めには、羞恥も外聞も、顧みて居られない場合のあることを、能く訴へ諭して、醫師にかゝらせるのは、父母の義務で、且つ責任である。娘は之れに依つて、疾患を免るゝことを得るならば、これに増した幸福はなからうと。これからホルモンと、性的特徴との關係を述べやうと思ふ。

第六章 ホルモンと性的特徴

第一節 スペルミンとオーフォリン

予は前第四章第二節の終りに於いて、生殖腺より生ずるホルモンは、男女に依つて異なり、男性にあつては、スペルミンといひ、女性にあつては、オーフォリンと名づくることを一言したが、此の二つの者は、如何なる性質のものであるか、今や其の本體を明かにすべき時機に到着したから、茲に之れを説述しなくてはならぬ。

スペルミンといふ名稱は、睾丸エキスから製造したところの、藥劑に與へたものにして、睾丸の一分には違ひないけれども、睾丸ホルモンの全部を、差して謂ふのではなからう。先づ此のスペルミンを見るに白色の粉末にして、之れを顯微鏡下に檢すれば、光輝ある稜狀の結晶を爲して居るが、其の化學成分は、未だ審かでない。併し

睪丸の疾病を治療するため、或ひは其の他の事情に依り、去勢して無慾となつた人に注射するときは、其の性慾を發生して、去勢前の人と、同一の状態に復するので、醫者は之れを催春劑、又は強壯劑として、陰萎又は神經衰弱等の患者に、賞用して居ることは、普く知られたところの事實である。

併しホルモンは睪丸中に、如何なる状態にて存在するや、未だ知られざるところである。析出したるスベルミンは、稜狀體であつても、睪丸中にては恐らくは溶解して、存在するであらう。即ち睪丸液に混じて、淋巴の如く、滲透作用に依り、血液に入つて、腦及び其の他の臓器を、刺戟することと思はるるに依り、睪丸ホルモンを、假りにスベルミンと名づけた譯である。

次にオーフオリンは、卵巢エキスの製劑にして、卵巢ホルモンの一部であるけれども、卵巢中にあつては、スベルミンの如く溶解して、血液と共に、體中を循環すること疑ひがない。それに依つてオーフオリンを注射するときは、婦人性器の發育不全や不感症や、月經異常等を癒し、又、性慾を亢め、營養を進めて、健康を助くる等、諸多の效力を有すること、人の熟知するところの如くである。

オーフオリンの一種に、オポグランドールと稱する藥劑がある。これは胎齋品であつて、共に卵巢エキスから製したものである。我が國には、ルテインールと名づくるものが、製造販賣せられて居るが、これは牛の妊娠したる卵巢の、黄體から、析出したものであつて、スベルミン同様、醫界に聲價を博して居る。

然れども、近時の實驗に依れば、スベルミンにしる、將又、オーフオリンにしる、其の効果は一時的にして、永久に效果の保たれないのは、體中に入つて、一定時間を經過すれば、自然に消滅するからであらう。故にスベルミン及びオーフオリンをして、永く其の效力を維持せんとするには、頻回連續して、之れを注射するか、或ひは睪丸、又は卵巢のエキスを注射するか、或ひは新鮮なる生殖腺を、其の儘移植するか孰れかの方法を採らなくてはならぬ。然るときは、新なる生殖腺の増生に依り、内分

泌が盛んに行はれて、永くホルモン——睪丸或ひは卵巢の——を生ずる結果、其の効力は永久に消えることはないのである。此の事實は、現今行はる、スタイナツハ氏の若返り法、即ち輸精管の切斷、生殖腺の移植、又は同上腺エキスの注射に於ける實驗に依つて、甚だ明瞭である。(若返り法の大要は、本書第一卷附録にあり。参照するがよい。)

第二節 ホルモンの男女に對する二つの反作用

スベルミンと、オーフォリンとの性質は、略ぼ前節に述べた如くであるから、之れに依つて睪丸ホルモンと、卵巢ホルモンとの性情を、推知することが出来やうと思ふ。さて睪丸ホルモンは、男子にあつて、男子の性的特徴を發現し、卵巢ホルモンは、女子にあつて、女子の性的特徴を、發生するものなること、上來屢々論じたることに依つて、明瞭なる如く、實に生殖腺の効力は、偉大なものである。何となれば男の

男たり、女の女たる所以は、全く此の意爾たる、一塊の、生殖腺に依つて、左右せらるゝからである。性慾も、生殖腺より發することは、重ねて言ふまでもなく、實に生殖腺あつての性慾である。何となれば男女の生殖腺、即ち睪丸及び卵巢を、全部除去するときは、男女とも其の性的特徴を失ふのみならず、性慾を消滅して、男とも女とも附かぬもの、即ち中間性となるからである。故にホルモンは、精神的には性慾と、身體的には性的特徴とを、與ふるものであつて、睪丸ホルモンは、男子をして、男子たらしめ、卵巢ホルモンは、女子をして女子たらしむるものなることが知らるゝ。此の事實を今、少しく布衍して見やう。發情期に於ける少年少女の、體格及び精神の變化することは、既に説述した如くであるが、發情期以後に於ける、青春男女の特徵、即ち男の鬚髯を生じ、筋肉發達して、威ある風采を添へ、喉頭大にして、強力なる音聲を發し、勇氣に當みて、男らしくなる威容と、女の美しき容顏に、長き頭髪清き音聲、大なる乳房、それに優しき温情を加えて、女らしくなる嬌態とは、共に

各も成熟したる生殖腺より、内分泌するホルモンの作用に依つて、固定せられたのである。發情期以前に於ける男女の體格の近似して、大なる特徴の現はれないのは、生殖腺が未熟にして、内分泌が行はれない、爲めであるが、一たび發情期に達して、内分泌が始まると、生殖腺の機能の衰へざる限りは、絶えずホルモンを内生して、性的特徴の形成に貢献するのである。

是れに由り男子の性的特徴は、睾丸ホルモンの作用に依り、女子の性的特徴は、卵巢ホルモンの、力に依つて、構成せらるゝに至るのであることが知らるゝ。繰り返して之れを言へば、内分泌に依つて生ずるホルモンは、睾丸ホルモンと、卵巢ホルモンと、全く相反する特性を具へ、斯くして兩者は、各も相異なりたる體格——性的特徴と、精神——性慾——とを有するのである。男子の發動的にして、進撃の地位に立つのも、將又、女子の受動的にして、保守の地位にあるのも、みなこれから生ずるのであつて、ホルモンと性的特徴との關係は、甚だ面白くある。

右の事實に依つて之れを見れば、生殖腺より内生するホルモン、即ち男に働くところの睾丸ホルモンと、女に作用するところのホルモンとは、各も二つの相異なりたる作用が含まれて、而かもそれが男女相反して居ることが知らるゝ。此の相反する二作用といふのは、即ち建設作用と、制止作用とであつて、前者は、性的特徴の發育を促し、後者は之れに抵抗して、其の發育を抑制するものである。例へば睾丸ホルモンは男子の鬚鬣を生ずるけれども、乳房に對しては、之れを制止するに反し、卵巢ホルモンは、乳房の發育を促して、之れを膨大にするけれども、鬚鬣は之れを停止して、發育することなきが如きこれである。

就いて之れを詳言すれば、卵巢ホルモンは、女子に於ける性的特徴の、發育を促して、之れを建設すると同時に、他方にあつては、其の發育を妨げて、之れを制止せしむるのである。それ故女子の頭髮は、建設作用に依つて長くなるけれども、皮膚の方は制止作用の爲めに、發育しないから、女子の皮膚といふものは、小兒時代の皮膚と

同じである。即ち理細かく、柔かで、色白く美しくある。但し女の肌の、斯様に美しいのは、たゞに理の細かい許りでなく、其の皮下に、脂肪が厚く蓄積して、豊圓になつたからである。

謂はゆる曲線美といふのはこれで、其の美しき肌は、美術家の賞するところである。女を繪畫或ひは彫刻のモデルとして、完全なのは、容貌や姿の美しい外に、裸體にして見て、全身の肌が、美しくなければならぬ。これは女子に固有の性質であつて、男子には到底望むことは出来ぬ。何となれば男子の皮膚は、よく發達——建設——して硬く、理は粗くして、色素を多く含んで居るからである。

尙、ホルモンの二作用に關する事實は、甚だ多く、男性特徴と、女性特徴との區別は、みな之れに依つて生じたのである。少しく重複の嫌ひがあるけれども、之れを概括して、茲に述べやうと思う。

ホルモンの建設作用として、舉ぐべきものは、男子にあつては、鬚鬚の發生するこ

と音聲の太く濁ること、身長の高くなること、(女子に比して)及び筋肉及び骨格の發達して、強く、且つ全身稜角多くなること等にして、皮膚の粗くなることは、前に述べたる如くである。然るに女子は、全然之れと趣きを異にし、其の頭髮、乳房及び、臂部等が、著しく發達して居る。これみな建設作用の然らしむるところにして、睪丸ホルモンと、卵巢ホルモンと、如何に異なるかと、諒知せらるゝであらう。

次にホルモンの制止作用も、男女相反して居ることは、建設作用に於けるが如くである。先づ男子にあつては、乳房の微小にして、痕跡に止まること、骨盤の狭くして、臂部の小なること、或ひは脂肪の乏しきことなどが、取りも直さず睪丸ホルモンの制止作用から來たものと謂はねばならぬ。女子に於いても、筋肉の薄弱なること、體毛の軟弱にして、生毛狀に止まること、鬚鬚を生ぜざること、喉頭の發育せずして音聲の小兒に類似せること等は、卵巢ホルモンの制止に依るのである。女の肌の細かにして、柔かなることは、前に述べた如くである。

斯くの如くホルモンの作用は、睪丸ホルモンと、卵巢ホルモンとに依つて、全く相反して居る。男女の性的特徴の、相異なるのは、實に之れがためにして、其の事實を調べて見ると、甚だ面白く、且つ、これに深長なる意味の罩つて居ることが、了解せらるゝ。語を換へて之れを言へば、性的選擇即ちダーウキン氏の謂はゆるセキジュアル・セレクシヨンの然らしむるところにして、ホルモンはセキジュアル・セレクシヨンの上に、大なる關係のあることを忘れてはならぬ。

以上はホルモンと、性的特徴との、關係に於ける通論である。以下各論として、一々其の事實を、説述しやうと思ふ。

第三節 第二性的特徴の發育と制止

第一項 乳房及び骨盤

先づ乳房のことから言つて見ると、男子の乳房は、人類が哺乳類の一族として、先

天に遺留せられて來た乳房を、其の儘に保存したものであつて、少しも發育することのないのは、男性の睪丸ホルモンが、其の發育を制止して（原形）、痕跡に止まらしめた爲めである。然るに女子の乳房は、之れに反して、幼稚の際は、男子と同様に微小であるけれども、漸々に發育して、春情期の頃に至れば、半球の如き豊圓となるのである。これ女子には、妊娠、分娩して、子を育てる任務があるから、自然の用意として、卵巢ホルモンが、乳腺を刺戟して、之れが發達を促したからである。

次に骨盤が、男子の場合には狭小にして、女子の場合には、擴大であるのも、右の理と同一である。一體骨盤は、腰部にあつて、上半身を支持し、同時に下腹の内臓を保護するに、缺くべからざるものであるが、女子は此の外に、内性を包蔵する器官となつて、分娩と甚大なる關係を有するに依り、其の結果として、女子の骨盤は、擴大となつたのである。これ女子のホルモンが、其の骨盤に對して、之れが發達を促すけれども、男子のホルモンは、却つて其の發育を停止する爲めである。

發生學上の事實に依れば、骨盤は男女に依つて、胚胎の中から既に其の大小を異にし、女子の骨盤は、男子より少しく大きくある。して見れば骨盤の大小は、主に發情期の頃より生ずるホルモンの、作用に依ると許り、受け取られぬやうであるが、併しフィロゼニー Phylogeny 即ち系統發生の上から考へて見ると、人類のすべてが、悉く祖先の性質を繼承して、進み來たれるものであることは、進化論の教ゆるところで、其の性質の中の或るものは、先天性となつて、胚胎の中から、現出するやうになつたのである。

斯くの如く發生中に、子孫に遺傳して、固有性となつた性質が、即ち特徴といふもので、生物學者は之れを名づけて、先天性の特徴と言つて居る。骨盤が胎兒の中から男女に依つて、多少違ひがあるといふのは、此の理由にして、全く先天性の特徴に依るのである。

併しながら、更に一步を進めて考ふれば、獨り骨盤のみならず、他の器官にして、

先天に男女の間に差異のあるものに於いても、たゞ先天性の特質許りては、發情期に至つて、速かに著しく異なる男女の特徴といふものが、急に現はるゝものではない。何となれば小兒の時は、男女共に其の特徴が類似して大なる差がないからである。語を換へて之れを言へば、男女は先天性の特徴に依つて、生まれながら特異の性質を、帯びては居るけれども、發情期に至つて、ホルモンの刺戟がなければ、急に著しく發達することが、出来るものでない。

第二項 脂肪と筋肉

脂肪が、男子には乏しくして、女子に富んで居ることは、最もよく、ホルモンの刺戟を受けた結果と、看ることが出来る。蓋し脂肪は燃焼性にして、極めて不定のものであるから、食物や、運動の如何に依つて、時々變動するけれども、小兒の時は、一般に脂肪が饒多にして、男兒も女兒も、丸々と肥えて居る。然るに漸々發育して、發情期の頃に至れば、男子の、脂肪は減少すると同時に筋肉が充實して、強健となるに

反し、女子の方にては、脂肪が益々多くなりて、筋肉は發達せざる故、身體が肥満して、居る割合に筋肉が少ないのである。

食用として牛肉の美味なのは、牝牛と犏牛とであつて、其の肉は、軟かである。然るに牡牛の肉は、硬くして脂肪が乏しいので、美味の點に於いて、牝肉及び犏肉に劣ることは、何人も知る如くである。此の點に於いて女子と、小兒とはよく類似したもので、女子の身體は、小兒の身體を、其の儘大きくしたやうなものと謂ふも誣言でない。

男女の脂肪と、筋肉との割合は、脂肪に於いて、男の四〇に對し、女は六〇であるが、筋肉は、男の六〇に對して、女は四〇である。

第三項 皮膚の體毛、鬚髯及び頭髮

皮膚の理の、男女に依つて異なるのも、ホルモンの作用に關するのである。前章に述べたる如く、男子の皮膚は、粗鬆にして硬く、女子の皮膚は、理細かにして、而か

も滑かである。これは男の場合には、睪丸ホルモンが、其の皮膚を發達して、強固とならしむるに反し、女の場合には、卵巢ホルモンが、其の發育を停止して、小兒と同一の状態に止まらしむるからである。女子の皮膚は、小兒の皮膚と同じことが判明する。皮膚の附屬物たる體毛、鬚髯及び頭髮等も、男女に依つて、其の趣きを異にして居る。これもホルモンの影響と看なければならぬ。即ち男子の體毛は、太く粗くして、著しく目に立つけれども、女子の體毛は、細く軟かにして、生毛と異なるところはない。これ男子の體毛は、睪丸ホルモンの作用に依つて、發育したるに反し、女子の體毛は、發育せずして、小兒時代の體毛の儘に、止まつたからである。鬚髯も之れと同様で、男子の鬚髯は、年齢と共に、漸々發達するけれども、女子には或る例外を除く外は、鬚髯の生ずることはない。是れに由つて之れを觀れば、男子の特有なる體毛と鬚髯とは、ホルモンの建設作用に依つて、發育したことが明かである。

次ぎに頭髪は、男女共に存するもので、著しい差異はないやうに思はれるが、精密なる試験に依ると、女子の頭髪の方は、長さに於いて男子に超へ、其の量に於いても男子に優れることが知られて居る。これは獨逸に於いての試験であるが、我が國にあつても、女の頭髪は、男よりも長きこと事實である。これも卵巢ホルモンが、女子の頭髪を伸ばし、其の發音を助くるに反し、睪丸ホルモンは頭髪に對して、卵巢ホルモンの如く、著しくないからである。

尙、此の差異は、成長の後に至つて、愈々明かとなる。男子の頭髪は、初老の頃より脱落し始めて、五六十歳に至れば、禿頭となるけれども、女子に於いては、脱落することが少なく、而かも女子に依つては、老年になつても、毫も變化することなく、依然として若き人の、状態を呈する者がある。

生物學者の説に依れば、男子の男性的裝飾は、鬚髯にして、女子の女性的裝飾は、頭髪にあるが故に、男子の頭髪は、老ゆるに従ひて脱落し、其の代はりに鬚髯が多く

なりて、威嚴を添ふるが如く、女子の頭髪は、老年になりても、變ずること少なしといふことである。けれども、これとてもホルモンの助けがなければ、斯く都合好く行くものとは思はれぬ。

第四項 音聲及び身長

此の二つのものは、相互の關係がある譯でないが、便宜上一緒にしたまで、ある。男の聲の太く濁り、之れに反して女の聲の、清く澄めるのも、ホルモンの然らしむるところである。男の聲も、小兒の時代は清く鋭くあるが、發情期の頃から、喉頭が發育して、聲帯が長くなる爲めに、變化するのである。然るに女の喉頭は、發情期に至つても、容積に於いて、發育することなく、其の聲帯は、小兒のそれと大差がないから、女の聲は小兒の聲の如く、清く澄んで居る。

身長の大も、ホルモンの關係である。男子の長大にして、女子の短小なのは、性的來的であるけれども、ホルモンが作用しなければ、斯くの如く著しく、變はるもので

はない。何となれば男女の身長に、差異を來たすのは、發情期の頃からで、其の以前は、男女共大差のないこと。人の知る如くである。斯様に發情期以前に於ける。男女の類似して、特徴の著しくないのは、生殖腺が發達しないからであつて、發情期から其の特徴の現はれて來るのは、内分泌が開始せられて、ホルモンが作用する爲めであること、重ねて言ふところはない。

第五項 人工にて男女の變換する實驗

以上の事實に依つて、ホルモンと性的特徴との關係が、了解し得られたであらう。斯様にホルモンは、男女にあつて、各々性的特徴の發育を司どると同時に、一方に於いては、之れを制止するに依り、何時も男は男、女は女として、其の特徴を異にするけれども、それが男女に依つて定まるのではなくして、ホルモンに依つて、定まるのであることを、忘れてはならぬ。語を換へて之れを言へば、睾丸ホルモンは、必ず男にばかり作用するのではなくして、女にも同様に作用すると等しく、卵巢ホルモンも

女の外男に對しても、女に於けると同じく、作用するといふことになるが、これは動物試驗の結果、確定したのである。

是れに由り、ホルモンの源泉たる生殖腺を、去勢したる男女の體中に、移植すると

きは、随意に其の性を變換して、男を女に、又、女を男に變換することが出来る。これは甚だ興味ある問題で、スタイナーツハ氏は、次ぎの如き實驗を行つた。

先づ牝牡一對の、若き——發情期前——モルモットを去勢して、中性となつた牝に

牝の卵巢を移植し、牝には牡の睾丸を移植した。其の場所は、兩者とも、股の皮下で

生殖腺を取り換へた譯である。斯くして其の經過を見しに、牝の身體及び精神上に

現はる、特徴の、著しく變化して來たことが認められた。

之れを具體的に言へば、卵巢を移植した牝は、牡性——男性——を失つて、發情期

に到つても、陰莖は萎縮して、發育することなく——其の狀陰核の如し——攝護腺及び精囊の如きも、發育しないが、若し卵巢を移植するときに、子宮及び喇叭管を、一

緒に移すときは、それが都合好く發育し、乳房も肥大して、牝の如くなるのである。次ぎに睪丸を移植した方の牝は、牝性——女性——を失つて、牡性の發育を促し、其の際若しも陰莖、攝護腺及び精囊等を、同時に移植するときは、それ等は著しく發育するに反し、乳房は萎縮して、全く牡の如き状を呈するのである。此の他身長、體量、骨格等に至るまで、一變して、牝牡は其の特徴を換へることが知られた。

之れはホルモットに於ける、人工的性の變換であるが、同じ方法を、幼鷄に試むるときは、雄鷄は雌鷄に、雌鷄は雄鷄となること、ホルモットと同一である。即ち雌鷄には、鶏冠及び距を生じ、時晨を告ぐること、雄鷄の如くなり、而してもとの雄鷄にあつては、鶏冠小さく、距を生ぜず、時晨も告げざること、雌鷄の如くなる。これみな、ホルモンの作用に依つて起る現象である。それで睪丸ホルモンは、男性のみならず、女性に對しても、同一の作用をなし、卵巢ホルモンは、女性以外男性にも、同じ作用を呈することが知らるゝ。

面白きことは、生殖腺の移植が、身體上の變化を起すのみならず、精神上に於いても、大なる變化を呈することである。之れをホルモットに就いて徴すれば、牝牡の性慾が、生殖腺の轉換と共に變じて、牡は受動的となり、而して牝は發動的となりてもと牡であつたところの、變成牝を追ひ廻はして、之れを挑む狀甚だ奇である。此れ性的に、牝牡の精神を變化した爲めであつて、牡に變じた牝には、女性的性慾が無くなり、又、牝に變じた牡には、男性的性慾が無くなつて、兩者共に其の反對なる性慾が發生した爲めに、斯様な現象を現はしたのである。

此の實驗は、未だ人には試みられてないから、果して動物の如く、効果を奏するや否やは、疑問であるけれども、理論上及び少數の試験に依つて見れば、動物と同じ現象を、生すべきことは、斷言するを憚らぬ。現に疾病其の他の事情にて、去勢した男子は、多少女性化し、又、女子は男性化して、其の體格及び精神に、變化を來たすことは、古へより知られた事實である。尙、去勢しなくとも、老年になると、女でも肌

の理が粗くなり、聲は皺枯れて、男のやうになつて来る。これはホルモンの内分泌作用が、止まつて了う結果である。

第七章 青春時代に於ける性の煩悶

第一節 性的煩悶の原因及び其の種類

青春時代には得て起こり易き、特殊の性的煩悶がある。それは殆んど、青年男女に纏絡して居ると謂つても、よい位のものであつて、先づ其の原因から言ふと、先天性と、後天性との二種とすることを得る。前者は、生來のものにして、性器の發育不全及び異常——畸形——に屬するものが甚だ多くある。後者は疾患より來たるものであつて、之れに諸種の機能障害、神經衰弱及び不妊等の種類がある。

尙原因の原因に遡つて見れば、先天性には遺傳、胎中及び分娩中に於ける障害等より、來たるもの多く、後天性の原因と認むべきもの、大多數は、性慾の不満足で

ある。過去二年間に、予が許に、性の煩悶を訴へて來た青年男女の數は、無慮三千五百人で、其の内男は二千九百、女は六百であつたが、其の原因を見るに、先天性を除いては、殆んど自瀆で、特に自瀆より起これる神經衰弱は、百分の七〇を占めてあつた。其の外、男に欺かれて、操を汚した女、夫より慢性麻を感受した新婦などもあつたが、要するに性に關する知識の乏しい爲めに、知らず識らず自然に悖りて、災を招いたのである。

以下の二節に於いて、記するところのものは、性的煩悶の實例にして、性に盲目なる青春男女が、頂門の一針とすべきものである。

第二節 頑固なる慢性癩

青春時代に放蕩した者には、花柳病に罹かる者が多くある。斯かる者は、縦しや醫藥に依つて、一時は治癒に赴くと雖も、根治せずして、慢性となりたるまゝ、病毒の

永く潜伏する者も少なくない。さういふ者は數年を経て、結婚したときに、病毒が新婦に感染して、猛烈に其の身を犯すことがある。

茲に掲げたる例は、其の一にして、其の人は現に、某中學校に教鞭を執りつゝあるが、恐らくは昔の夢を、思ひ出して居るであらう。

例 O、N、文學士 三十三歳

財産家といふ程でもないが、生活に困らないので、存學中屢々花柳界に入つた。初めの中は、友人と行を共にしたが、後には自分獨りて、遊び廻るやうになつた。其の結果は顔面、麻痺に罹かつて、苦痛に堪えないので、恥ぢを忍び、密かに醫師を訪つることになつた。

醫師は一診して、治療を受け合ひ、一ヶ月餘りで全治を告げられた。併し此の腫病に取り附かれては、身の恥ぢ家の恥ぢと、流石に情るところあつて、それから心を改め、ふつと遊蕩を止めたので、幸ひ學業も下ることなく、首尾能く及第して、學士の榮譽を荷ふ身となり、或る職務に従事して居たのである。

それから一年後に、縁あつて某家の令嬢と、結婚することになり、茲に目出たく華燭の典を擧げて、當書の夢樂しく、旬日を送つたが、其の頃からして、花の如き新婦の顔が、着徳めて来た。艶かな色は消えて

何時も微笑みを見せる顔には、淋しき影が現はれて来た。愛嬌が無くなり、動作は不活潑となり、仕事もせず、鬱々として物思ひに沈む様子の尋常ならぬに、夫は痛く怪しみ、且つ奮いて、家庭の上は何か不調でもあるか、それとも里方に、何か問題でも起こつて、それを煩悶するのではないかと、懇ろに尋ね糺して見ても、何うも御座りませぬと許り、其の實を言はないが、容體は次第に悪くなる許り、さては幽鬱症か、或ひはヒステリーの故かとは思ふものゝ、まさか自分の古傷が起こつて、それが傳染したものは、考へも及ばなかつた。

それにしても心配に堪えないので、一應醫師に診て貰らうやうにと諭して、某醫師の診察を受けたところが、驚くべし急性瘧疾にして、尿道と膀胱とが侵されて居ると聞いて、夫ははつと胸を痛かし、さては七八年前の瘧疾が、根治せずに慢性となつて居たのが、妻に感染したのかと、始めてそれと悟つて見れば、不品行の罪の恐ろしく、身の毛もよだつ思ひをしたが、我が爲めに最愛の妻に、萬一のことあつては濟まぬと、醫師と相談の上、費用を惜しまず、最善の療法を竭くしたので、危き一命を取り返したといふことである。

斯くの如くして新婦は、一時放蕩であつた夫の、犠牲となつたが、幸ひに其の夫は妻を愛する情が厚かつたのと、責任觀念に富んであつたのとで、辛うじて助かつたの

であるが、不運な者は、夫の痲疾から子宮内膜炎となり、それが腹膜炎に變じて、遂に白玉樓中の人となるといふやうに、死の轉歸を取ることが少なくない。婦人病の多くは痲疾性であつて、少し手遅れすると、危険に陥つて、取り返しの附かぬこととなるが、憊ういふ夫の犠牲となる婦人こそ、氣の毒とも、哀れとも言ひやうがない。實際世間には、無情なる男があつて、結婚當座は睦しいが、妻が己れの惡病に感染して床に就けば、急に其の態度を變じて、之れを虐待するといふやうな、鬼畜に等しい者のあることは、往々耳にするところである。

右の如き家庭の悲劇は、最初婚約に當つて、其の選擇を誤つた點もあるが、一つは性病の如何なる疾病にして、如何なるところから傳染するか、其の知識に乏しい處女の罪も免れぬと謂はねばならぬ。それで結婚後に於いても、放縱なる男は、蕩婦妓に戯れ、或ひは妻を善へたりなどして、それから性病を受け、更に之れを家妻に傳染し、それが乳兒にまで及んで、一家性病となることもある。又、不品行なる夫が、清淨

無垢なる妻を、汚れたる病人と爲しながら、氣の毒とも思はず、却つて之れを虐待して、無情にも離縁した話もある。鬼か蛇かといふのは、憊ういふ種の人間であらう。

第三節 誤れる結婚より來たれる悲劇

概して浮薄なる男には、誠實の心なく、愛情もないので、結婚しても、妻を愛することなく、結婚當座は睦ましくても、暫時にして鼻につけば、忽ち地金を現はして、秋風を吹かせ、他に増花を求めて、之れを愛するに至るといふやうに、其の徑路は、殆んど千遍一律である。謂はゆる色魔であつて、此れ等は人間と思ふよりも、惡魔と思はなくてはならぬ。

併し如何なる者が惡魔であるか、之れを鑑別することは、世間知らずの處女の、到底及ぶところでないから、其の事に干與る父母の眼識にて、之れを看破らなくてはならぬ。併しながら父母と雖も、そこまで眼の届く者は、少ないので、往々偽君子に惑

はされて、取り返し附かぬ失敗を、招くのである。故に結婚せんと欲する青年男女には、豫め適當なる監督の下に、交際せしむることが必要であつて、彼れ等が互に相手の品行、及び性格を理解することを得れば、斯かる失敗を招くことは、尠なからうと思ふ。

恙ういふことは、結婚問題に屬して、其の方から論じなくてはならないのであるが、併し不幸なる結婚の爲めに、一生を誤る道程は、青春時代に多く、特に女子に多くあるところを見れば、性的煩悶の一種として、茲に掲出したのは、決して無用の談ではなからうと思ふ。それは嘗つて、某婦人雜誌にて募集した「不幸なる結婚に泣く婦人の告白」の一つにて、詐らざる某病婦人の告白である。文體も告白體であつたのを、改めて記事體としたのである。

例 あき子(假りの名) 二十一歳

あき子は某女學校を卒業すると、間もなく結婚した。其の人は、G、D、といふ兄の友人で、よく其の人と

爲りを知つて居るといふのを頼みに、何の顧慮するところもなく、嫁入りすることを承諾したのである。Dは隣村の酒造家の次男で、前年工科大學を卒業し、其の當時は郷下の某會社の技師長を勤めて居た。生家は近村にても、屈指の資産家であるが、田舎のことゝて、學士といへば、此の上もない偉い人と思ふて居るので、あき子は又とない幸福者と友達はもとより、村中の評判となり、あき子は羨望の的となつた。斯くして目出たく式を挙げたあき子は、前途望み多き夫に連れられて、上京したが、里の母は、年若い娘を案じて、物馴れた女中を一人附け添へた上、小遣ひとして、毎月百圓づゝ送金して呉れたので、西も東も知らぬ東京で、新世帯を持つ身となつても、少しの不自由も、不安も感ぜず、人々の噂さの通り、彼の女は自分ながら身の幸福を、感謝せずには居られなかつた。

併しながこの楽しい夢も東の間にて、一年経つか経たぬ中に、夫のDは、度々外泊りして、翌朝歸つたり、十二時過ぎに酒氣を帯びて、歸るやうなことが續いた。けれどもあき子は、日頃夫が口癖のやうに、自分は交際が廣いから、誠に迷惑するといふ言葉を信じ、何も彼も交際故と、餘り氣にも留めなかつたのである。すると當時、醫科大學に在學中なる、あき子の従兄が、何うもDは、少し遊び過ぎるやうに思はるゝから、注意した方がよい。でない、飛んでもないことに、ならないとも限らないと、忠告して呉れたので、或る日夫の顔色を窺ひ、それとなく意見をすると、彼れは目に角立て、小癪な、何を言ふ。俺には俺の自

由がある。自分の身體は、自分で見るから、黙つて居なさいと。大變な權威、立腹したので、あき子は其のまゝ口を緘して、其の後は、一言も口には出さなかつたが、心の憂悶は絶えなかつた。

然るにDの遊蕩は、愈々烈しくなり、二晩も三晩も續けて、家に歸らないやうなことが、多くなつた。花の都と言へば、田舎の人は憶懐るゝけれども、知らぬ土地に、誰一人語る人もなく、まして頼みに思ふ人は、つれないので、あき子は猪里から連れて來た女中を相手に、慰めたり慰められたりして、淋しい留守を守つて居た心の情けなさは、言ふばかりでなかつた。

時は稍々過ぎて、冬の休暇で歸省した從兄の口から、Dの行狀が洩れたので、あき子の父は、取るものも取り取へず、新年早々、東京見物といふ口實で、彼れ等の家庭を視察すべく上京した。滞在は二週間許りであつたが、其の間のDは、全く別人の如く、至つて眞面目で、歸宅の時間も正格に守つて、以前のD、Gと變はりがなかつた。あき子も其の頃は、既に妊娠の身であつたので、今に子供でも生まれたら、其の心も改まるであらうと、果敢なきことを頼みにして、父には何事も明かさなかつた。それ故父は稍々安心して、何事もなく歸國したのである。

ところが父が歸ると、Dの心がガラリと變つて、又々放蕩を始め、而かも一層烈しく、遂には夜更けて、藪者を連れて來るといふやうな、亂暴をした。其のうちには、同僚の細君から、藪者を落籍せらるゝといふに身を切らるゝ思ひをした。

あき子はたゞ獨り、悶々と誰に訴へる人もなく、悲しい月日を送つて來た。それもよいとして、彼の女の健康は、上京間もないうちから、次第に勝れなくなつた。多分土地の變つたのと、妊娠の爲めと許り思ひ込んで居たが、其のうち少し感冒の氣味で、四五日床に就くと、恐ろしい流産を起したのである。實家の母は非常な心配して、應々上京して呉れたが、娘が思ひの外衰弱して居るのを見て、大に驚き、専門の醫師に相談して、或る病院へ入院することにした。診斷の結果は、聞くも忌まばしい瘧毒にて、而かも最悪性と知つたときの驚き、涙も出ぬ程であつた。

悲しみと怒みと、一時にこき上げて、心狂はん許りであつたあき子は、母の慰めにて心長く、治療に手を講じた効もなく、病毒は益々猛烈な勢ひで、彼の女の體を、刻むやうに胃したのである。さなきだに弱き彼の女は、一日と衰弱を増して、果ては起き臥しきへまゝならぬ身となつた。けれどもDは悔ひるところか、見舞ひにさへ碌々來て呉れないので、母は非常に立腹し、返らぬ恩痴の數々を並べて、様々とDを責め立てたけれども、冷刻無情の彼れには、縁に釘で、何の反響もなかつた。

あき子は身も世もなく、いつそ自殺して、此の苦悶を免れんと、幾たび決心したか知れぬ。併し慈愛深き母の情に、泣々貧家へ引き取られ、醫師の勤むるまよ、草津の温泉に湯治を試みたのであるが、若い身で、斯かる病を得た取づかしさ。兩杖に漸く身を支へられた見瘡しい姿には、我が身ながら愛想がついたが、親切な女中の介抱と、一年一ヶ月といふ長い湯治ののち、二本の杖は一本で済み、不自由ながら、漸く歩行が出来るやうになつたので、一先づ郷里に歸つた。

さてあき子は、幽霊のやうな姿をして、草津から國へ歸つたときは、両親を始め召使までが、聲を立てて泣いた。あき子は層々死んで、親兄弟を悲しませる方が、生きて此のやうな醜態を見せるよりは、遙かに寧ろであつたかと、一人悲しく思つた。祖先より傳へられた清浄な血が、自分一人のために、汚されたことを思ふと、全くおめく生きて居る氣がしなかつたと、いふも無理はない。

今は別荘の奥の間へ、足の關節の曲らぬ不具の身を横へ、餘りの病苦と煩悶のため、強く内臓を胃され、死の宣告を受けたも、同様の身を厚き骨肉の情に守られ、二十四歳の若い身の不遇を嘆きつゝ、残り短からぬ生涯の終りを、せめて美しく送らうと努めて居るあき子、そして兵人の一日も早く、夢より醒め、傷つきし名譽を恢復し得て、將來の成功をするやうにと、薩ながら祈つて居るとは殊勝である。

思ういふ例は、よく聞くとところで、家庭の悲劇の起りには、其の源を多く、結婚前

に發することを知らなくてはならぬ。即ち學生時代に於ける、放蕩の記念なる性病の潜伏がそれであつて、前例のDGは、學生時代に、既に、毒者と馴染みを重ねてあつたやうである。それとも知らずして、輕々しく結婚を結んだ親達は、生涯の誤りで、あき子にも、良人を理解する明のなかつた失はある。

これは問題外であるが、斯様に配偶の選擇を誤るのは、日本では結婚を、親の意見に任かせて、肝腎の縁や婿を、度外して居る爲めである。此の弊害を防ぐには、結婚前に男女の交際を許して、相互に其の性質や、品格等に就いて、十分に知るところなからしめなくてはならぬ。

青春時代に於ける男女の、身體的及び精神的特徴、疾病、性慾とホルモンとの關係等は、以上の説述にて、其の要を竭したと信ず。これより性愛の内容に進み入つて、其の本性、本質及び價值等を明かにして、局を結ばんと欲するのである。

第八章 性愛の意義、要素及び近親に對する 戀愛の不成立

第一節 性愛の意義

さて性愛と性慾との異同、即ち其の差異と。關係とは、緒論に述べた如くであるが、概要に止めて、徹底した解決は與へてなかつた。併し大體に於いて、其の見解を二様に分けることが出来る。即ち性愛先發説と、性慾先發説とで、前説は性慾の上に立ち、超然として性慾を支配すると言ひ、乙説は之れに反して、性慾の超越を唱へ、性愛は性慾より出で、發展したものなることを主張して居る。

此の兩説に就いて、予は後説に賛成し、性愛は性慾より進みて、崇高優美なるものとなれることを信じて居る。之れを種々の方面より考へ、又、多くの事實を綜合して

見ると、何うしても性愛が性慾を基礎として、成立したものなることが、疑ひなくある。彼の性愛をもつて、甚だ美しく、且つ最も勢力あるものとして、世界を支配する動力と言つた學者でも、性愛が初めから性慾の上に立つて、働いたものとは言はぬ。性慾が理想化して、濃厚な情操と、優しき温情とより成れる、性愛を、育つるに至つたともいつて居る。して見れば性愛の源は、性慾にあつて異性に對する色情から湧き出で、愛ともなり、戀ともなつたものなることが明かである。

又、性器の不具なる者に、性愛の認め難きことも、緒論に説いたが、之れも事實にして、男子にては陰萎、女子にては不感症といふやうな者には、愛も戀もない。尤も病症の輕い者に於いては、縦令ひ性交は不能でも、其の夫或ひは妻に對する愛情には、變はりなくして、性慾以外に於いて、精神的に之れを愛する者もあるけれども、重症の者は然らずして、愛の源泉なる性慾が、消滅して居る結果、性愛も涸渇して其の妻又は夫に對する温情を、有せざる者が多くある。

然らばさういふ種の者は、何に依つて、夫婦となり。又は同様して居るか。甚だ不審しく思はるゝが、併し之れには、相當の理由がある。茲に一言を費さなくてはならぬ。

先づ第一に、考ふべきことは、陰萎又は不感症なる者の結婚である。彼れ等は最初より病的にして、身の不具なることを知り居るならば、結婚する理由はないけれども其の身の不具に、心着かず結婚したとすれば、甚だ重症なるものでないことは明らかである。又、心着かぬといふことに於いても、疑ひがあつて、女子ならば——受動的なるがゆゑ——其の身の不具が、自分に判明らないことも往々あるけれども、發動的の男子に、不具か不具でないか位——陽力の有無——の、解らぬことはない理である。故に結婚後に發見せらるゝ程度の陰萎、又は不感症ならば性交も不完全ながらも行はれたであらう。随つて夫婦の間に、相愛の情もあつたであらうと、思はれるのである。然るに結婚後に至つて、さほどでもなかつた陰萎、又は不感症が、重症となつて、

全く性交不能となり、更に進んで夫婦の温情を缺くに至つても、日本の習慣として、斯かる閨門の祕事から騒ぎ立て、離婚問題を惹き起こすやうなことを、敢てする者はないのである。西洋には怨ういふことから、夫は妻を、妻は夫を捉へて、直ぐ離婚訴訟を提起するものがあるけれども、一身一家の名譽を重んずる我が國の男女、特に女子は、閨門の暴露を、非常に恥づかしきものとして、一身を犠牲にするまでも、公然にすることはない。

之れに關しては面白き例もある。嘗つて不具の夫を持ちたる妻が、全く性の享樂を缺き、愛の光りにも浴せずして、人生の暗き、淋しきかげを辿りながかも、夫の身上を思ひて、之れを祕密裡に葬り去らんとしたが、一家の利權問題に關し、却つて夫の親戚から、訴訟を起こされて、圖らずも夫の祕密が暴露して、妻の苦心も、水の泡となつたことがある。それには種々の経緯もあつたが、檢索の結果、夫は性交不能にして、妻はたゞ置き物に過ぎなかつた。孤獨の淋しさにも増したる悲哀は、彼の女の

胸より、離れなかつたのである。

今、一つの例は、之れと趣きを異にし、夫の無能に身の不幸を啣ちたる妻が、性に目醒めると共に、性の享樂を得べく、自ら進んで、離婚を請求した事件であつた。場所には朝鮮で、男も女も鮮人であるが、人情には變りなき夫婦は、享樂も、愛情もみな、不能なる夫の爲めに破壊されて、一度も歡樂を味つたことはなかつた。此の訟訴には、判官も大に同情したけれども、結婚の目的は、社會を維持する爲めにあつて、性の享樂にあらずとの理由の下に、妻の敗訴に歸して、離婚は許されなかつた。あゝ、社會の維持！此の美名の下には、古へより、犠牲に供せられたる者が多くある。彼の女も其の例に過ぎなかつた。

併し性の歡樂も、愛の交換もなくして、一家が秋の風よりも、尙、冷かなる紛紜に掻き廻はされたる夫婦が、形ばかり繋がつて居るとも、それが果たして、社會の爲めになるであらうか。それは疑問であるけれども、法理上より人生の意義と、社會の成

立とを考へたならば、小の蟲は殺しても、大の蟲は助けなくてはならぬかも知れぬ。憊うなつて來ると、其の婦人の境遇と、事情とには、何人も同情の涙を、禁じ得ぬであらうけれども、廣く社會の上より觀て、性の歡樂は犠牲にしても、一家の維持に努めなくてはならぬ。人生の歡樂は、性慾にあること勿論であるけれども、それよりも尙、重大なことは、一家の平和であつて、それには一家族の愛が必要である。而して一家族の平和は、懸がて社會の平和となるに依り、社會の平和を求むるには、一家の平和に、俟たなくてはならぬ。これ予輩の、喋々するまでもなきことにして、社會は愛より成ると謂ふも誣言でない。

然るに自然主義者、若しくはその一派の論者に言はしむると、社會の基礎は、享樂にあつて、歡樂を交換するところに、國民は生きて居る故に、社會は性慾に依つて、結び附けらるゝものであるといふけれども、之れは餘りに露骨なる言ひ分にして、人生の眞意を竭くしたるものではない。國民のすべてが、歡樂を交換するところに、生き

て居るのは、取りも直さず、愛の交換に依つて、互に補助し合ふのに外ならぬ。愛より成れる社會でなければ、眞正の社會でないことは、これも明らかである。

如上所論の事實に依つて、夫婦の結合は、社會を秩序よく維持する爲めにあつて、單に性慾の享樂を完ふする許りでないことは、重ねて言ふ要はない。故に性慾の享樂以外に、愛の温情がなければ、眞の夫婦といふものは、出來ぬ理である。夫婦の和合親密を尙ぶのは、畢竟、社會を堅實にする爲めであつて、單に享樂を目的とし、本能を謳歌する自然派は、野獸主義に異ならないのである。性愛は、人類の主義にして、道徳を尙め、文化を助くるに缺くべからざるものである。性慾は、人生に胚胎して、抜くべからざるものであるけれども、之に性愛が加味しなければ、野獸的となるに依り、性愛は人を、靈的たらしむる唯一の大動力と、謂ふことを得る。

第二節 性愛の要素

重症なる、性交不能者にして表向き夫婦となり、而かも外面は平和にして、愛情の濃厚なる如く、見ゆるものゝ、世に尠なからざる所以の理は、前節の事實に依つて諒解せられたること、信する。

それから性愛の研究に於いて、必要なのは、性愛の要素であつて、性慾以外に、性愛の基礎を成すものがある。一體性愛の研究は、多方面に涉つて、複雑して居るが、先づ心理學から言ふと、意中の人——いとし可愛いと思ふ人——に對する性的感情、即ち牽引の情である。此の情は、性慾より來たるものに違ひないけれども、併し性慾の如くに、漠然と廣い性的觀念を謂ふのではない。たゞ意中に思ひ染めたる人に對してのみ、情緒を表現するのである。世に戀と稱するものが、即ちこれであつて、或る人に對する性的情緒をさして、戀といふことは、緒論に述べた如くである。

是れに由つて、性愛を構成する要素の、如何なるものなるか、伺はれる。性愛は限局的性慾にして、美的感情の外に、可憐といふ同情よりなるのである。語を換へて之

れを言へば、或る人の美容に牽引せらるゝ情と、之れを可憐と思ふ愛情とである。之れを具體的に言へば、異性の容貌や、風采や、氣立や、品格等が、己れの意思に投合した場合に、初めて戀情が生ずるのである。即ち女ならば顔容が美しく、なよやかにして、氣立の優しいのが、男の戀を引き、男にあつては、凛々しくして、如何にも男らしい風采を具へて居る者が、女の憧憬るゝ愛となるのである。ところで此の戀情は、異性間のみ發するものであるか、同性の場合には、如何になるかの疑問が起つて來るが、これも最初に考へて置く必要がある。性は、普通に異性間に起るものであつて、同性なる場合には、相反すること、性慾の場合に於けると、同一であるけれども、時としては同性間にも、異性に對する時の如く、性を交換することがある。併しこれは、同性愛に認むるところの、變態性愛に屬するものであるから、茲には略することにする。

それで性愛の要素は、性別を加へて、容貌、風采、氣立、及び品格との五種となる

が、便宜上之れを概括して言へば、次の如くである。

- 一、對象者の異性なること。
- 二、異性の容貌、風采の美に依つて、快感を生ずると同時に、之れに對する性慾を挑發すること。
- 三、斯くして生じたる性慾が、其の人に對する可憐可愛の情と結合して、性愛——戀——となること。

右の中にも、對象者の最も強く、牽戀の目標となるものは、容貌及び風采である何となれば初めに人の目に入るものは、容貌及び風采であつて、氣立や、品格等は、第二に理解せらるゝものなるからである。

さて性愛の要素として、異性に求むるところの希望は、男女に依つて異なるけれども、孰れにしても、第一に其の目標となるものは、容貌及び風采で、其の美に打たるゝときは、一目で牽戀して了うのである。而かも其の力は、非常に猛烈にして、恰も

矢を射るが如く、深く其の胸を貫くのである。戀は人を盲目にするといふのも、此の意味であつて、一度美しい、可愛いと思ひ込んで了へば、他の點までが悉く美化して、見へるものである。故にさういふ人は、他に少しの缺點があつても、美感が強く之れを牽引して、其の缺點を陰匿するので、其の人には見えないのみならず、却つて美しく見えるのは、俗に謂ふ菊面も、唇といへる心理と同一である。

斯様に、性愛の要素に於ける力の強弱は、前に列記した順序となるが、男女の性別に就いては、之れを除外する學者もある。何となれば牽戀する者は、必らず異性であつて、男から言へば女、女から言へば男が、牽戀の對象者とならねばならぬからである。併しながら一方には、同性に對する愛の如きものもあるから、一概に斷言するわけに行かぬことは、前に言つた如くである。

それで性愛が、特に異性の上に注がるものであることに就いて、茲に一言する必要がある。併しこれは、極めて踏易き道理にして、何等の疑ひもないけれども、例外

にしる、他に同性愛といふ變り者があるから、之れに對して異性と性愛の、自然であることを確定しなくてはならぬ。

前に屢々言つた如く、性愛は性慾から出發して、理想的に異性を牽引する情緒を、差して名づけたもので、自然の法則に適つて居る。何となれば生理上の要求より來られるとして、其の目的を遂ぐる爲めに、人は自己と性格を異にする異性と、結合しなくてはならないからである。然るに同性である場合には、其の目的を達することが出來ないから、容貌や、裝飾が異性のやうであつても、同性といふことが判明れば、百年の戀も醒めて了まふのである。これに關する面白き例が多くある。

第三節 近親に對して性愛の成立せざる原因

斯くの如く性愛は、異性に對して、自然に發するところの可憐情であるが、併し異性であつても、近親間に於いては、性愛の成立することは殆んどない。これに關して

説が多くある。モルガン氏の説に依れば、近親間の結婚は、生理上有害である故に、自然は之れを避けしむべく、彼れ等をして、其の戀愛を破棄せしめたのである。此の自然的放縱が、即ち近親戀愛の成立せざる、原因であると。メーン氏も之れと同一の説を述べた。

此の説は、果して事實であるや否やを確かむるには、先づ血族結婚の有害無害を、究知しなくてはならぬ。之れにも有害説と無害説とあつて、後説を唱ふる者もあるが、有名なる進化論の泰斗ダーウキン氏が、之れを生物界に於いて實驗せし以來、多くの生物學者が之れを研究し、醫師の方面に於いても、動物試験の上で、之れを證明したので、血族結婚の有害といふことは、一般に知らるゝやうになつた。法律でもつて、血族間の結婚を禁じたのも、恚ういふ事實があるためである。

然るに此の法律は、今日急に制定せられたのではなくして、頗る遠き古昔から、始まつてある。即ち歐洲にては、羅馬法で、レックス・ユリア法 Lex Julia の中に、親

族の結婚を禁ずる明文がある。後カール五世に至つても、ユリア法と同じく、近親結婚を禁じてあるところを見ると、血族結婚の有害といふことは、太古より知られて居つたとも言へると、論ずる學者もあれば、又、一方には、此の法律を道徳上の習慣、即ち人間を動物から區別する爲めに、道徳上に斯くは定めたものと、解する學者もある。

次ぎに米國の社會學者、ウエスターマーク氏の説に依れば、血族間の結婚を忌避する所以は、法律の力でなく、又、習慣や教育の結果でもない。要するに近親間の性愛は、本能の反抗に依つて、制止せらるゝためである。此の説に據れば、血族間の性愛は、自然に妨げられて、成立しないといふことになるが、其の理由は何であるか、ウエスターマーク氏は、之れを單に、本能の反抗に歸したけれども、恐らくは生理上の缺陷に、基づいたことと信ずる。

尙、これに關して、斬新なる説を出した學者は、ハヴエロツク・エリス氏で、恚う

いふことを言つた。夫婦が同棲して、馴れて来ると、互の特徴を認識する心が、漸々鈍癡して来る如く、血族間にては、殊に互の特徴を認識する力が、消滅して、其の戀が成立せぬと。

此の説を敷衍する前に、茲に謂ふところの特徴とは、何であるかを一言せねばならぬ。これは容貌、風采及び品格等、すべての美點のことであつて、此の美點が、戀愛の要素であること、既に述べたる如くである。而して美に對する異性の感情は、血族間にしろ、異族間にしろ、同様にして、變はりはないけれども、常に見慣れて居ると、否やとは、心理上大なる差あるものであつて、見慣れて居る場合には、平凡であつても、見慣れない人の特徴は、著しく目立つて、強く感情を惹くものである。彼の一目にて、戀する者の如きは、此の理である。

見慣れと特徴の鈍癡、之れに關する事實は、何人も經驗するところで、結婚當時に於ける、夫婦の愛情といふものは、蜜の如く甘く、火の如く熱くあるが、併し長い間

同棲して居ると、何時とはなしに、漸々戀の甘味が減じ、熱氣も次第に褪めて行くものである、と言つて、夫婦が反目する譯でなく、たゞ以前の如く、熾烈でなくなることは事實である。

これは馴れ合ひから来る鈍癡で、俗に之れを鼻に附くと言つて居る。憊うなると、今まで愛し合つて来た互の美點が、漸々に消滅して、平凡となる。即ち珍らしくなくなるのである。其の結果として血族間では、戀愛の情が、起こらないのである。道徳で人間を動物から區別する爲めに、肉身の結婚を禁じたのは、此の觀念があつて然る後のことであると、某氏は論じた。

以上は、何れも一理ある説で、中にもエリス氏の説は、甚だ面白くある。何となれば血族間に於ける戀愛の嫌忌を、珍らしくない爲めであるとするれば、同じ血族であつても、甚だ疎遠なる間柄であつては、戀愛關係の結ばることがあらねばならぬからである。例へば幼少時に、他家へ貰はれて行つた兄弟姉妹——恁ふいふ例は多くある

——或ひは遠方に居住し、或ひは親戚間の不和にて、絶交といふやうな、種々の事情にて久しく逢はなかつたとか、或ひは初めて面會したといふ場合に、若しも美しい特徴があつて、之れに牽引せらるゝときは、縦しや其の血族關係は知つて居ても、可愛の情が起つて来て、之れを慕ふやうになることがある。

さういふ例のあることは、古へよりよく聞くとところで、歴史上にては、文藝上人の前身なる遠藤盛遠が、姪の袈裟に懸想して、遂に之れを殺害したローマンスが、人口に膾炙して居る。而して盛遠の袈裟を見染めたのは、渡邊の橋供養の時で、それが初恋であつたらしい。

右の理を推して考ふれば、異族間であつても、日常親密に交際して居る男女では、互に其の特徴を認識する力が、鈍くならなくてはならない譯であるが、事實は之れに反して、さういふものほど、互に其の心を理解し合つて、深くなる傾きがある。西洋の結婚は、愛を主として、結婚前に男女の交際を許して居るのは、互の特徴を、深く

認識する爲めとしてある。(一五五頁を参照せよ)

是れに依つて之れを見れば、血族に對する戀愛の不成立は、珍らしくないといふ問題ではなくして、此の外に、原因がなくてはならぬ。それは何かといふに、羞恥心と不快の感情、及び血族觀念とであつて、此の三つのものに支配されて、血族の戀愛を卑しむやうになつたのであらうと思ふ。試みに此の心理を分析して見ると、血族は親の血の混じて居るものであるから、親に對すると同様に恥かしく、隨つて血族に對する戀愛は、不快の念を興ふるものである。

尙、血族觀念の中には、道徳的に養成せられて来たところの、習慣や教育が含まれて、羞恥の感情を嵩むることも、注意すべきところである。斯くの如くして血族に對する戀が、一般に成立しないのである。

第九章 性愛に對する強烈なる刺戟

及び性愛と言語との關係

第一節 性愛刺戟としての裝飾及び化粧

上文の理由、及び其の他多くの事實に依つて、戀愛は差異の多い點に於いて、最も強く牽き附けるものであること、明かであるが、尙、此の事實を證明する爲めに、同性の變裝及び化粧に對する、刺戟のことを述べやうと思ふ。

裝飾及び化粧より來たる刺戟は、強烈なものであつて、同性であつても、異性の服裝を爲す場合には、其の容姿に對して、戀情を發することがある。例へば男にして女裝するものには、同じ男性の者が牽戀し、之れに反して女の男裝者には、同じ女性に之れに戀有することあるが如き之れである。芝居の俳優で、それが男と知つても、其

の姿に恍惚となる者がある。

男裝の女子に對する、女の戀者も、右と同様であつて、女には男裝の女子を、慕ふことが多くある。今日では、女で男裝する者は、極めて尠ないが、昔には或る事情の爲めに、男裝した女子が多くあつた。例へば女人禁制の寺に於ける、小姓の如き其の一つで、黒田騒動のお秀は、むと紅葉上人の計ひで、小姓となつて居た。其の外、女の一人旅に出るとか、或ひは追手を逃れる爲めとか、さういふ場合には、故意と男裝することがあつた。それに就いて、恚ふいふ譚が或る本に出て居る。

昔、一人の年若き女が、家出した夫を尋ねるために、一人旅に出ることになつたが、途中の危難を避つて、男裝を爲し、腰に兩刀を差して行く程に、誰れとて男裝の女と、心着く者がなかつた。何れの宿でも、眞の武士と見て、懇ろの待遇に、幸ひ侮りを受くることになつたけれども、或る宿屋の娘に戀想せられて、切なる戀に掻き口説かれたのには、流石に堪へ難く、遂には我れと自ら其の假想を解いて、辛く娘を得心せしめたといふ。

是れは全く、容貌に牽引せられた戀情であつて、裝飾及び化粧に、偉大なる魅力の

單つて居ることが知らるゝ。女型俳優の素顔のときと、化粧したときは、其の姿が一變すると同時に、之れに對する感情も、異つて来る。前者の場合に於いては、同性として何の刺戟もないけれども、後者の場合には、異性の如く牽引せらるゝものである。役者買ひをする者は、必ずしも女許りでなく、中には歴とした男もある。さういふ者は、舞臺に出る時のやうに、女の姿をさせて、之れに接するのである。女でも男装の女を戀ふ者は、相手の女を矢張男装したまゝ、之れを愛するのである。斯様に、裝飾及び化粧から、同性を好愛するやうになるのは、同性愛の初歩と看るべきである。縦介ひ此の種のものも牽引は、たゞ化粧した時のみで、素顔の時には、無關係であるとしても、裝飾及び化粧の補助を藉れて、之れを好愛する情を生ずるのは、同性愛に向ふ一階段であらねばならぬ。

同性愛にも、重症なるもの、軽症なるもの、其の他種々の階級があつて、一樣でないが、化粧の補助は、何れの場合にも必要である。或る可成り重症の同性愛でも、

其の愛する同性を、異性と看立てる場合が多くある。例へば女性性愛にて、男性の役を爲す者と、女性の役を執る者とは、其の態度は勿論、化粧を異にして居るが如きことである。此の場合には、前者は男装を爲して、後者は普通女の服装をして居る。

元來同性愛は、一種の變態性愛にして、精神病學上倒錯に陥つたものであるけれども、異性の服装や、化粧等の刺戟から促がされて、來るところの同性愛は、極めて軽度のものである。變態性愛の方で謂ふところの、精神的半陰陽よりも、尙、低いものである。

第二節 プラトニック・ラヴ

性愛と性慾との區別は、既に述べたる如く、性慾には普汎的な性的感情の外、牽引する對象者は定まつて居らぬけれども、性愛には一定の對象者があつて、其の人の容貌や、姿が絶えず、己れの心鏡に映じて、瞬時も離れないのである。限局的と謂つ

たのはこれで、必ずし中意中の人が無ければならぬ。それ故性愛は、性慾の如く、色情を伴はないで、單に友人として起ることがある。例へば幼少年にして、未だ色情を解せざる時代に、夢の如く起る戀愛の如き、或ひは同性に對する戀愛の如きで、此れ等は、其の人の容貌と、風姿とが、たゞ何となく情を牽いて、慕はしくなるのである。

次に性愛と性慾と異なるところは、性慾は身體的の愛にして、性愛は精神的の愛なる點にある。容貌は、もとより身體の一部であるけれども、美の感情は身體の愛を牽引して、可憐と同情とを、昂むる手段となるのである。それで性慾は性交を目的として、其の結果は生殖に終はるけれども、性愛は、精神的愛を主として、生殖は必ずしも、其の目的とならざることがある。

性愛を性慾から分離して、全く肉の臭味を去つたものは、則ちプラットニツク・ラヴと稱するもので、其の肉の香りの無いところから、之に神聖といふ崇高絶對の權

威を與へて置くが、プラットニツク・ラヴは果して全く精神的のものであらうか。又果して肉體を離れて、全く靈的となりたるものであらうか。

プラットニツク・ラヴの説に就いては、異論が多くある。之れを是認する論者は、廣く古今東西の、歴史上に現はれたる哲人、傑士、高德の僧尼、或ひは貞女等の例を擧げて、其の生涯を、清く行ひすました事蹟を證して居る。此れ等の獨身者の中には、宗教的信仰、或ひは修道等の關係より、來たれるものもあるけれども又、全く性愛より入つて、純愛の極致に至つた者もある。平家物語に謳はれたる、瀧口時頼と横笛との如き、此の一例と看るべきである。

傳に依れば、時頼は小松内府の侍にして、武勇の譽れ高かつたが、一日建禮門院の曹子横笛を、垣間見てより、其の美貌を慕ひ、眷々として日夜忘れず、只管悶え苦しみが、父の戒しめに依つて、無明の迷ひを離れ、それより心機一轉、誓を絶つて、嵯峨の往生院に入つた。横笛之れを傳へ聞いて、世にも哀れなことに思ひ、其の跡を慕ひ、往生院を訪れたけれども、既に大悟して道に入れる時頼は、道徳堅固にして、

到底其の志の挽回すべくも見えなかつたので、横笛は、取り附く島も泣く／＼歸つて、壁を刺り、身を傷めぬの衣に更へて、奈良の法花寺に入った。時頼之れを聞いて、刺るまではうらみしかども梓弓

まことの道に入るぞうれしき

と置つて、之れを横笛に送つた。横笛之れに答へて、

刺るとても何かうらみん梓弓

ひき止むべきころならねば

と、返歌したといふ美談がある。

時頼の道徳は、佛教の力であるが、其の心理を分析して見ると、失戀から起つた強い反抗であつた。其の心の底には、精神的愛の潜んで居ることが、ほの見える。又横笛とても同じ心で、愛人に對する報謝の意が、罩つて居る。

次ぎに小野小町も、プラトニック・ラヴを守つた人らしい。小町の周圍には、常に多くの人があつて、我れ先きに之れを射落さんと、盛んに挑發したが、小町は頑とし

て、之れに應じなかつた。後人をして、「深草の少將を、百夜も通はせた」と、言はしめたのは、小町の堅き貞操を現はしたものであらう。

小町は何故に、斯様に貞操を守つたかといふに、これには彼の女が、女御を望んで居たからだといふ説と、兼平朝臣に思ひを寄せて、之れを戀して居た爲めだといふ説と、兩様あるが、何れにしても彼の女の戀が、精神的のものであつたことは、疑ひなくある。小町が兼平に寄せた、

思ひつゝぬればや人の見えつらん

夢と知りせばさめざらましを

といふ歌は、切なる戀をあらはしたもので、文屋の廉秀に對しては、

わびぬれば身をうき草の根を絶えて

誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

とかき送つたが、併し小町は、世人の思ふ如く、多情の女ではなく、寧ろ貞操の人であつた。

此の時代から、少し後れて、才名を轟かした一代の閨秀、紫式部―源氏物語の著者―も、貞操の人であつたと同時に、彼の女もプラトニック・ラヴに、其の半生を

捧げたことが知られて居る。

式部は、妙齡にして藤原宜季に嫁し、伉儷甚だ厚かりしが、宜季の没後は、寡居して再び嫁がず、亡夫の遺子、賢子——大貳三位——を鞠育して、只管其の成長を樂しみにしてあつた。後中宮の傳に選び出されて、其の師となつたが、時の權門藤原道長、之れを慕ふこと甚だ切にして、煩惱の羸弱絶えず、一夜ひそかに、式部の御り臥したる、渡殿を訪れて、閨の戸を叩いた。けれども式部は、故らに覺めざる眞似して、遂に起きなかつた。其の時の歌に、

たゞならじとばかり叩く水鷄ゆゑ

あけては如何にくやしからまし

とある。彼の女の如何に優しくも、其の成意の堅くして、貞操を守つたが、床しき限りである。

右の外、プラトニック・ラヴに、生涯を捧げた者の例は、少なからずある。吉野山にて、夫義經に生き別れたる静や、富士の裾野の露と消えたる、曾我兄弟の愛人虎、及び少將や、北越の足羽に戦死したる義貞の夫人藤原氏——勾當内侍——等は、みな其の半生を、プラトニック・ラヴに送つたものである。

以上は、精神生活を唱道する論者の説にして、愛の極致に達するときは、肉體を離れて、全く獨立することを得るといふのである。之れに關して、尙有力な説がある。それはプラトニック・ラヴの代價的快樂説にして、其の要旨とするところは、次ぎの如くである。

すべて人は、快樂に依つて生活するものにして、快樂は生命の燈火である。それで肉體の快樂を奪ふときは、専ら精神的快樂を取り、精神的快樂を失ふときは主として肉體の快樂に歸するといふやうに、快樂は交互に、補ふことを得るものである。之れを例すれば、目の見えない者は耳をもつて樂しみ、耳の樂しみなき者は、目をもつて之れに代ゆる如く、人には快樂を補ふ機能は、幾らもある。それと同様に、肉體的性の樂しみのない者は、純眞の愛を精神に注いで、自ら樂しむことを得るが故に、プラトニック・ラヴは性慾を離れて、獨立し得ること、必ずしも難くないと。次ぎの箇條書は、便宜上之れを概括したものである。